



京都舞扇

1.春に来る鬼

「ふわああああ…」

朝倉家の広大な庭の一角、よく晴れた休日、芝生の上に寝そべりながら、俺は思いきり伸びをした。

「気持ちいいなあ……このまま永久に眠っててもいいなあ」

俺の名前は滝志郎。時に『厄介事吸引器』とも呼ばれる。

俺が厄介事を引き起こしてるんじゃない。いつもそう思う。思うが人はそうは見てくれない。

そもそも俺が朝倉家に入ったのだから、『遊び相手』になってくれればいいと言う住み込みアルバイトに魅かされただけだ。なのに、いつの間にか事件に巻き込まれ、いらぬおせっかいを繰り返したあげく、気がついたら殺されそうになっていた。

俺は静かな生活を望んでる。飯が食えて眠るところがあれば十分だ。だからたぶん、ここでなくても、きつとどこでも生きてはいける。

にも関わらず、また『ここ』へ戻ってきてしまったのは、その『遊び相手』に引っ掛かってしまったからだ。

朝倉周一郎。

頭はいい。年齢十八歳。

見かけはそれよりもっと下、時に十五、六に見えるが、その実、幾つもの銀行と企業を抱える朝倉産業の若き当主だ。今のところは表向きには別の男が代表として立っているが、二十歳になれば名実ともに周一郎が朝倉家を仕切るらしい。

確かに、見かけはどうあれ、周一郎はそれだけの実力は備えている。基本スタイルの三つ揃いのスーツ姿は年不相応に似合っているし、目元に濃い色のサングラスをかけ、表情の読めない顔で淡々と事業内容を明確な論旨で展開する、なんてことも朝飯前だ。

いつもサングラスをかけてるのは『羞明』といって先天性の弱視からくる気分不快や吐き気、めまいなどを防ぐためだが、そのせいで一層近寄りがたく無表情に見える。まあ、それでなくても人を寄せつけない、そういう気配が満ち満ちてはいる奴だが。

だが、他の何より不思議で信じ難いのは、周一郎が、飼猫ルトの目を通して様々な情報を手に入れることができるということかもしれない。

先日まで朝倉家を騒がせていたのは当主大悟亡き後の相続問題だった。連続殺人事件の主犯として謂れのない罪を着せられて、危うく遺産争いの犠牲者となりそうだった可哀想な少年。世間は周一郎をそう見ている。ところが真実は、その仮面を見事に被りおおせて世間を欺き、大人達を影で操ってまんまと一人で朝倉家を手に入れたのが、その『可哀想な』周一郎だ。

そういうことができたのもその能力ゆえだ。

けれど、元々の性格もあつただろうが、そういう優れたあれこれの能力は人の裏側を暴くことにしか役立ってくれなかったみたいで、周一郎は人間というものをからぎし信じていない。米粒、いや何ミクロン以下の粒子ほども信じてない。周囲は全て敵だと思込でる。

よくない、と思う。

本当のねっことは優しいあいつが、それでいつもひどく傷ついてる、俺にはそういうふうに見えるから。

そう、見えてしまった。

そこに何だか引っ掛かって。

どうにもこうにも引っ掛かって。

離れがたくて。

何とかしてやりたいと思いつつ、いつも今一歩入り込めない。入り込めないまま、あいつの周囲でじたばたみともなくもがいてる。

それが今の俺だ。

お由宇はそこがあなたのいいところだとは言ってくれる。だが、他の誰の助けも必要じゃない、そういう顔で背中を向け、事実何とか一人でしのいでしまう周一郎を見てると、俺のやってることなんて余計なことなんだろうなと思う。

まあこうやって、一度は自分で追い出したのを、もう一回雇うぐらいには、周一郎は俺を気に入っているらしいが。

そして、それは高野に言わせれば『とんでもなく珍しいこと』らしいが。

ただな。

それにしているいろいろそっけないんだよ、あいつは。

あの屈折した性格が、もう少しましになってくれれば言うことなしなんだが……。

「誰が屈折した性格なんです？」

ぎょっとして目を上げると、頭の上に冷やかな顔をした周一郎が立っていた。

「あ、あはは～」

「こんなところに寝転んで、何をぶつぶつ言ってるかと思えば」

溜め息まじりに肩を竦めて見せる。

「いや、だからさ、春の日ざしは屈折率が高くて目に痛いなーと」

「……あなたにそういう科学的なことが言えるとは思いませんでした」

ほらな、そのあたりが屈折してるって。しかも、屈折してるうえに毒舌家なんだよ、こいつは。本音じゃないくせに。やれやれ。

胸の内では付け加えたことばを聞き取ったようにくすりと笑って、周一郎はゆっくりと隣に腰を降ろした。

あんまり運動したことがないだろう、男にしては華奢な細い体、眉にかかるぐらいの髪を軽く横分けに流し、カッターシャツにブラウン系三つ揃いスーツに同系色のネクタイ。

あいかわらず年齢からすればとても普段着に見えない堅苦しい格好、大人達とやりとりすることも多いから、勢いこういう格好になっちゃうんだろーとは思うけど、それにしても隙がない、なさすぎる。

鉄壁の守り、とか鋼鉄の淑女(?)とか想像しちまう。

それでも今日は久しぶりに仕事の手が空いたのか、珍しく周一郎はぼんやりした顔で抱えた膝に細い顎を乗せた。体を丸くしたせいかな、いつもより小さく幼く見える。

こうやって側に来るようにはなっただし、時々は今のような無防備な顔も見せるようになったものの、それでも一メートルは距離を置いて座るこいつが、今何を考えているのか、俺にはまだよくわからない。吐息まじりに起き上がって胡座をかき、俺も同じようにぼんやりとしばらく無言で居たが、ちらちら光る日ざしが動き回るのに気づいて周一郎を見た。

「大丈夫か？」

「え？」

「かなり眩しいぞ」

周一郎の羞明はひどくなると意識を失い倒れてしまう時もある。こういう温かな日ざしに寛げないのは辛いだろうなと思う。

「……大丈夫です」

俺を振り返りもしないで応えた目は遠い。実はサングラスを外すと黒曜石のようにきれいに澄んだ目をしているのだが、そこに無条件の安心や喜びが浮かんだのを、俺はまだ一度も見たことがない。

いつかはこいつの気持ちがおぼろげになる時が来るのだろうか。

少なくとも仕事から離れた時ぐらい、こいつが楽になれる日が来るのだろうか。

こうしていても、もう一つの視界で、ルトの鋭い視線の奥で、こいつは人の裏側を眺め続けている。たぶん、そこにある敵意や悪意を否応なく見せつけられて傷ついているはずだ。

きりきり張った緊張は生育歴から仕方ないにしても、どこかで緩められるところがあればいいのに。

たとえば、そう、俺と居る時ぐらい。

でも、それは俺が決められることでも強制できることでもない。周一郎に俺を信じろと命じたところで冷笑されるのがオチだ。でもって、俺は信頼するに足る人格者かと言うと。

……難しいよな。

我ながら自分がかかりして溜め息をついたとたん、

「坊っちゃん」

「どわ！」

いきなり背後から呼び掛けられて跳ね上がった。

「た、高野さん」

「はい」

「気配殺すのやめてくれ。心臓に悪い」

「申し訳ありません」

いや、全然申し訳ないなんて思ってないだろ、あんた。

そう突っ込みたくなる淡々とした顔で、朝倉家の執事、高野が軽く頭を下げた。

季節を問わずに黒尽くめのスーツ姿、いつも坊っちゃん一筋の初老の男は先代、つまり周一郎の義父、朝倉大悟の時から仕えている。

「お手紙がいくつか届いております……こちらは滝様宛で」

「あ、どうも」

居酒屋のDMに学費振り込み請求書、レンタルビデオの案内なんて、どっから俺の住所と名前を知ったんだ？

また宮田か？ 時々人の名前を無断で使うからな、あいつは。

うんざりしつつ中身を確認する。その横で、

「どんなものがある？」

周一郎はやっぱり振り返らないまま尋ねた。

「お仕事の内容は書斎に。お持ちしましたのは、パリの綾野啓一様からのものです」

「内容は」

「以前に京都のお母さまに扇を注文なさっておられたそうです」

びくり、と周一郎が体を緊張させた。

「由緒ある貴重なものなので、ご自分で受け取りに行かれるご予定でしたが、お仕事でご都合が悪くなられたと。代わりに受け取りと保管をお願いしたいとのことです」

綾野啓一？

どこかで聞いたような気がするな、と首を傾げていると、ふいに周一郎がちらりとサングラスの後ろからこちらを伺った。

「？」

なんだ？

きょとんとして見返したが、意味ありげな視線はすぐに逸らされてしまう。

「どういたしましょう」

「期限は」

「四月五日までにと」

また周一郎がちらりと俺を見る。

何だ？

何か俺に関係があるのか？

「周一郎？」

尋ねようとした矢先、周一郎は急にむっとした顔になって立ち上がった。

「わかった。出向く」

「し、しかし、綾野様は」

はっとしたように高野がうろたえた声を出して思わず振り返る。

主人に似て常時冷静沈着な男が取り乱すのは『坊っちゃん』の安全に関することだけだ。とすると、何か？ 扇を受け取ってくるだけというこの旅行に、何かまずいことでもあるのか？

眉を寄せて周一郎を振り仰ぐ。

「ここにいても、彼はいずれ来る」

まっすぐ前を向いたまま、周一郎が冷たい声で言い放った。

「怯えて待つ気はない」

『朝倉周一郎』が怯える？

んなもん、日本壊滅とかそういうレベルのものぐらいじゃないのか？

俺はなお顔を顰めた。

それとも、この旅行に、あるいはその綾野啓一に、周一郎が怯えるようなものが関わっているのか？

それは一体なんだ？

疑問符が頭の中でラインダンスを始めた矢先、ちら、とまた周一郎がこちらを盗み見て、ようやく、あ、と思

った。そうかそうかそういうことか。よしよしなかなか可愛いじゃないか。

ひとり合点で頷きながら、無邪気を装って尋ねてみる。

「高野」

「はい？」

「俺……一緒に行っちゃダメかな」

「は？」

高野と周一郎が同時に振り向いた。

「ふざけたことを」

嘲笑うように周一郎が一蹴する。

あれ？ 違ったか？

ちょっと怯んだが、言い出してしまったものは仕方ない。

「あ、いや、その、京都？ 一度行って見たかったしさ」

「遊びじゃないんですよ」

「邪魔しない」

「滝様、あの」

「面倒事も引き起こさない。誓う。約束する」

片手を上げてうなずいて見せる。

「でも、あの、旅費が」

「バイト代から引いてもいいぞ？」

「でも」

「だめか？」

「バイト代……なくなりますよ」

「あ」

それは痛いな。今月参考書も買わなくちゃならないし、合コンの幹事もあったような気がする。

「うーん」

女の子に積極的に誘いされない俺の貴重なチャンスなんだが。

悩んでると、つい、と冷たい顔で周一郎が側を通り過ぎながら吐き捨てた。

「どうぞ、滝さんは綺麗な女性と楽しんできて下さい。高野、一人分で手配しろ」

「え、はい」

「わ、行かないって言ってないだろう！ お前がいいって言わないから！」

「いい」

唐突にくるっと振り向いて、周一郎がまっすぐ俺を見上げながら言った。

「は？」

戸惑う俺にすぐ身を翻して、屋敷の方に立ち去っていく。

いい？

「あれ？ 高野さん、あいつ今いい、って行ったよな？ いいって、付いてっていいってことだよな？」

ちょっとほんわか嬉しくなって、きょろきょろと周一郎の後ろ姿と呆然とした高野を交互に見ながら確認する。

「坊っちゃんま……」

「俺、少しはあいつに信頼してもらえてるってことかな」

高野がやがて深々と溜め息をついて呟いた。

「滝様を連れていかれるなんて……無謀ですよ」

「………どういう意味だ」

俺はじろりと高野を睨みつけた。

2.企みの影

京都へ向かう列車の中、持ってきた文庫にも飽きて本を閉じ、目を上げる。
美しい緑、鮮やかな色は人の心を浮き立たせる。空の青さに心の奥がくすぐられるような甘さがあった。開いた窓からは肌寒い風が流れ込んできているが、そこには微かに花の薫りもするようで、春が来たんだと嬉しくなる。
だが、周一郎はさっきから押し黙ったまま、その柔らかな春景色の中に一点の冬を持ち込んだように、虚ろな目を外に向けていた。年齢相応というにはあまりにも笑いを忘れた、重い憂いに沈み込んでいる顔。
昼過ぎに朝倉家を出てからは、一度も口を開かない。大人びた表情にはサングラスだけでは隠せない思い詰めた色がある。
高野の心配そうな声が俺の脳裏を過った。

「綾野様というのは、前の奥様のお兄様にあたる方です」
「ってことは……親類、か」
思わず嫌な予感がしたのは、周一郎がらみの『身内』がどれほど不愉快な系統だかよく知っているからだ。同じような憂いを浮かべて高野がゆっくり頷く。
「奥様が亡くなられた後、旦那様がすぐ若子様を迎えられたことで、一時は旦那様が妹を殺したようなものと触れ回っておいででしたが、今は誤解を解かれて朝倉家の取り引き相手としては五番目の位置におられます」
「それじゃ……特にやばいとかまずいとかいう人間じゃないってことだよな？」
ちょっとしつこい確認をする。
若子。周一郎の義理の母親。
もっとも周一郎を消して遺産を独り占めすることしか考えていなかったような母親だ。
今となっては、切れ者であったはずの朝倉大悟が、なぜ若子などに引かかかってしまったのかがよくわからない。永遠の謎、男女の不思議の一つ。そこに周一郎に母親を与えてやろうと思った気持ちが少しでもあれば、もっと落ち着いた女性を選んでいただろうけど。
その若子も今はここにいない。
大悟を死に追いやり、朝倉家を乗っ取るうとしたあげくに、周一郎の巧みな罠に引っ掛かって、社会的に始末されてしまった。裁判はまだ争われているようだが、計画性残忍性を周一郎の存在でクローズアップされた形になった状態では、無期懲役かそれに近い刑罰になると予想されている。
「それが……その」
俺のことばに、高野は言いにくそうに顔を歪めた。
「表向きは申し上げた通りですが、昔から異常なほど奥様を大切にされていた方で」
「異常なほど？」
「昔、奥様が近くの犬に追い回されたとき、その犬を捕まえてナイフでめった突きにされたそうです。啓一様が高校生ぐらいの頃だったとお聞きしておりますが」
「うえ」
それって近所の飼い犬ってことだろう？ そんなことして犯罪にはならなかったんだろうか。第一、飼い主が黙っていないんじゃないか？
俺の疑問を察したように高野が曖昧に微笑んだ。
「綾野家は代々名士であられましたので」
「……なるほど……って、待てよ」
嫌な予感がまた広がる。
妹を追い回して怖がらせたという理由だけでも犬をめった突きにしようなぶっ飛んだ兄貴が、今度は妹が社会的な居場所を失い刑罰を受ける羽目になった、その元凶を放置しておくだろうか？
「今回のことも何か、そいつが妹の恨みを晴らそうって周一郎を狙ってるって可能性もあるってことか？」
「それだけではありません」
高野は険しい顔になった。
「綾野様は現在の御自分の地位に納得されていない御様子です。密かにご自分の関連会社の所有株を増やそうとされたこともあるとも聞いております。事前に坊っちゃんに止められてはおりますが」
「それ……まずいだろ」
俺は引きつった。
「そんなの俺だって、京都に行くのはやばいってわかるぞ？」
あいつはマゾか？ それとも、苦難は人を成長させるという堅い信念の持ち主なのか？
まあ、確かに一人で何もかも背負い込む傾向にはあるが。
「たぶん、坊っちゃんも清さまのお気持ちをお確かめになりたいのではないかと」
「清？」
「綾野様のお母様ですが、昔は坊っちゃんのお世話をされておられました……乳母、みたいなものですか」
「乳母……」
なるほどな—そういうものも世の中にはあるんだな—厳然と階級組織は生きてるってわけだ—。
「というところ……あ」
どこか遠くに流れていきそうな思考を引き止めたのは、何度も俺を見遣った周一郎の顔だった。
「ひょっとして、あいつは信じたくないのか。あいつを狙う計画に、その清、とかが噛んでるかもってこと」
「ええ……おそらくは」
高野は苦しげに眉をしかめ、思いきったように打ち明けた。
「以前、お仕事がらみでお命を狙われたことがありまして」
「はい？」
命を狙われる？
「外食された折、たまたま御気分が優れず、あまりお食べにならなかったものに、人体にとって好ましくない成分が入っております」
「毒っ?!」

「戻られてから、ご一緒された方が入院されたので、それとわかり」
「うわー」
「……粗忽な計画ですが」
いや、突っ込むところはそこじゃないだろう！
ああ、だからか、と気づいた。
だから外でも周一郎はあまり物を食べようとししないのだ。
「あまり気になったので、清も遠ざけようとしたのです。けれど、その折に、『清まで僕が死ねばいいと思って
るなら、きっと生まれてこない方が良かったんだ。なら、僕はさっさと殺された方がいいのかもしれない』そう
、笑われて」
胸を突かれてことばを失った俺に、高野は静かに頭を下げた。
「どうか、坊っちゃんをお守り下さいませ。私を知る限り、お仕事にどなたかを同行させてよいとおっしゃった
のは、滝様が初めてです。きっと、坊っちゃんにとって滝様は特別な方なのに違いありません」

たまらない。
そう思う。
俺は確かに天涯孤独で両親を知らなかったが、生まれつきのしぶとさなのか異常に運が良かったのか、まずま
ずの環境には恵まれてきた。厄介事にすぐ巻き込まれるという欠点はあったけれど、居直るのも得意だったし、
ねちねち絡むやついやがらせや意地悪の類もそれなりにしのいできた。
ましてや、この歳になるまで『生まれてこない方が良かった』なんて思ったことはない。
なのに周一郎は、乳母に面倒を見てもらってるような歳からそんなことばかり考えてたっていうのか？
そんな思いをずっと抱えて……人は壊れないもんなのか？
「滝さん、着きましたよ」
「…ああ」
席を立ち、スーツケース片手に俺を促して、周一郎は列車を降りた。ホームの人混みをすり抜け、改札へ向か
って行く。
周一郎の視力は弱視のせいで人影が蠢くのがわかるぐらいしかなく、まるで誰がどこへどう動くの
かを全て知っているような無駄のない足運びだ。
しばらくはその鮮やかさに見惚れていたが、改札近くになると駆け込んでくるのやら、駆け出してくるのやら
でごった返してきた。
さすが京都の観光地、嵐山だけある。
「こっちこい」
「、」
「スーツケースの取っ手を掴み、隅の人通りの少ない方へ誘導する。それでも前から突っ込んできた男に跳ね飛
ばされそうになった周一郎を、慌てて腕を掴んで引き寄せた。珍しく文句も言わずに従ったと思ったら、額にう
つつらと汗をかいている。微かに顔色も白い。
「大丈夫か？」
「…え？」
「疲れたか？ 顔色、よくないな」
「っ」
すうっと見る間に血の気が戻った。
「大丈夫です」
俺の手からスーツケースをひたくりながら顔を背ける。
「子どもじゃないんですから」
十分餓鬼だよ、その対応は、と思ったが、そんなことは絶対認めないだろうからはいはい、と頷いて改札を
出る。
「こっからは？」
「タクシーに乗ります。もう少し松尾よりですから」
駅前ターミナルからタクシーに乗った。座って行き先を告げた周一郎が微かに息を吐いて席に埋まる。強が
ってても堪えてるらしい。俺にもたれて眠っててもいいぞ、と言ったが無視される。
綾野清は、周一郎に京都滞在中の宿として自宅を提供していた。
辿り着いたのは、想像していたより現代風な建物だった。二階建ての和風建築ではあるが出窓などもある。
こじんまりした庭先は整えられた植木が瑞々しく配置され、気のせいか、周囲より一層ひんやりとする。立派
な表札に彫り込まれた『綾野』の文字を見つめていると、玄関の飴色の引き戸がからからと開いて、やや小太り
の七十前ぐらいの和服の女性がいそいそと出て来た。
「まあ、坊っちゃん！」
「やあ、清」
はにかんだような周一郎の声に驚いて見遣ると、確かに微笑みを浮かべている。俺がついぞ見たことのない、
可愛らしい笑みだ。
もっとも、そんなことを言えば僕は絶対笑ってない、俺の目が悪くなったのか幻覚でも見たのかと言い張るだ
ろうが。
「立派にならりましたなあ」
「清も元気そうだね」
にこにこ微笑みかける相手に俺はほっとした。どうやら害意とか悪意はなさそうだ。
これは高野の思い込みだったかなと思っていると、清はひょいと俺に顔を向けた。
「そちらのお人は……？」
「ああ、滝、志郎さん。僕の……友人なんだ」
なんだ、その微妙な間合いは。
「よろしく願います」
心の中で突っ込んで頭を下げる。
「それは失礼いたしました。こちらこそよろしゅうお願いいたします……ほんまに、よう来ておくれやした。
さあさあ、入っておくれやす、たいしたところやおへんけど」
外は現代風でも中は日本間ばかり、玄関奥の部屋に並べられたござっぱりとした座布団にちょっと怯みながら

腰を下ろす。ごそごそ正座しようとしているのが不格好だったのだろう、清が小さく笑った。

「どうぞ、お楽に」

「あ、じゃ、すいません」

俺はさっさと膝を崩して胡座を組んだ。隣できちんと正座した周一郎がちらりと横目で見てきたが、知らぬ顔で出された茶を啜る。

「あ……うまい」

「そうですか、なんぼでも飲んどくれやす、外、暑おしたろ？」

和菓子すすめながら清がくすくす笑う。

「ああ、暑かったです、な、周一郎？」

「そうですね、今日は蒸してました」

「蒸した？ なんだ、それは」

「あ」

きょとんとすると周一郎が見る見る赤くなる。なおさら理由がわからずに瞬きしていると、清が柔らかい顔を返して、

「蒸し暑くなってきた、いう意味どす。東やったらあんまり使わはらへんことばでっしゃろ。坊っちゃんは私と長う居はったさかい、ことばが移ってますのん」

こともなげに解説する清に、目の前の女性にまとわりつくように暮らしていた幼い周一郎の姿を思って、俺は胸が重くなった。

ことばが移るまで。

そして、そのことばを相手の顔を見たときたんに無意識に使ってしまうほど、こいつはこの人に気持ちを許しているのか。

なのに、その相手に殺されるかもしれないと思いながらここに座っているのか。不安も恐怖も、これっぽっちも見せない静かな顔で笑って。

思わず周一郎を振り向くと、相手は俺の視線の意味に気づいたように、険しい表情で立ち上がった。

「荷物、片付けてきます」

「ほな、晩御飯にかかりまひよか。二階の一番奥の部屋、寝間に使うておくれやす」

「わかった」

いきますよ、と声をかけただけでさっさとスーツケースを手に階段へ向かう周一郎に、俺はコップや皿を流しへ運んでいきながら声をかけた。

「あの……」

まさか、あなたはあいつを酷い目に合わせようなんて、思っちゃいないですよね？ そんなに優しそうで、そんなにあつたかそうで、あいつがあんなに心許してるあなたが、まさか。

そう問いかけてそうになった矢先、ぴりぴりした周一郎の声が遮った。

「滝さん！ 荷物、片付けて下さい！」

「あれ……おおきに、もう上がってもろたら」

「あ、はい」

「ちえ。」

これだから勘のいいやつってのは困る。

俺は舌打ちしながら、慌てて向きを変えた。

急な狭い階段を上がり、奥の部屋で荷物を下ろす。棚がすっきりと空けてあり、小さな洋服筆筒も空になっていた。タオルと歯ブラシのセットがさりげなく置かれて、どこまでも細やかで優しい心遣いを感じる。

しばらくして呼ばれた夕食の席はもっと感動ものだった。

菜の花のお浸し、卵焼き、焼き魚、麩の赤だし味噌汁、ぬか漬けのきゅうりとなす、がんもどきとフキの炊きもの、まいたけとあげとたけのこの炊き込み御飯。

「うわ」

「いつも食べてるようなもんですけど、すんまへん」

「いや、嬉しいです、凄くうまそう！」

いそいそと箸を取り上げてひょいと隣を見ると、いつも豪勢な朝倉家の食事を食べ慣れているはずの周一郎が、気のせいか目元を染めるようにして俯いている。

「周一郎？」

「……覚えててくれたんだ」

「え？」

「へえ、そら忘れしまへん」

清がにこにこ笑って、はっとしたように周一郎が顔を上げた。無防備な驚きの顔、それがまたうっすらと染まってくる。

「坊っちゃんがしんどいときでも食べてくれはったもんどっさかいなあ」

「何？」

「かやく御飯とふうのお味噌汁」

清は嬉しそうに名前を上げた。

「お風邪召してお熱あって、それでもこの二つだけは食べる言うて。他は何にも食べられへんのかなあ、いつもこの二つは食べられますのんえ」

「清！」

かあっと、今度は音をたてるほど激しく周一郎は真っ赤になった。

「そんなこと言わなくても！」

「あきまへんの？ そら鈍なことで」

頭を下げてみせながら、清の目は悪戯っぽく微笑んでいる。親しいものだけに許されるからかい、その気配に周一郎が困った顔で口を噤む。

笑うまいと思ったが、何だか可愛いよな、とにやにやしてしまった。

「いいじゃないか、別に」

むつと唇を尖らせている周一郎は俺を無視してはくはくと飯を口に運び始める。

「お口に合いますやろか？」

「合うどころか！ めちゃくちゃうまいです！」

「お代わりありますえ？」

「下さい、あ、待って、これ食ってから！」

俺は慌てて茶碗を空にして清に差し出した。

「あー……食ったー………気持ちいい……」

布団の上にひっくり返って大の字になりながら呟く。

時計はもう夜中を回っていて家の中は静まり返り、階下の清はもちろん、隣の布団の周一郎まで微かに寝息をたてている。

十分で旨い夕飯の後、気持ちいい風呂に入り背中まで清に流してもらい、のんびり寛いであがってくれば、ぱりとしたシーツがかけられたふかふかの布団が待っていて、もう天国に来たような気分だ。

「いいよなあ……ああいうのを『お袋』っていうんだよなあ」

「清……」

「え？」

うん、と伸びをしたとたん、掠れた小さな声が響いて、俺は周一郎を振り返った。

てっきり眠っていると思っていたのに、まだ起きてたのか。

声をかけようとして、相手がやっぱりぐっすり眠り込んでいるのに気づく。

サングラスを外して手足を縮め、布団にこぼりと潜り込んでから、十七、八というより十四、五にも見える

。「寝言か」

こんなに完璧に感情コントロールしてるようなやつでも寝言って言うのか、それとも、完璧に感情コントロールしてるから、つつい零れちまうもんなのか。

周一郎の寝顔を見守りながら、ちょっと人間の不思議に浸っていると、ふいにその睫のあたりから光るものが伝い落ちた。

どきりとして身動きできなくなる。

「……清………おまえも………僕を……」

滲んだ声で切なそうに呟き、けれどもう、それ以上は口にするまいとするように、周一郎はきつく唇を噛み締めた。眉を寄せて身体を竦める。手足が震えるほど力を込めて。

それは昼間のたじろがない姿を裏切る、痛々しいほど怯えた姿で。

「どんな夢……見てんだよ」

口にするものにさえ神経を使っていたのに、病んだ時でも清の作るものは安心して食べられた。なのに、その信頼が今、周一郎の中でゆらゆら揺れている。

いや、揺らいているのは自分への信頼、なのかもしれない。

それほど疎まれるような存在なのか、それほど意味がない命なのか、と。

俺達が初めて出会った事件で、俺に見せた涙は演技だったと周一郎は言った。お人好しの俺を巻き込み利用するための芝居に過ぎなかったのだ、と。

それが本当なら、今俺が見ているのは周一郎が見せる最初の涙、いや、いじっぱりなこいつのことだから、ひょっとしたらこれが最後の涙なのかもしれない。

「うー……」

俺は掌をひらひら動かした。

撫でてやりたい。今すぐこいつの頭をぐりぐり撫でてやり、揺さぶり叩き起こして、辛い夢を断ち切ってやりたい。

けれど。

「だめ、だよなあ……」

ぐ、っと手を握って諦める。

そうやって目覚めた瞬間に、こいつは泣いていたことを全力で否定するに違いない。濡れた頬や伝った水滴は汗だっただの俺の目の錯覚だっただのと不愉快な理由を、そしてその実、泣いてた自分を傷つける嘘っぱちな理由を並べ立てるに違いない。

そうして、きっと、どこでも泣けなくなっちまうに違いない。

俺は溜め息まじりに布団に潜り込んで、周一郎に背中を向けた。

明日の朝は何があってもこいつより先に目を覚まさないでおこう。

こいつがいつも通り、きちんと満足いくような『朝倉周一郎』の仮面を被り終わってから、何も気づかなかつた顔でのそのそ起きあがってやろう。

目を閉じながら溜め息を重ねる。

俺には今、それしかできない。

無力が、はがゆい。

3.桜の少女

「扇、明日には届くと思うてますけど……」
清が遠慮がちに切り出したのは、四月三日、俺達が清の家に来た次の日のことだった。
周一郎は俺が起きる事にはもう身支度を整えていて、部屋の隅に座っていた。明るい日差しを不快がる風もなく、目を閉じ、サングラスを指に引っ掛けたままべたりと脚を投げ出して壁にもたれ、まれに見る寛いだ表情になっている。
安心と平穩。満ち足りた表情はいつもより数段幼くも見える。
家族とは名ばかりの冷め切った人間関係の中で、清に対する周一郎の信頼がどれほど大きなものだったか、今さら思い知らされた気がして、俺はしばらく声さえかけられなかった。
もし高野が心配しているように、清までこいつを狙っていたとしたら、こいつは本気で清に殺されるつもりなのかもしれない。
そんな不安がちらりと胸の底を掠めた。
「……ふ」
視線に気づいたのか、周一郎がゆっくり目を開ける。俺がじっと見つめていたのに気づいても、いつものように警戒するわけでもなく、ただうっとりどこか眩しそうに目を細めて、
「目が覚めましたか？ もう十時ですよ」
柔らかい声音だった。
「んー、そんな時間かあ」
オーライ、俺は気づいてない、何も見てない。
気づかなかったふりで伸びをしてのそのそ寢床をはい出し、畳の上に温かく落ちている日ざしをぼんやり眺める。
「いい天気だなあ」
くす、と周一郎が笑った。
緩んだ目元が溶けそうだ。
「…もう、起きやっしゃあ！」
階下から声が響き、階段を静かな足音が上がってくると、清が温和な笑みを見せた。
「ああ、起きたはりましたん」
「あ、すいません」
片付けの邪魔をしたかと慌てて布団を畳みにかかると、それを押しとどめて清はにこにこ笑った。
「ほな、ぼちぼちご飯どすな」
ひょいと周一郎を振り返り、
「坊っちゃん、お腹空かはったやろ」
「え？」
きょとんとした俺に清が目を細める。
「ほんまにこないなことしはるやなんて、思いもしまへんでしたえ」
布団を片付けながらくすくす笑う。
「坊っちゃんなあ、えろうはよ起きはったのに、滝さんと食べるんや、言うて、朝ご飯食べんと待ったはったんどっせ」
「清！」
慌てた口調で周一郎が口を挟んだ。清が改めて気づいたように口をすぼめる。
「すんまへん、言わへん約束どしたなあ」
軽い舌打ちを耳にして、照れたようにそっぽを向いた周一郎を振り向く。
「すまん、待たしてたのか？」
「別に待ってたわけじゃありません」
「朝飯は食ったのか？」
「…食べてません」
「じゃあ」
「たまたま食べ損ねたんです」
誰かの間抜けた寝顔が面白かったから。
「誰かって？」
「しつこいですよ。早く着替えて下さい。昼まで抜くのはごめんですから」
「わーった！」
俺は急いで着替え、顔を顰めて先に階下へ降りてしまった周一郎を追いかけた。
なんか、ほぐれてきてるよな？
少し浮き足立ってそう思う。
やっぱりこいつ、少しほぐれてきてるよな。
振り返らない細い背中になにやにやした。

食卓は相変わらず素朴で温かく、味噌汁の味は格別だった。
清は三杯目の味噌汁のお代わりをにこにこことよそってくれながら、
「どうせ扇は明日しか届きまへん。ええお天気どっさかい、嵐山へでもおでかけやす。もうそろそろ桜が見ごろですえ」
「桜かあ」
こっちも三杯目の飯をかきこみながらうなずいた。
「もうそんな時期なんだ」
「松尾から一駅どすし……『桜急行』もありますし」
「『桜急行』？」
俺が首を傾げるのに周一郎が茶を飲んでいた手をとめて解説する。
「桜の時期に増発される、梅田嵐山間を直接繋ぐ急行です。普通は桂で乗り換えるんですが、この時期だけはそ

ういうラインがあるんですよ」

「後、紅葉の時にも出ますんえ」

清が嬉しそうに付け加えた。

「そっちは『紅葉急行』……坊っちゃん、よう知ってはったこと」

周一郎は薄く頬を染めてそしらぬ顔で茶を啜った。

「ふうん…」

止めていた箸を動かしながら、ことさらのんびりと茶を飲む周一郎を目の端で見る。

周一郎が電車で興味があったとは聞いてない。ましてや地方の一時期だけ走る特別列車を一々覚えているとは思えない。

なのに、なぜそんなことを知っているか。

ぱりぱり、とタクアンを噛みながら飯をかきこむ。

ひょっとしたら、周一郎は、清が乳母を離れた後、ここへ来る方法を調べていたんじゃないだろうか？

朝倉家の隠しアイテムだったこいつが、早々外に出られたはずがない。命を狙われていたならなおさらだ。

けれど会いたくて。

自分を唯一普通の子供として愛してくれた人に、もう一度会いに行きたくて。

苦しかったり辛かったり悲しかったりした時に、密かに京都へどうしたら行けるか、考えていたんじゃないだろうか。

脳裏を、屋敷の隅で地図と時刻表を繰る周一郎が過る。

仕事の合間、人目を盗んでこっそりと、もう側にいない優しい人の姿を求めて、指先で道を辿る。

『京都、嵐山、えーと、路線は……』

積み上げた経済雑誌や報告書や企画書の陰で。振り仰いだ空の彼方に続く遠い場所を思って。

それでも来たことはなかつただろう。

来れるはずもなかつただろう。

『桜急行って、あるんだ』

呟いた幼い声と、小さく噛みしめた唇が見えた気がして思わず誘う。

「行こう」

きっぱりはっきり言い切った。

「え？」

「俺も桜を見たい」

そうだ、見たいぞ、何が何でも見たいぞ、周一郎が唯一信じたその人が暮らしている場所を、そこに行きたいと願った場所を。

もう、ひょっとすると、周一郎には、二度とは来れない、場所だから。

「……僕は」

一瞬惑った顔で見返した相手に笑う。

「日本人なら見に行こう」

「……なんですか、それ」

微かに笑った相手にほっとした。

阪急嵐山駅は家族連れやカップルで賑わっていた。

春休みももう終わり、最後の休日を満喫しようというんだらう。

「風の色が違って見えるな」

「文学的ですね」

「文学部だぞ？」

忘れてるな、と突っ込むと、冗談だと思ってました、と返された。

苦笑する周一郎を後目に、ゆっくり伸びして息を吸い込む。

ほぼ満開に咲き誇った桜の、ピンクや白、薄紅の無数の花びらが風に舞い上がり、渦を作って足下へ吹き寄せてくる。周一郎はと見ると、サングラスの後ろで眩そうに、けれども魅せられたように桜に目を吸いつけられていた。

きっとこんな風に見に来ることなんてなかつたに違いない。朝倉家にも桜はあったかもしれないが、それを美しいと思ってみることもなかつただろう。

ページュのシャツ、薄茶のベストに茶色のスラックス、どこぞのおっさんが着るような出で立ちも、桜の中では整った容貌に見事に映えて、まるで一枚の日本画のように見える。いつもの無表情が崩れ、桜に見惚れてる顔は無防備で、それを見ただけでもここにきた価値があったと思った。

「……何ですか」

「いや」

何でもない、と言いながら、その実にやにや笑いを顔中に広げてしまった俺に、周一郎が不愉快そうに眉を顰める。

「良からぬことを考えてたって顔ですが」

「良からぬことじゃないぞ？」

そうしてると、歳相応に、いや歳より可愛らしく見えるよなあ、たまにはそうやって、ガキの顔してぼうっとしてろと思っただけだ、とそれは口に出さないで、駅で買った地図を広げた。

「さて……どうするかな」

駅で買い求めたのは嵐山周辺から嵯峨野にかけての観光散策用の地図で、土産物店や名所旧跡、旅館や電車バス停タクシー乗り場などがイラスト付きで描かれている。

「少し……川の方へ行きましょう」

周一郎は眩しそうな顔で側を通る観光客から目を逸らせた。

「騒がしいのは苦手です」

「ん、そうだな」

日差しが思ったよりもきつい。日陰がある川べりの方がこいつにとっても楽だろうと、向きを変えたとなん、

「わ！」「きゃっ」

ふいにどん、とぶつかられた。地図を片付けかけていた不安定な姿勢で思わず数歩たたらを踏んでこらえたが、腕にすがってきた白い手が、勢いのまま滑って地図の端を掴む。もちろん、紙が何の支えになるわけも、つい

でに凍りついた俺が相手を支えるなんて器用なことができるはずもなく。

「げ!」「やあっ!」

びりりりりいっ。

歳の頃、十四、五。白いブラウスに桜色のカーディガンを着た少女が、地図を派手に引きむしって俺の前に転がり、ひらりと捲れた紺のスカートを慌てて押さえてへたり込む。さすがの周一郎も茫然とした顔で座り込んだ少女を見つめて無言、しばらく三人じろじろお互いを見つめあったが、

「……く、くくくっ」

笑い出したのは少女だった。

赤くなりながらくすぐったそうに身を振って笑い、立ち上がって服についた埃を叩きながら、快い響き声で謝った。

「すんまへん……慌ててしもた」

「あ、いや、こっちこそ」

立ち上がるのを支えようと差し出した手に千切った地図を載せてきて、そろんと上目遣いでこちらを見る。笑みを含んだ綺麗な目。つつい視線が引きつけられる。

「どうしましょ、こないになってしもたわ?」

困ったように眉を下げて微笑んだ。つやつや光る髪に舞い落ちる薄紅の花びら、それが唇を掠めていきなり光が射したように見える。

桜?

桜がいきなり実体化、いや女人化したぞ?

「……観光にきはったんですか?」

「滝さん」「うお」

思わず側の桜を見上げて、周一郎に小突かれた。

「はい?」

「あ、いや、ごめん、こっちの話」

小首を傾げた相手に慌てて弁解する。なんだよ、勝手に人の心を読むなよな、と周一郎に向かって唇を尖らせつつ、少女に向き直る。

「あ、うん。桜を見に来ただけど、ついでにちょっと歩いてみようかって。な?」

お前も話せ、と周一郎を振り向いた。軽く頷いた周一郎は、にこりとよそいき用の笑顔を作る。

「東の方やねえ……嵐山は初めてですのん?」

「ええ、そうなんです」

「えーそうなんや」

頷いた周一郎に、少女は露骨に話し相手を変えて、嬉しそうに微笑んだ。

はいはい、そうだよ、そうだよな、そっちに目がいくよな、普通。

わからなくはないが、ちょっといじけてみる。

「それやったら……地図あかんようにしてしもたし……あたしが案内しましょか?」

「え、いいの? 初対面の人間に」

一応ここは大人の振る舞いをだな。

俺は周一郎に負けず劣らずのつもりで、にっこり笑って見せる。

「かましまへん。うち、人を見る目は確かですねん。ちょっと待ってて下さいね?」

相手は身軽に頷いてくるりと背中を向け、携帯を取り出してやりとりを始める。

「……いいのかな」

周一郎が少し気遣った顔で眉を寄せた。

「いいんじゃないか? ああ言ってくれてるんだし、甘えちまおう。地図もおしゃかになったし」

地図を丸めて肩籠に放り込みながら笑うと、周一郎は小さく溜め息をついた。

「気楽ですよ、滝さんは」

いやだって、女性と知り合う貴重な機会を棒に振って京都へ来たわけだからな、ちょっとぐらい楽しい出会いとか出会いとか出会いとかあってもバチは当たらんだろ?

ぶつぶつ言うと、別に付いてきて下さいなんて頼んでませんが、と冷ややかに言い返された。

「あのなあ」

「何ですか」

「だいたいお前が」

「…お待たせしましたあ。家のもんには友達と出かける言うてしもた」

ちろっとピンクの舌を出して振り返った少女はにこにご嬉しそうに自己紹介に入る。

「私、三条京子、言いますのん。御名前、お伺いしても構いません?」

尋ねた先はもちろん、周一郎の方だ。いやむしろ、俺にことは既に忘れつつあるというか。

「……」

この分ではこいつといる限り、女の子と楽しいおつき合いってのは不可能かもしれない。

遅まきながら、そこに気づいた。

「朝倉周一郎と言います」

「周一郎、さん。かっこええ名前やねえ」

褒められても周一郎は平然としたものだ。まああれだけややこしい家に育っていたら、いくら可愛らしく見えても、そうそう女に優しくしようという気にはなれないかもしれない。

なら俺の出番、だな?

「あの……俺は?」

おそるおそる切り出してみる。

「あ、はいはい、お名前は?」

「滝志郎です。大学三年」

朗らかにはっきり応じたのに、京子はいわかりました、と事務的ににっこりしただけで、すぐに周一郎に向き直った。

「へえ、大学生……で、周一郎さんは?」

おーい、それだけか。男はな、中身なんだぞ中身。

「僕は……ちょっと」

「こいつは事情があって引きこもりなんだよ」
口ごもった周一郎にフォローに入る。
「で、俺が家庭教師」
「へ、ええええ?!」
いや、そこで驚かなくてもよさそうなもんだが。
「大変なんですわねえ、周一郎さん」
だから、どうしてそいつに話を振るかなあ? ってか、なんで『大変』なのが『周一郎』なんだ?
溜め息まじりに天を仰ぐと、くすくす京子が笑った。
「それで、どちらへ? どういうところがよろしいのん?」
「うーん……金のかからない、綺麗な所!」
「……そんなん、正味、桜しか見られまへんえ」
「うう」
「……難しなあ……周一郎さんもそういう所がええ? それやったら、念仏寺とか、天竜寺とか……お寺ばかりになるしなあ……それでも拝観料はかかるし……賑やかな所はお嫌い?」
「いや……」
周一郎が曖昧にことばを濁して気づいた。
そう言えば、日差しはさっきからどんどん強くなっている。春とはいえ、周一郎がこれほど長く外に居続けるのも珍しい。
ひょいと顔を覗き込むと、微かに汗で額を光らせている。心無しか顔色も悪い。
こいつ、また苦しいのを黙ってるんじゃないだろうな。
「あー、俺、物凄く静かな所がいい! うんとのおんびり休めて、ついでに昼寝とかできる所!」
「はあ?」
「な、周一郎、そういうところへ行こう! 健康にいいぞ!」
「滝さん……」
このおせっかい、そう言いたげな表情が過ったが、どこか苦しそうに周一郎は目を逸らせる。
「ということで、そういうところ、行こう!」
「うーん……ほな……京都の名所言うのとはちょっと違いますけど、観光コースを少し外れたところに、うちの知り合いがいますのん。堂明寺言うお寺やけど、そこならゆっくりしてもらえますえ」
「あ、俺そこがいい!」
「…滝さん」
間髪入れずに叫んだ俺に周一郎が眉を寄せる。
「僕は別に」
「いや、俺は凄くそこに行きたい! さ、行こう行こう、ほら!」
俺は渋る周一郎と困惑顔の京子を押すように歩き出した。

「うちはなあ、五人家族ですわねん」
駅前からどんどんそれて山の方の道を辿りながら京子が歌うように言った。
「おとうはんとおかあはんとおじいはんとおにいちゃん。祇園の方で扇を商いさしてもうてて、まあまあ古い家ですわねん。そやのに、おにいちゃん、いろんなもの見たい言うて、フランス行ってしもて、たいがいふらふらしてた思たら、急に帰ってくるとか言うの、どう思わはります? それもえろう慌てて、おばちゃんここに届けもんがある、ついでに家寄る言うて電話切ったけど、ほんま慌てもんやの、うちの家、今改装してて違うとこにいるんですえ」
ちょいと唇を尖らせた顔が可愛らしい。
「あ、おばちゃん言うても親戚違いますえ、おとうはんのお仕事先の人で、嵐山に居たはりますのん。うちにはおばあはんいいひんけど、おばあはんてこんな感じなんやろかと思うようなええ人で、うちもおにいちゃんも大好きで。どうせ一晩おばちゃんとお泊まるやろうし、ほなうちがおにいちゃん捕まえてくるわ、言うて出てきたん」
「え? じゃあ、嵐山に居なくちゃまずかったんじゃないのか?」
「ううん、かまへんの。おばちゃんにも言うてあるし、夜までに帰ったらええ話やし」
またぺろん、と京子は舌を出した。
いいなあ。
慌てもんや、と言いながら、京子は楽しそうだ。それは京子が育ってきた家の温かさを、兄に向けた思いやりの深さを思わせる。
こんな妹がいたらいいよなあ、可愛いくって。志郎お兄ちゃん、とか呼ぶんだぞ? 朝とか起こしに来てくれたりさ。
へらへら笑った俺に周一郎がこれみよがしに溜め息をつく。
「朝倉さんの御家族は?」
「にこ、と京子が邪気なく周一郎を覗き込む。
「僕には家族はいないんですよ」
さらっと周一郎は流した。
「身の回りの世話をしてくれる者と……滝さんも一緒に住んでますけど」
「え」
京子はみるみる赤くなった。
「すんまへん……もう、アホやわ。さっきから、アホなことばかり聞いてる!」
「気にしなくていいですよ」
ぷく、と怒ったように唇を尖らせた京子に周一郎が柔らかく笑う。
「この人一人で十人分ぐらいは騒がしいから」
軽く俺を示しながら言い放った。
「おい」
じろりと睨んでやったがしらっとした顔でそっぽを向く。
苦しかったんじゃないのかよ。ったく、人が心配してやってるのに。
「ふう、ん、仲、いいんや?」

京子はじっと周一郎を見ていたが、くるりと向きを変えた。
「すこおし、気になるなあ」
「え？」
「お二人の、関係」
「はあ？」
「関係？」
「俺と周一郎の？」
「ひょっとしてえ」
「ひょっとして？」
「コイビト、とか？」
「はああああ？？」
俺が素頓狂な声を上げたのにちらっと京子が肩ごしに視線を投げてくる。
「小説とかでもようあるでしょ？」
「あるのか？」
「僕に聞かないで下さい」
周一郎はうんざりした顔で肩を竦めたが、そんなちょっとした動作でバランスを崩したようにふらついた。
とん、と体をあててきたのをとっさに支える。道は傾斜の緩い上り坂、左右は竹林で日ざしは遮られてはいるが、足下は竹の枯れ葉で不安定だから疲れてきたのかもしれない。
「大丈夫か？」
「はい」
顔いたものの顔色はさっきより悪い。
京子ちゃん、後どれぐらい、と尋ねようとして、顔を上げると目を細めて腕を組み、まじまじこちらを見ている相手に気づく。
「やっぱり」
「は？」
「怪しい」
「何が」
「何か異様に周一郎さんに優しい、滝さん。庇ってはるし」
その目がまっすぐ俺が周一郎の腕を掴んでる手に注がれているのに、慌てて手を放す。放してから、そんなことしたら逆効果じゃなかったかと固まって、やっぱりますます凝視された。
「あ、あの、これは、その、こいつは体が弱くてだな」
「……弁解してはるし」
「違うだろ！」
「ま、ええけど」
うろたえる俺にくすくす笑う。
「好きな人に一人や二人、なんかついてても」
なんかついてても。
俺は地縛霊か。
「障害多いほうが燃えるしなあ」
「あ…そ」
見かけよりうんと情熱的なんだなとか、そっかもうそこまで周一郎が好きだって自覚してんのかとか、けれど、その発想の行き着く先が俺と周一郎が恋人同士だとかいうのは根本的にどっか間違ってるとか、そんなこんなを考えていたら、ふいに周一郎に腕を掴まれた。
「滝さん」
「？」
「……ちょっと」
「あ」
サングラスの向こうで明らかに白い顔になっている周一郎が、今度ははっきり苦しそうにこちらを見上げてくる。慌てて腕を掴んで体を支えた。
「すまん、京子ちゃん、冗談言ってる場合じゃなくて」
「あ、はい、もうあそこですし」
京子が指差した先にいつの間にか、緑に吞まれて崩れかけたような山門と、ペンペン草がわさわさと屋根に生えているボロ寺が現れていた。

4.あっちとこっち

「おじさーん！ 廻元おじさーん！」
「おお！」
山門を駆け込んだ京子が玄関で呼ばわると、野太い声が応じて、着古してあちこちほつれた黒い衣の坊主がのそりと出てきた。
がっしりとした体躯、分厚い胸板、手足も太くて、山の中なら熊と間違えそうな毛深さ、つるんとした頭と対照的にごわごわ生えた髭。
……観光客があまり来ないのがわかるような気がする。
「京子！ 珍しいなあ！」
なんだか声で柱がひび割れそうだ。
「お客さまですえ」
「こんなところへ酔狂な」
廻元は大きな丸い目をぎょろりはこちらへ向けたが、京子が事情を説明するのを聞き流しながらすたすたと近づいてきたかと思うと、ぐい、と周一郎の腕を掴んだ。
「え…？」
ぎょっとする周一郎を無視して、熊坊主はこちらに向く。
「おい、そこの」
「そこの？」
「お前だお前」
ってこの場合は俺、だよな？
「は、はいっ」
呼ばれて慌てて返事する。
「こいつの靴を脱がせてやれ」
「あ、はいはい」
思わずしゃがみ込んだとたん、ふわりと周一郎の体が浮いた。小さな子供のように抱え上げられた足から革靴を抜くと、相手は小荷物のように周一郎を抱えてさっさと奥へ入っていく。
「おーい？」
いきなりどこへ連れてく気だ？
「おじさん！ いきなり何すんの！」
京子が驚いて後を追うのに、俺も急いで従った。
よほどへたっているのか、周一郎は身もがき一つする気配もない。
「すんまへん、おじさん、いつもあんな人で」
ぱたぱたと小刻みな足音を響かせながら、京子が引きつった顔で謝った。
「ちょっとびっくりした……おじさんって親戚？」
「遠いんですけど、変わりもんか……うちの身内って変わりもんばかりやわ」
「恥ずかしいのか怒っているのか、京子はぶんぶんしながら先へ進む。」
「おじさん！ どこにはんの！」
「こっちだこっち、そっちじゃない」
「もうっ、そんなんわからへんわ！」
からかうようにも聞こえる廻元の声に京子の怒りは高まるばかりだ。
「こっちだ」
「え、ここのって、寝間やん！ おじさん、何してはんのっ！」
場所から何かを察したらしい京子が慌てた顔で飛び込んだ。同じく続いた奥の間にはいつの間に用意されていたのか、布団が一組敷かれていて、早々にそこに周一郎が放り込まれている。
「滝さん……」
くたんと寝そべっていたのを、俺達が飛び込んだのに困惑した顔でちろりと掛け物の裾を直している廻元を見遣る。サングラスも強制的に外されたのか、額に髪を乱して眩そうな眼を晒している。見上げる顔はまだ青白く、それでも見返されてまともに視線を浴びた京子がびくりと立ち止まり、ほう、と酔ったような溜め息をついた。
。「周一郎さん……男前やわあ…」
う。
確かにきちんとまとめていた前髪が垂れ落ちて、白皙の美少年ってのはこういう感じだろうなという端麗さ、頼りなげに枕に頬を預けている顔がかなり艶かしい。
「なあ、格好の美童だろう。和尚のわしとで布団を挟んでというのは、いい絵にならんか」
くつくつ笑いながら、廻元が洗面器で水を運んでくる。
「幸いここは寺だしな、色子というのも満更悪くは」
「おじさんっ！」
京子が真っ赤になった。
「アホなことばっかし言わんといてっ！」
「ほほう、『意味』がわかっておるのか、いや、感心感心」
廻元は豪快に笑った。
「そもそも衆道というのはな」
「お客はんに失礼やろっ、ほんまにもうっ！」
「衆道？」
確かそれってのは、と考えかけた俺に廻元が呼びかけてきた。
「おい、どうだ、一献やらんか、相手がなくて困っていたところだ」
「あかんのっ！ まだお昼やない！」
「わかったわかった、お前はどうも堅くていかん」
わはは、と廻元は大笑いしながら立ち上がり、
「ちょいといい菓子があるぞ、一緒に茶を飲もう」

一人で決めて俺を引きずっていこうとするのに、慌てて遮った。
「あ、俺、ちょっとこいつの様子を見てから……伺います」
「伺いますう？ 他人行儀なやつだな」
いや、他人だろうが。
ついさっき会ったばかりだろうが。
「廊下を出て左の部屋におる、早く来いよ」
「はあ」
「なんだなんだ、安心しろ、まだ襲ってはおらん」
まだ？ どういう安心なんだそれは。
思わず慥然として見返すと、廻元は体を揺すってまた一笑いし、そやからあそこの坊さんは破戒坊主やとか言われるんやないのっ、となおきりきりした京子を追い立てて部屋を出て行った。
「あれでも坊主なのか」
仏教ってのは懐が深いな、と呆れていると、
「滝さん」
少し掠れた声で周一郎が呼んだ。
「……大丈夫か？」
膝をついて、覗き込む。
「参りました」
眩そうに目を細めながら、大人びた口調で苦笑する。
「悪意のない行動だけに拒みにくくて」
「まあ、いい機会だ、少し休んどけ」
熱があるかな、と額に手を伸ばすと周一郎は驚いた顔で目を見開いた。満面に広がった警戒、おいおい俺が何をすんぞと思っただよ。動きを止めた俺に気づいてはっとしたように周一郎が謝る。
「……すみ、ません」
「……俺じゃ信用できないってわけか？」
「………そんなんじゃありません」
どこか苛立つように眉を寄せる。
ま、いや、とお構いなしに周一郎の額に手を当てる。今度は確実に体を震わせて緊張した。それでもすぐに手を離さないとかわると、諦めたように眉を顰めたまま目を閉じる。
「……熱はないな……けど」
まるで魔物の前に引き出された殉教者のような表情に、やれやれ、と溜め息をつく。せっかく布団に横になっても、そんなに緊張したままじゃ意味がないだろうに。
「ああ」
周囲を見回し、気づいて、洗面器に水に浸されたタオルを絞り、苦しそうな相手の額と目のあたりを覆ってやる。
「眩しいだろ」
「っ…」
より体を強張らせた周一郎が、うっすらと不安そうな眼を開けた。弱点を知られたからには攻撃を受けるに違いない、そう考えているような落ち着かなげな視線に苦笑する。
「……俺はちょっとあのぼーずと茶、吞んでくるから」
額から手を離すまで緊張している相手が辛そうで、さっさと退散することにした。
「ゆっくり寝てろ」
弱ってる時に、高野でもない、安心できない人間に側に侍られてちゃかえって疲れるだけなんだろう。
「調子おかしくなったら、呼べよ？」
「はい……」
周一郎はほう、と微かに吐息をついて、それでも眉を緩めて力を抜いた。
やっぱり『そんなん』じゃねえか。ほんと、とことんいじっぱりなやつ。
肩を竦めながら、そうか俺はまだまだ安心できない範疇なのか、といささか落ち込みながら立ち上がる。
「……滝さん」
部屋を出ていきかけたときに、掠れた声で呼び止められて振り返る。
「……ありがとう、ございました」
「……ああ」
それが側を離れることに対してなのか、額にタオルを乗せてやったことに対してなのか、判別できないまま、俺は溜め息まじりに部屋を出た。

「ん？ いやに沈んどるな？」
まあ一杯飲め。
いい薫りのする茶を勧めながら、廻元はふて腐れた俺の気分をすぐに読み取った。
「ほんまにすんません。おじさんが変なことするさかい」
京子が気遣って頭を下げる。
「おいおい、わしのせいかな」
「いや、違う、気にしないで下さい」
京子には悪いが、どさりと布団に腰を落とし、また溜め息を重ねてしまった。
そりゃな？ 他人だよ、俺は。確かに何の役にも立たないよ？
けど一応は危ない橋も一緒に渡ったんだから、多少は気持ちを許してくれてもいいだろうが。
少なくとも、攻撃なんかしないって思ってくれてもいいだろうが。
理不尽な愚痴だとは思ったが、つついじけも入ってくる。
結局、どうこうなんてできないんだよな、いくらあいつが辛そうでも。あいつが信じてくれないかぎりは。
「京子、茶を入れ替えてくれ」
「はい」
廻元が言い付けて京子が立ち上がり、まだ口をつけてもいない俺の茶まで下げてくれた。
「……何がしたい」

「え？」
ぼうっとしていて、ぼそりと尋ねられて顔を上げる。
「あの坊主に何をしてやりたい」
「何をとって……」
瞬きして相手の太い眉を見つめる。
「何を……何を？」
何をとって言われてもなあ、ただ、もうちょっとその、と考えかけて、はたと気づく。
「何って何です？」
そうだ、別に応えなくちゃいけない道理はないんだ。
尋ね返した俺ににやりと廻元は笑った。
「ほら、それよ」
「は？」
「あいつがお前にしてることも同じだろ」
「？」
「お前にはわしの心の中はわからん。お前はわしが何者なのかもわからない。なのに、いきなりお前が何を望んでるのかと尋ねられても応えられるわけがなかるう」
「あ」
そっか、と気づいた。
周一郎の側に居たのはずっとあいつを傷つけるような奴ばかりだったんだっけ。
俺があいつの側に居ると言たって、何年も居たわけじゃない。あいつには俺がどういう人間だかわからない。ルトを通して、自分で接しても、俺が何を考えてるのか、俺が何をしようとしているのか、まだ本当のところはわからない。
だからずっと警戒してる、そういうことか。
「それでも、自分を傷つけるとする相手の側にはおらんだろうさ」
廻元は窓の外へゆっくりと目をやった。
丸い窓の障子の向こうで、竹がゆっくりと風に揺れている。柔らかで静かな葉音が響き、部屋の中を満たしていく。さやさやと笹が触れあうその音は、波のように高くなったり低くなったりしながら、心の中まで打ち寄せてくる。揺れて波打ち、襖の隅々まで広がって、強張っているところを和らげていく。
ふと、この音があいつの横になっている部屋にも響いているといいなと思った。
あいつの部屋を満たし、耳を満たし、胸を満たして、疎んでいる体の底まで届くといいのに。音に揺られ慰められて、辛い夢など見ることなく、少しでもちゃんと眠ればいいのに。
零れ落ちた涙。
きっと誰にも知られることはない、そう思っているからこそ流せたんだらうけど、たとえば俺の前でもそんな風に辛いと泣いたら、きつとうんと楽になるだらうに。
「あれだけ深い目をしておって、あれだけ世の中を拒んでる人間が、お前のような『他人』を側に置くというのはたいしたことだぞ」
ふいに半眼になっていた廻元がつぶやいた。
「？」
何が言いたいのだろうと見返すと、
「なあ、おい、ここに一日一欠片だけ崩れる非常に堅い岩があるとする。他の如何なる力でも崩れぬ」
「はあ」
なんだ、いきなり？
「その岩は道に立ち塞がっておる。だが、その向こうには花畑があるかもしれん。清水溢れる泉があるかもしれん。豊かな森があるかもしれん。だが、岩で隠れて何も見えん」
「はあ」
それはどきどき心理テストか何かか？ 何があるか言ってみると、あなたの隠された性格がわかるとか？ 将来の運勢がわかるとか？ ……………いやだな、それは。
「ただ、その向こうから時々風に乗って、よい薫りと美しい鳥の声と清冽な水音がする。お前はその岩を越えたい。どうする？」
越えたいのか。
「……どうしても？」
「どうしても」
うーむ、どうしても越えなくちゃならないのか。首をひねりつつ考える、とするとこれは結婚運とか？
「…………じゃあ……待つ……かな」
いやもっと積極的に攻めなくちゃだめだらう、と自分で突っ込みつつも、それしか思いつかずに応えた。
「ふむ。長いぞ？」
長い。
彼女さえできていない現状では確かに長い。
「でも、一日に一欠片は崩れるんですよね？」
俺は想像した。岩だらけの谷。向うには楽園がある。一日一欠片、岩が崩れていく。
「いつかは全部崩れますよね？」
人の思いはらくだを針の穴に通すとか言わなかったか？
「さあなあ」
「……わかんないのか……」
崩れない可能性まである……ますます彼女運っぽい。
「わからん」
「……じゃあ……うーん……やっぱり待つ、かな」
俺だけの問題じゃないし、と唸る。
「あるかどうかかわからない可能性を待つのか」
「いや、そうじゃなくて」
俺は想像の中で崩れた岩を手取る。まだまだ岩は聳えたち、いつ崩れるかはわからない。けれど人の気持ちなのだ、俺にどうこうできるはずもない。

俺にできるのは大事にして、丁寧に扱って、大切に受け取ってやることぐらい。
「えーと、その崩れた岩を、岩の根元に並べて積んでいきます」
「ほう？」
「でもって、俺もこっちで畑作ったり水確保したりして、別のところから石とか運んで……」
地道に毎日暮らしていけば、いつか実がなり花が咲く…ってのは演歌だったか。
「で、そうやって待ちながら崩れた岩とかで少しずつ坂を作って、岩の頂上まで上ります」
その頂上に別のやつが待ってるってのはすごくよくあるパターンだが。
正直何度もあったパターンなんだが。
「ふむ……そして向こう側に飛びおりののか」
頂上。向こうが見えないんだからかなり高いはずだ。飛び降りたら絶対足ぐらい挫きそうだ。
「いや、また一欠片ずつ崩れた岩を今度は向こうに落として積んでいて……そうやって崩れてくうちにこっこの坂も低くてよくなるから、その分の岩も落として、向こうにも坂を作って」
うんうん、いい感じだぞ。
俺は頭の中の坂道を行ったり来たりしてみる。
そうだよな、別のやつが居るにしても、ひょっとしたら何かの時に俺の良さが伝わるかもしれないし。
いつかは安心して俺とつきあってくれるかもしれないし。
俺に笑ってくれるかもしれないし。
俺の側でも眠るかもしれないし。
気持ちを緩めて心を預けて、一番着気に入った場所のように寄り添ってくるかもしれないし。
「で？」
「向こうにいるあいつにこっちも見てみるって言ってみます」
ぼおんと口からそう言ってしまって、あれ、と首を傾げた。
彼女の話だよな？
周一郎の話じゃなかったよな？
「向こうにあいつがいるんでしたっけ？ いや、これってあいつの話でしたっけ？」
「……おかしなやつだな」
くつくつと廻元は笑った。
「何にもわかっておらんのに、肝心のところは一つも外さぬかよ」
「は？」
「なぜ飛びおりん？」
廻元は妙に真剣な眼になった。
「え？」
「岩を越えるのだから、飛びおりれば簡単だろうが」
「や、でも」
俺はん一、と想像の目を再び上げた。
「俺には俺の作ったものとか場所があるし」
だって、俺の世界はこっち、だもんな？
「飛び下りたら、今度は上るのにまた大変だし、怪我するかもしれないし。向こうは樂園なんだろうけど、それでもどっちか片方しかなくなるよりは、どっちも行き来出来た方が楽しいじゃないですか」
世界が二倍に広がるってことだ。
「ひょっとしたら向こうに珍しい花の種とかあって、それをこっちに持ってこれるかもしれないし。こっちの畑で作ったものが、向こうだともっとよく育つかもしいし」
うん、そっちの方が絶対楽しい。
「……境に岩があっても構わぬということか」
「えーと、そうですね、構わない、な。それに」
俺は行き来している自分を見ながら、ふと最近中高生の頃より筋肉は衰えてきたよな、と思った。
「……やっぱり適度な坂とかあって行き来したほうが足腰衰えなくていいかなーとも」
「ぶわっはっは」
いきなり廻元が吹き出した。
「いや、これはたまらん」
「はあ？」
「さすが、ああいう人間にくつつくやつだ、並み大抵ではなかったな。足腰衰えなくていいか、なるほど」
げらげら笑われてさすがにむかつとする。
「なんだよ、一体」
「……百年かかったらどうする」
「へ？」
びたりと笑い止んだ相手がじっとこちらを見返す。
「その岩を越えるのに百年かかったら」
「う……や、もうそれは」
仕方ないだろう。それだけこっちの能力がなかったってことだしなあ、とぼやくと、廻元は優しい目をした。
「一生ものだぞ？」
「……ですね……まあ、そうなったら、百二十ぐらいまで生きるように頑張るかなあ」
そしたら、二十年ぐらいは楽しい思いができるかもしれない。
そう言いかけたとたんに、相手がまた吹き出して俺は口を噤んだ。
「……なんなんだよ、あんたは」
「いや、すまんすまん、わはははは、ひさしぶりに面白いなあ」
「俺は面白くない……」
「……はい……お茶」
眉を顰めたあたりで、京子がお茶を運んで戻ってきた。
「どうしやはったん？ ……おじさんと仲良うならはった……？」
「おお、そうだ、意気投合したぞ！」
「え、まじ？」

いつのまに？
っていうか、どのあたりで？
上機嫌で顔く廻元に目を見張ると、ふいに電話が鳴った。
こんなボロ寺でも電話があるんだ、文明ってのは凄いなあと呆れていると、受話器を取ってやりとりしかけていた京子がふいにへたん、と座り込む。
「京子ちゃん？」
「嘘……」
「どうしたの？」
「おにいちゃんが……死んだ……？」
「えっ」
息を呑んだ俺をのろのろと振り返った京子がからくり人形のようにことばを続ける。
「朝倉、周一郎…？ その人が……おにいちゃんと関わりがあんの……？」
「え、えええっ」
あさくら、しゅういちろうって、あのあさくら、ですかそれ。
頭の中が一瞬にしてひらがな塗れになる。
「おい、代われ」
厳しい顔になった廻元が京子の手から受話器をひったくった。よろよろと体を倒した京子が両手を畳について俯いていたのを、何かに呼ばれたようにゆっくりと顔を上げる。真白になった顔が俺を、やがてすうっとずれて俺の背後を見上げていく。
「…………おにいちゃん…三条良紀、を御存知ですか、周一郎さん」
掠れた声で断罪するようにそう言った。
「綾野、啓一は……？」
「周…っ？」
慌てて振り返ると、これも京子に負けず劣らず白い顔をした周一郎が俺の後ろで立ち竦んでいた。

5. 帰れぬ世界(1)

その日の夜。
「……おにいちゃんの持ってた手帳に」
清の家で、真っ青になっている京子と清、それに腕組みをしている廻元と俺達は、重苦しい空気の中で向かい合っていた。
京子の話してくれていた「父親の仕事先の人」というのが清だったというあたり、それを知らされた瞬間、周一郎は真っ白な顔になって俺を見た。
滝さん、僕は。
掠れた声で呟いたのを恥じるように、その後は一言も口を開かなくなってしまうが。
「『朝倉周一郎氏注文、特別謎の扇』でメモがあったそうです」
滲みかけた涙をこらえるように一旦口を嚙み、京子は周一郎を睨みつけた。
「警察の人が、おにいちゃんは……覚醒剤の密輸に関わってて、こっそり持ち込もうとしたのを空港で見つかりかけて、慌てて逃げようとして逃げ切れなくて、飛び下り自殺したって」
「……」
周一郎は無表情に京子を見返した。
「今少しずつ調べています、言うてはったけど」
京子はきゅ、と唇を引き締めた。
「うち、ここでどうしても聞いときたい。おにいちゃんに『特別謎の扇』をフランスから運んでくるように指示したの、周一郎さんなんですか」
「え、いや」
「滝さん」
それは違うぞ、こいつはむしろ巻き込まれた方で、と言いかけて、寸前で周一郎に制された。
「や、だって」
「黙っててくれませんか」
冷やかに封じられて振り向き、相手の瞳が一瞬ちらりと清に動いたのにはっとした。
そうか。
周一郎をここへ呼びつけたのも、扇の受け取りを命じたのも、綾野啓一だ。当たり前を考えれば、啓一が密輸に関わった可能性の方が高い。
だが、その啓一は清の実の息子でもある。周一郎が大事に守ろうとしている優しい乳母の大切な子供、だ。
清が京子を大事にしているのは一目瞭然、真実と誠実を守って生きているのも歴然、けれどその子供の綾野啓一は周一郎の居場所を虎視眈々と狙っている。
そのことについて清が何もこだわりがなかったのか、俺は今まで気にしていなかったけれど、周一郎は意識していただろう。だからこそ、京都へ来ることが罨かもしれないとわかっていても、自分を大切にしてくれていた乳母が変心していないか、確認に来ずにはいられなかったのだ。
清は変わらず周一郎を迎えた。周一郎は自分の好きなものが整えられた食卓や清の対応に安堵した。
安堵していた、のだ。
けれど、この、展開。
告げるな、と周一郎は言っているのだ。自分の息子が、自分が大切に育てた相手を追い落とすようなことをしているのだと知らせるな、と。
それは清の中にある誠実を崩壊させる。自分が手塩にかけた子供達がそれぞれに社会の裏に生きていたと言うことを知らないままに生きている、この穏やかな人の世界を突き崩してしまう。
「けど」
「あなたに関係ないことでしょう」
殺されても構わない、そこまでの信頼を傾けた相手だからこそ、知らせたくないものもある。
確かに、そうだが。
でも、だって。
それじゃお前はどうなるんだ。
口を尖らせた俺から突き放すように視線を外して、周一郎は再び京子に向き直った。
「もし、そうだとしたら？」
「うち……」
くしゃくしゃと顔を歪めて京子が俯く。
「周一郎さんを許せへんかもしれへん」
「坊っちゃん」
さっきから思い詰めた顔でじっと体を固めていた清が、堪えかねたようにぼつりと言った。
「何か、隠してはることおへんか」
微かに周一郎の体が揺れる。
「ないよ」
「ほんまに？」
「……ああ」
周一郎の表情は動かない。まるで他人事のように静かな対応、それに京子が苛立ったように顔を上げる。
「ほな、なんでおにいちゃんの手帳に周一郎さんの名前があったん？ おにいちゃんがフランスで、啓一さんとこで働いてるなんて知らなかったけど、それでも元気でやってるって……」
う、と堪えかねたようにぼろぼろと京子が涙を落とす。
「何か知ってんのやったら教えて。おにいちゃん、覚醒剤の密輸なんか、する人やない、もん。きっと何か理由があって、何か間違ってるって……おにいちゃん知らんかって巻き込まれたんや」
「……………良紀さんも京子ちゃんも、いい子ですのんえ」
清が辛そうにつぶやいた。じっと周一郎を見つめる目が潤んでいる。
「こんな年寄りのこと、いつも気にかけてくれたはって……」
一途な視線は息子を疑わない。良紀を疑わない。
自分の世界の清廉さを疑わない。

けれど、それは同時に悲劇の原因を他に求めることでもある。

「……」

続く清のことばを察したように、周一郎は黙っている。

「坊っちゃん。何か知ったはるんやないですか？」

「……」

「なんで、良紀さんの手帳に坊っちゃんの名前がありましたん？ 啓一は坊っちゃんが扇を注文しはった、言うてましたえ。フランスで新しいデザインを考えたのを見てもらうことになった、言うて……ひょっとして、その扇て、まっとうなもんやなかったんですか？」

「……」

「坊っちゃんは何をしたはったんどす」

思い詰めた声が響いた。

「道子のことかて…」

言いかけて口を閉じた清に、周一郎が緩やかに目を伏せる。

「あの子、優しい子でした……確かに坊っちゃんのことばはようお世話せえへんかったけど」

道子、というのは前妻、啓一の妹か。

「坊っちゃんにかて非があつたん違いますの」

おい。

思わず呆気にとられる。

なんだよ、それは。

「……坊っちゃんのこと、血が繋がってへんけど大事にしました。そやけど坊っちゃんは打ち解けてくれへんかった、人を見下したように見るばかり、妙な子供で気持ち悪い、母親の私にはそう言うてくれましたけど、坊っちゃんにはちゃんと、そういうことは見せへんかったはずで」

大事に。

それを大事にしていた、と言うのか？

そんなもの、周一郎には筒抜けだったはずだ。

「清…さん」

「なんですの」

まっすぐに見返す老女の目に揺らぎや不安はこれっぽっちもない。自分が今どれほど酷いことを口にしたのか、一切わかっていない顔。自分の信じている世界こそが真実であると疑わない目。

その目の一途さにことばが出なくなる。

気づかない、ということはこういうことなのか？

あの屋敷の中でずたずたに傷ついていた周一郎の傷みも苦しみも、清にはちゃんと見えていなかった。その中でどれほど周一郎が清を求めてすがっていたか、全く気づいていなかったということになる。

そして、その「まっとうな世界」の仕組みから見れば、今回のことも周一郎が『特別誂えの扇』を求めたのに啓一が応じて、それを届けに来たのが三条良紀、しかもその扇は覚醒剤の密輸に使われてたってことになるのか？

「それ、って」

「……」

ぎら、と殺気を浮かべて周一郎が俺を睨んだ。

浮かんだ絶望に俺は胸が苦しくなる。

「『SENS』というらしい」

廻元が苦々しい声で口を挟んだ。

「ヨーロッパの若者に急速に広まった薬の一つで、日本経由で広がっていると監視されていたらしいぞ。大体、その『SENS』という呼び名も日本の『扇』が密輸の際に使われているという符丁だということだな」

「ふちょう？」

きよとんとする俺に、

「売買の暗号だ。扇が見たい、そう言えば注文したことになるらしい」

廻元は重苦しい溜め息を吐いた。

「金を払うと扇が届けられる。その扇に描かれた絵の塗料に『SENS』が含まれてて、破いて燃やすと簡易に吸入用ドラッグとして作用するらしい。向こうでは手軽でしゃれた薬と評判だったそうだ」

「坊っちゃん」

清が滲んだ涙をそっと押さえて俯いた。

「お仕事のことはようわかりまへん。そやけど……」

切なく震えた声が訴える。

「小さいころの坊っちゃんは、こんなことに手を染めるようなお子やあらへんどしたやろ？……」

よせ。

「啓一はようおす、けど、京子ちゃんや良紀さんまで巻き込んで、それほどお商売が大事ですか」

もうやめろ。

あんたはそうやって『正しい世界』から、こいつの世界を踏みにじっているんだぞ。

「清っ」

思わず腰を浮かせてしまった。

「さっきからなんですのん！」

俯いた清が聞いたことのないきつい声で遮った。

「悲しい、言うてますのんや、私が大事にお育てした坊っちゃんが、人の情とか真実とか、そんなもん気にもせえへんで、お商売のことばかり考えるような人になってしまったのが、悲しい言うてますのん！」

「ちが…」

「何が違いますのん！ 娘のことかて子供がなかったから坊っちゃんを引き取らはったのやと我慢したんどっせ！ きついつか娘の気持ちも伝わって、坊っちゃんもなじんでくれはるやろうて！ どんないねじ曲がった子供でも精一杯尽くせば通じるはず、おてんとさんは見たはるさかい、て、言うて聞かせましたんやで！」

「きよ…」

ちょっと待ってくれ。

今あんたはとんでもないことを言ってるんだぞ？

あの家の中で、誰も信じられなかった周一郎が間違っていたって。それは周一郎が『ねじ曲がっていた』せいで、周囲の人間に落ち度はない、つまりは周一郎こそが厄介の元凶だったって。

けれど、こいつは。

あんたを、信じて。

世界でたった一人、あんたを信じて、ここまできて。

あんただけは大丈夫だと、今の今までそう思ってたはずで。

「いいんですよ、滝さん」

穏やかな声が響いて周一郎を振り返りぎよっとする。

笑っていた。

微かだが、明らかに笑みとわかる形に唇を釣り上げたまま、周一郎がずっと席を立つ。

「馬鹿馬鹿しい」

嘲笑。

おそらくは、清を信じた自分への。

「……何がおかしいん」

その笑みを見とがめた京子が嘸みつく。

「人一人死んだのに、何がおかしいんや！」

「今何を言っても信じないでしょう？ ……………僕には関係ないことだ」

冷ややかに吐き捨てて周一郎は向きを変えた。背中越しに冷え冷えとした声が響く。

「誰が死のうと生きようと」

「…坊っちゃん！」

清が悲鳴のように叫んだ。

「情けのおすえ！ 昔のお優しい坊っちゃんはどこに行ってしまうはったん！！」

そのまま立ち去ろうとした周一郎がびくりと動きを止める。

「そんなにお金が大事ですか！ そんなにお商売が大切ですか！ 人の命はどうでもええんどすか！」

「……………僕がどこに行ったかって？」

僅かに見せた横顔が歪む。

「ずっと、ここに居ますよ」

振り返って凍りついた顔で繰り返した。

「あなたの望む形じゃないだけだ」

動かない表情、けれどその背後に真っ暗な穴のような孤独。

ルトを連れてこなかった。

ふいにその意味に気づいた。

ひょっとして。

お前はひょっとして、騙されたままでいるつもりで。

ルトが居れば、この清の気持ちの裏側は筒抜けになっていたはずだ、もっと早く、もっとはっきり。

けれどそれを見ないつもりで。

なのに、こんな形で。

「周一郎…」

「ちょっと休んできます。連絡があったら呼んで下さい」

「坊っちゃん！」

くるりと身を翻して、周一郎は部屋を出ていった。

5. 帰れぬ世界(2)

『信じていた坊っちゃん』に裏切られたと嘆く清と、『好きになりかけた男』が肉親を死に追いやったと落ち込む京子を廻元に任せて、俺は二階へ上がった。

見せられている世界と、見えてくる世界のギャップが大きすぎて、かなりきつい。

俺でさえそうなら、俺より鋭いあいつの胸に刺さったものは、どれほど太い杭だろう。

「周一郎？」

「何ですか」

やっぱり、休むつもりなんてなかったのか。

携帯とノートパソコンを忙しく操作している相手を痛々しく見下ろした。いつもより固く強ばった表情は下で見せたほど冷たく見えない。むしろ、追い詰められて必死に道を探そうとしているようだ。

当たり前だよな。

あんなに大事にしていた相手にあっさり切られて。それを弁解もできなくて。その迷いさえ見せられなくて。

ことばも気持ちも何もかも封じられて。

こいつに今一体何が残ってる？

何を信じることができる？

まるで全身切り刻まれて、それでも無理に走っているようだ。

押し入れを引き開けてさっさと布団を敷き延べる。一段落ついたあたりで振り返って声をかけた。

「周一郎」

「だから、何です」

「布団敷けたぞ」

「だから？」

「休むんだろ、寝ろ」

「……」

あなたは馬鹿ですか、とこれはことばに出されなくても呆れ顔でよくわかった。

「何かわかったのか？」

「……いえ」

瞳を伏せて苛立たしように別の番号を当てる。だが状況は芳しくないらしい。疲れた顔で通話を切る。

「良紀さんが死んだのは確かですね。状況も京子さんが言った通りだ」

「そんなところから確認したのか？」

「いろいろと伝手がありますから……それに公的発表というのは操作しやすい」

嘲笑するような冷やかな瞳で見返した。

だが、俺の凝視にすぐに視線を逸らせて、

「『SENS』の情報も確かだ……けれど、わからない、いつこっちのルートを利用されていた……？」

独り言のようにつぶやく顔は険しい。すぐ再びパソコンに向き直り、素早く指を走らせて画面を開いていく。どれほどガキんちょに見えようと、こいつが事実上朝倉財閥のトップなのは揺るぎない事実、それを見せつけるように次々と手配を進めていく。

「日常交易じゃない、だが確かに『SENS』のルートには僕の名前が流れている……『トップ・トランス』のチェックには引っ掛かっていない……フランス側で細工されたか？」

低いつぶやきに、珍しく苛立った気配があった。

『トップ・トランス』は周一郎が動かしている貿易会社の一つだったはずだ。高野は今回はそこがメインで啓一とやりとりしていると聞いた。周一郎のことだ、自分や朝倉家に対する備えは十分にしているだろう。だが、今回のように、まさか啓一が自分の身内を使って仕掛けてくるとは思っていなかったのかもしれない。

普段の周一郎からすれば十分に甘い備え。

きっと清、ゆえに。

「……なあ」

「はい」

「お前は本当に関わってないんだな？」

きつとした気配で周一郎は振り返った。

「『SENS』に手を出すなら、僕ならもっとちゃんと手を打ちます」

「そういう問題じゃないだろ」

おかしい文句を言った相手に苦笑し、ちょっと覇気が戻った気配にほっとした。

こういうところが微妙にずれてんだよな、こいつは。

「……僕は薬には手を出しませんよ」

ふ、と気を抜いたような息をついて、周一郎がつぶやいた。うっとうしように肩を竦めながら、

「確かに効果的な集金システムではありますが、リスクが大きすぎる」

さらりと言い放った。

「薬剤依存というのは、考えられてるより簡単に人間を壊すんです。始めは売り捌くだけに関わっていても、遅かれ早かれ末端の人間が侵される……人間は弱い生き物だから、苦痛をすぐに取り除いてくれるものが身近にあって手を出さないのは至難の技だ」

サングラスの向こうの目は感情が読めない。

連絡が戻ってきたのだろう、かかってきた携帯に応じ、パソコンで確認し、次の連絡先にあたり、指示を与え、小さく溜め息をついて話を続ける。

「そうやって薬に侵された人間が組織に益になるか？ とんでもない、害にしかありませんよ。どんな些細なストレスにも薬に手を出すようになって、しかも回復に時間がかかる。切り捨てても薬のためなら平気で裏切るし何でもやる……どれだけ叩き潰してもどこからか噛みついてくる」

十八にしてはひやりとした冷たい目で俺を見返した。

「欲望で暴走する人間を制御するほど、つまらなくて意味のない仕事はない」

あっさり言ってくれる。つまらなくて意味がない、と来た。

俺が怯んだのを察したのだろう、目を逸らせて、

「……わかるとは思ってません」

掠れた声でつぶやいた。
ふいに机に向かって正座しながらパソコンを操る姿が、ひどく小さく脆く見えた。
こいつは俺の知らないことをいっぱい知ってて、俺の見てないものをいっぱい見てて、そうやって理解した世界ってのはきっと、さっきみたいに追い詰められて身動き取れなくなるようなものばかりだったんだろう。そういう世界で生きてきたのに、今さら人の感情なんて求められても、そんなものどこにも持ってない。なのに、それが欠けてるとまた責められて。
一体どう生きればいいのか？
ことばにならないものが、周一郎の中に吹き荒れている。
「すまん」
「……え？」
「わからなくて、すまん」
振り返った周一郎が不安そうに瞬きする。
「なぜ……」
「うん？」
「なぜ、あなたが謝るんです？」
「いや、何だか……お前がわかってほしかったらうに、わからなくて悪かったなあ、と」
「っ」
ふいに周一郎が見る見る赤くなって、今度はこっちが呆気にとられた。
「別に、わかってほしかったわけじゃない」
「あ、うん」
「僕はわかってほしかったわけじゃない」
「そうか」
「別にあなたにわかってほしかったわけじゃないんです」
「う、うん」
おい、何をむきになって。
「あなたがわかろうとわかるまいと」
「あ、あのな、もう十分わかったから」
「何をわかったって言うんだ」
「いや、だから、お前が別にわかってほしかったわけじゃないってよくわかったから」
「わかってない」
「いや、だからお前はわかってほしくないってわかったって」
「わかってほしくないってわかってもらっても、そんなの全然わかってな……っ」
「は？」
ふいに周一郎が一気に真っ赤になって口を噤んだ。
あれ？
何か今、ニュアンス変じゃなかったか？
「なあ、周一郎？」
「ちっ」
おお、珍しい、舌打ちなんかしやがったぞ、こいつ。
「とにかく……あなたには関係ないことです」
むっとしたように眉をしかめてパソコンに向き直る。
「僕は忙しいんですから、黙ってて下さい」
「……清、にも？」
「……そう、です」
こちらを向かないままぼそりつぶやく。
「……あのままじゃ、誤解されたままだぞ？」
「……構いません……それに」
く、と低い笑い声を漏らした。
「今さら信じてもらおうなんて思ってやしません。っていうか、信じてもらってもいなかったようですが」
冷笑。
僕もずいぶん甘かった。
吐き捨てるようにつぶやいた。
「だから、こんなところに突っ込まれる。事実、僕が関わってたかもしれないだし」
「けど」
けど、お前が清に向けてた気持ちはどうなるんだよ。
「肝心のことはしゃべらねえのな」
「話しても無駄です」
「そうやって何も話さない気かよ」
「僕に無駄な時間は必要ありません」
「俺と話してんのも？」
「……」
「……そんなことしてたら、回りに誰もいなくなっちゃうぞ？」
びく、と周一郎が動きを止めた。パソコンから視線を上げて俺を見返す。
「……どうぞ」
低い声で静かにつぶやいた。
「出て行きたいなら勝手に出て行って下さい。僕にあなたを、止める権利は、ない」
「いや、権利とかじゃなくて」
「何です」
「俺が出ていったら、お前は悲しいか？」
「……」
「寂しかったりするか？」
「……悲しいわけも、寂しいわけも、ないでしょう」

周一郎はのろのろとパソコンの操作を再開した。
「元から、いなかったと………思えばいい」
一瞬唇を噛む仕草が幼くて、その脳裏に誰が過ったのか透けて見えた気がした。
なんだ、やっぱり。
やっぱり、清に信用されてなかったのが辛かったんじゃないか。
「………ああ」
ふい、と何かを思い出すように、視線を上げた。
「出て行くときにはバイト料の精算をさせますから、ちゃんと早めに伝えて下さい。今日言われて明日というのも困ります、最低でも一週間前とか………一ヶ月前とか………」
そのまま少しぼんやりした顔で遠くを見ている。
「………滝さん」
「ん？」
「………もう、出て行きますか」
静かな柔らかな声で尋ねてきた。こちらを見ずに明後日の方向を向いたまま、
「………今聞いておけば、京都から戻ればすぐに出ていけますよ？」
「あのな」
それほど人を追い出したいのかよ、と続けかけて、相手がじっと答えを待っているのに気づいた。パソコンに触れた指が止まっている。
「まだ………出ていかねえ」
何だかその沈黙に気持ち呑み込まれたような気がして、思わずつぶやいた。
そうだ出ていくわけにはいかない。
全身創痕のこいつを放り出せるわけがない。
今俺にも少し見えている、こいつが生きている世界が。
唐突に思い出したのは廻元に尋ねられた岩の話だ。
俺は今きつと崩れた欠片を積んで、ようやく岩の向こうを覗いてみたところなんだろう。
そうして見えた世界は実のところこちらの世界と全く違って見えるように見えたのに、よく見ると鏡映しのよう
にいろいろなものがそっくりに置かれている。花園があり、泉があり、美しい建物がある。
けれどその花園はこちらの世界で見えるように「花がある」というのではなく、その茎や葉や、そこに居る羽虫
や幼虫も見える。泉は湧き出してくる場所で砂が舞い上がっているとか、その上を泳ぎ過ぎる魚が流れに巻き込
まれてうろたえるの見える。建物は施された細工がどのように作られたのか、その作業がわかる、職人が仕事
をしているからだ。
いろいろなものがその現在だけではなく過去と未来をそこに凝縮させていて、確かに美しい、けれどあまりの
情報量に頭も感覚もついていかない。
ただ一つわかっているのは、その光景が何だと断じられないことで。
咲いている花を蝕む昆虫、どちらも命だ。吹き出す水に叩きつけられて傷つく魚、どちらも正しい。建物はど
れもまだ未完成だが職人の生き甲斐を提供しているとも言える。
意味は一つじゃない。
片方だけしか見えなければ選択にも責任にも怯まなくて済むが、その両方の世界を突きつけられるというこ
とは。
二つの世界を同時に抱えるということは。
周一郎が沈黙するしかないのがわかる。
だからこいつはその狭間で否応なしに引き裂かれてて、自分を閉じるしか身を守る術がない。
けれど、それではもう堪えきれないほど、傷ついていて。
部屋で額に載せてやったタオル。
あれはこっちの世界を封じるってことだったんだなあ。
いや『羞明』そのものが、かけているサングラスが、周一郎を世界から少し隔てて守っているってことか。
じゃあ、俺の役割は？
俺は何ができるんだろう？
坂を造って、二つの世界を行き来できるようにさせてやると、どうなるんだろう？
額に載せてやったタオルみたいに、片方の世界を閉じてしまっても生きていける、そう教えてやることだろ
うか。
ならば周一郎はそのとき、どちらの世界を閉じるんだろう。
二つ抱え切れなかったら、俺ならどちらの世界を選ぶだろう。
「滝さん…？」
促すようにやっぱりこちらを向かないまま、尋ねてきた声に我に返った。
そうだとにかく今は。
「行くともないし」
「そう、ですね」
まるで壊れた人形が唐突に直ったように、周一郎はまた忙しく指を動かし始め、小さく吐息をついた。

6.雨に消える

「じゃ、行ってくる」
「よろしうお頼もうします、滝さん。気をつけてな、京子ちゃん」
「うん、おばちゃんも」
暗い顔でペこりと頭を下げた京子は、居間で向かい合って座っている周一郎と京都府警の刑事に視線を投げ、清にゆっくり背中を向ける。

今朝早々、京都府警から来た刑事が二人、周一郎に詳しい事情を聞きたい、とやってきた。本当は所轄署の方へ出向いてほしかったらしいが、相手が朝倉家唯一の相続人、しかも先の事件では被害者で未成年、配慮すべしと通達でもあったのかもしれない。不愉快満面でやってきたが、迎えた周一郎がどう見ても、覚醒剤どころか万引きすらしそうなない気配に拍子抜けしたようだ。

それでも詳しい話は弁護士同席の上でと切り出され、一筋縄では済まない相手とは思ったらしく、顔繋ぎ兼ねて、といった顔で上がりこんでいる。

京子はひとまず実家に戻って両親と今後の相談をすることになった。廻元は夕べのうちに寺に戻っていて、まだ不安そうな彼女は俺が駅まで送っていくことになった。

厳密に言うのと、付いていくことになった、のだが。

「滝さん……何してはんの？」
先に行く京子がきよるきよるしている俺を振り返ってきた。
「えーと、ここをこう出て、あそこで曲がって、だな」
時々振り返って道を確認しているが、段々微妙な気分になってくる。
「帰れますのん？」
「俺も今それが気になってる」
「ふふ……変な人やねえ、滝さんて」
暗い顔をしていた京子がようやく少し笑ってくれてほっとした。
駅について時間を確かめ、切符を買う。入場券を買って一緒にホームに並び、しばらく無言で立っていたが、
「少し時間あるな……ジュースでも買ってこようか？」
「ううん……」
松尾駅はホームの半分以上を満開の桜が覆っている。
京都の桜の名所と言え、嵐山が先に上がるが、ここの桜もどうして見事なものだ。近くの松尾大社は平安京の昔からの由緒ある神社、参拝客も多いのだが、その割にはこの駅はひなびた雰囲気が残ってるよなあと思われていると、

「滝さん」
ぼつりと京子が呼び掛けてきた。
「うん？」
「うち、わからへん」
「？」
「あの、周一郎さんて、何なん？」
何なん？
何なん、と言われても困る。
どう見たって人間だろうが、そう真面目に答えそうになって、そういうことではないのだと気づいた。
「人の命をどうでもええ、やなんて」
いつの間にか潤んだ目で、まっすぐに向かいのホームの桜を睨みつけながら、京子は続ける。
「おにいちゃん、死んでしもたのに。そら、あたしはあの人にとって他人やけど、おにいちゃんは関係あった人やのに」
「……」
「おばちゃんの大事な人や言うても動じへん。覚醒剤とか、そういうこと聞いても、しらっとして」
ぼろ、と耐えかねたように零れてくる涙に胸が詰まる。
「十八、やて聞いた。そやのに、あれ、何？」
あれ、何、か。
「人の顔してるけど、人間ちゃうわ」
「京子ちゃん」
思わず口を挟んでしまった。
「何やの？」
ぎゅっと唇を引き結んで見上げてくる相手に、何を言えばいいのか、何から話せばいいのかわからなくなる。
人間じゃない、か。
人の命が大切に、温かい情や思いやりをやりとりするのが当たり前な世界に住む京子に、周一郎が生きのびてきた場所をどう説明すればいいのだろう。誰も自分の命を守ってくれなくて、毎日心理戦を繰り返して、へとへとになって疲れ果てても助けさえ求められない。確かに暮らしは豪勢だったけれど、ずっと荒野に置き去られてきたようなあいつの気持ちをどう話せばわかってくれるだろう。
俺だってきっと本当のところはわかっていないだろう、けど。
それでもあいつはぎりぎりのところで踏ん張ろうとしてて。
冷たくなり切ってしまう方がいいところを捨て切れなくて。
そこに付け込まれて踏みにじられて、誰も信じられない、そう思ってる中で、清の存在がどれほどかけがえなかったか。
けれど、今はその相手も信じられない、ののしられるしかない状況で。
「俺、あいつ好きだけど」
「……」
「あの、そりゃ、いろいろと我が儘だったりそっけなかったりするし、外から見てる限りいい人間には見えないかもしれないけど……俺は」
「そうだ、俺は。」
「俺は、あいつを信じてるから」

「え？」
「今度のこと、うん、確かに手帳とかにはあいつの名前が書いてあったりしたけど……うん、それは確かにお兄さんが書いたもんだらうけど」
それでもきっと何か理由が。
「理由？」
京子が苦しそうに顔を歪めた。
「おにいちゃんが、殺されていていい、理由？」
「違うって」
俺は慌てて首を振った。
「殺されていい人なんていないよ。ただ、薬とか、殺人とか、そんなもんにあいつは関わって…」
るかもしれない、んだよな、そこんところは、と思わず言い淀む。
朝倉周一郎が無傷で無垢な人間ではないことは、俺が一番知っている。それこそ、手を出すつもりなら『完璧に』『干渉したことさえ見せることなく』出しているだろうけれど。
「あいつは殺してなんか…いない」
「口だけやったら何とでも言えるやん。……滝さんはなんでそこまで周一郎さんを信じられるのん？」
「う」
いや、そりゃ確かに騙されたけどな？
目一杯綺麗に騙されたことがあるけどな？
「やっぱりコイビトやから？」
「だーかーら！」
それは違うって。そう言いかけた瞬間、ふい、と京子の体が視界から消えた。
「きゃあっっ！」
「え……うあっ」
京子が突き飛ばされたとわかったのは、続けて俺もホームから線路に転がり落ちてから、次の瞬間、全身思いっきり打ちつけて激痛に動けなくなる。
「ったああ……っ」
ぐらぐらする体を必死に起こした耳に、かんかんかんかん、と派手な音が鳴り響いた。
「うるせ……って、おいっ！」
一体何の音だよ、そう思った瞬間に全身の血が引いた。慌てて周囲を見回す。
「京子ちゃんっ？ 京子ちゃんっ……っ」
叫びながら顔を動かすだけでへたりそうになるのを、必死に堪えて見渡した視界の端、くたりと線路の上に寝そべった姿があった。
その向こうに、はっきり迫ってくる電車の影。
「京子ちゃんっ！」
這いずるように近づこうとした矢先、
「、うわっ」
「おいっ、あんたっ、ほらっ立てっ」
いきなり側に飛び下りてきた男が俺を引き上げた。
「や、待て、あそこにつ」
「いいからっ、ほらっ！」
男が悲鳴のような声を上げて俺を抱えて線路を渡る。
「やめっ、やめろっ！」
じたばたしながら男にホームの下に引き込まれると同時に、がんっ、と頭を鈍い衝撃が襲って、そのまま俺は崩れ落ちた。

「……滝さん？」
「……？」
「目が覚めましたか？」
覗き込む周一郎の顔にゆっくり瞬きする。
「怪我はほとんどないそうです。強運ですね」
微かに目を細めた周一郎の顔は透き通るほど白い。能面のように微笑んでいるようにも怒っているようにも見える表情は静かで動かない。
「怪我……？ ……ああっ！」
俺は跳ね起きて、周囲を見回した。
白い部屋、白いベッド、クリーム色の壁。
一目で病室とわかるその部屋に寝かされているのは俺一人だ。
「京子ちゃんはっ？」
「……」
す、と周一郎が目を逸らせた。動かない表情のまま、
「亡くなられました」
淡々とした声が続けた。
「……」
まさか、冗談だろ。
そう言いかけたけれど、周一郎がこういう冗談を言うはずがない。
脳裏に線路に倒れて動かなかった京子の姿が過る。
「……駅員の話では、不審な男が居たと」
静かで揺れない声が呆然としている俺の耳に届く。
「滝さん達のすぐ後ろに立っていて、おかしい様子だなと注意してたら、いきなり京子さんとあなたを線路に突き落とされたそうです。急いで駆け寄って、近くに落ちたあなたをホーム下に退避させた時、柱にあなたをぶつけてしまったそうです」
ああ、それで頭を殴られた状態になったのか。
「京子さんはあなたから意外に離れて倒れていて、もうそこに電車が迫っていて、別の駅員が電車を制止するの

も間に合わなかったそうです」

なんで、そんなことに、と思った瞬間、閃いた考えをつい、口にする。

「……………狙われた、のか……………俺達……………」

びく、と周一郎が震えた。

「……………警告、でしょう」

「警告？」

「動くな、と」

「誰に……………誰が……………」

ふい、と周一郎が振り返った。サングラスの奥からまっすぐに俺を見て、

「真実がわかると困る誰かが」

「は？」

ちょっと待ったあ。

俺の頭の中に、じゃっじゃっじゃーんっ、とよく聞いたことのある派手な音楽が鳴り響く。脳裏に、血まみれの包丁だの、断崖絶壁から転がり落ちる人影だの、難しい顔をして首を振る警官だのが動き回る。

「か…」

「か？」

「『家庭教師は見た、幻想の裏に隠された殺人者の影と焼肉弁当の真実の意味！』」

「は？」

「あ、ごめん」

思わず口走った俺に周一郎が間抜けた声を上げて瞬きした。

「ちょっと、何だかドラマの主人公になったみたいな気がして」

や、そうでも考えないと、この深刻な空気を支えきれないって言うか。

「ドラマなんかじゃない」

周一郎が冷ややかな声で呟いて、またゆっくり目を細めた。

「死にかけたんですよ」

声が凍りついていて、その底に殺気が漂っている。

怒っているのだ、と気がついた。

事の重大さを理解していない俺に。

「わかってる」

わかってるよ。

でも無理だろ、信じられないだろ。

だって、さっきまでそこに、手が触れられる場所に居たんだぞ、京子ちゃん。

ジュースと一緒に飲もうとしてて、涙で潤んでいた眼を俺は見下ろしてて。

なのに、もうどこにも彼女がいないってことなんだぞ。

しかも俺はまだ生きてるけど、実は危うく殺されかけたってことで。

生と死の境があまりに近くて、俺は自分がどちらに居るのかまだぴんと来ない。

微かな既視感があった。

そうだこれもまた、あの岩、の光景だ。

両方の世界の境界線に俺は立たされているということなのか？

「……………すみません」

ふいに周一郎が謝った。

「？」

「……………僕の、せいです」

「は？」

「僕が、あなたと、関わったから」

「いや」

「僕が、あなたを、こんなところに連れてきたから」

声が幼い響きで震えた。

「僕が、京子さんを、殺して」

「周一郎」

「あなたも、殺しかけた」

「それは」

違う、全然違う話、そう言いかけた矢先に戸惑う。

本当にそう、だろうか？

もし周一郎に関わらなければ。周一郎の世界へ踏み込もうとしなければ。

もしかして、こいつとの世界の接点というのは、神話で言うヨモツヒラサカのようなもの、なのか？

俺が黙ったのを、一瞬周一郎はふいと見上げ、やがて微かに笑った。

「そう…ですよ」

優しい声。

一瞬、周一郎が俺の頭の中の問いに応えたように錯覚してことばが出なくなる。

心の中を見抜かれたような気がして。

その俺の戸惑いも感じ取ったように、周一郎は虚ろな笑みを広げた。

「僕と、関わったから」

「周一郎…」

「だから、もう…」

サングラスの奥で、瞳が光を失うのが見えた。

「滝さんは、僕に」

関わらない方がいい。

言い聞かせるような声は本当に聞こえたものだろうか、それともただの想像か。

「待て」

こいつ、消えてしまう。

不安が募って手を伸ばしたとたん、急にドアが開いて転がるように清が入ってきた。

「滝さん！」

「あ」

「滝さん！！ よろしおした、よろしおしたなあ！」

涙をぼろぼろ零してしがみついてくる老婆は周一郎を振り返りもしない。まるでそこには誰もいないかのように、いやそこに誰かはいのだけれど、そこは見てはいけない場所のように、清は周一郎に伸ばした俺の手を搦めとるように引き寄せ、しがみついてきた。

椅子を立ててベッドの側を離れた周一郎が、すうっと影が吸い込まれるように開いたままのドアの方に後ずさりする。

「あんたはんまでどうにかなってしもてたら、私はもうどうしたらええんのか！」

「き、清、ちょっと」

ちょっと待ってくれ、あいつ、何だかおかしい。

何だろう、まるであいつの周囲だけ全ての音が聞こえないような。

まるでそこだけ世界から切り離されてしまったような。

幻のように輪郭ををぼやけさせながらドアを出ていく周一郎、それだけでも現実のこととは思えないのに、ドアから出る瞬間、こちらを見返した周一郎の瞳がまた微かに笑ってるようでぞっとした。

「周一郎?! 清さん、ごめんっ！」

「あ、滝さんっ！」

なおもすがりついてくる清を邪険だとは思ったがぐいと押し退けて、何とかベッドから滑りおりる。靴を履くとぐらっとしたのを一瞬堪え、すぐに部屋を飛び出した。

「周一郎っ? 周一郎っ！」

いない。

薄暗くなりつつある窓の外、廊下を照らした灯りは煌々としているのに、そのどこにも周一郎の姿がない。

「くそっ」

なぜ?

今出ていったばかりじゃないか。

不安が一気に募った。

「どこ行ったんだよ！」

どこに行けるんだよ。

ぞくぞくする何かか背中を這い上がるのを振り払い、廊下を走り受付を通り抜けかけて、周一郎が通らなかったか聞いたなら、傘を渡された。

「？」

「その方ならさきほど外へ……雨が降ってきましたからどうぞ」

「あ、どもっ」

頭を下げて傘を開いて玄関から走り出す。

そこは松尾駅の近く、松尾橋の袂にある病院だった。救急で運び込まれたらしいが、受付もまさかこれほど元気なのが救急患者だとは思っていなかったのだろう、引き止められなかった。

「周一郎っ！」

清はここにきている。あの家には戻れない。

「周一郎ーっ！」

清はここに来た。ここに周一郎はいられない。

「どこにいるっ！」

雨は次第に強くなってくる。暗さを増す世界に車のヘッドライトが五月蠅い。

誘われるように橋へ向かっていた。

橋を渡れば駅がある。一人でどこに行く気か知らないが、この急な雨では観光地のタクシーは捕まらないだろう。それでも、ここには居られない、そう虚ろな顔が教えていた、ならば、一体これからどこへ。

「周一郎……あっ！」

傘の波の中、橋の中ほどで一人歩く姿があった。

まるで雨など降っていないような淡々とした足取り、夢遊病者のそれにも似て、迷いがなさそうなのにどこか妙に頼りない。

あんなに濡れて。

慌てて目の前を遮った青い傘を押しやって駆けていく。

「周一郎っ！」

びく、と体を震わせて唐突に相手が止まった。

ほっとして一瞬速度を緩めた俺を、ゆっくりと振り返る。

真っ白な顔、真っ黒に瞳を隠すサングラス、濡れそぼった髪を鬱陶しそうにかきあげて、張りついたジャケットが細い肩をなお細く見せて。

滝さん。

唇が微かに動いた。戸惑ったように不思議そうな顔で首を傾げる。

その周一郎の後ろから、急ぎ足にやってきた男がどすんとぶつかった。よろめいた周一郎が橋の欄干にもたれかかる。銀色の金属製のそれは見えているより丈が低い。のしかかるような動きでそのままふわりと川面を見下ろす周一郎の顔が、一瞬、何かとてもいいものを見つけたように嬉しそうに綻んで、俺は息が止まった。

「周一郎っ！」

待てよ。

何をする気だ。

何をそんなに嬉しそうに。

「こら、ああっ！」

手にした傘を振り捨てて地面を蹴る、手を伸ばして必死に走り寄り、傘を押し退け人を掻き分けて。

けれど、その指先からわずか数十センチ先で、周一郎の体がまるで水底からの見えない何かに引きずり込まれたように欄干を越え、暗い水面めがけて滑り落ちていく。

瞬間、外れかけたサングラスの向こうから、闇のような目が見返してきた。黒い水のような、虚ろで遠い瞳が安堵したように切なく揺れて、次には諦めたような微笑みに閉じられる。

これでいい。

白い唇がそう動くのがはっきりと見えた。
重い水音が車の騒音を越えて響き渡る。
「人が落ちたぞっ！」
「おいっ、誰か警察っ！」
「周一……っ！」
見えない砂に足下を攫われたように力が抜ける。
「く、そ……っ」
悔しいとも悲しいとも言えない気持ちに視界が滲む。助けなくちゃ、そう思っているのに立ち上がれない。慌ただしく走り回る周囲、遠くから聞こえるサイレンの音、脳裏に高野や清、京子の顔がぐるぐる回る。
届かなかった。
もう少しだったのに。ほとんど届きかけていたのに。ほんのわずか遅れたから。自分の直感を、おかしい、そう感じたのを、ほんの一瞬信じなかったから。
ふいに、座り込んでしまった俺の肩にぽん、と何かが当たった。
「……？」
見上げると青い傘が視界を覆った。ついで、白く月のように光る顔。
「志郎？」
「……お由宇……」
「どうしたの？ 何があったの？」
「周一郎が……周一郎が」
消えちまった、そう吐いた瞬間に吹き上がってきた涙に俺はお由宇にすがりついた。

7.幻の絆(1)

ルルルッ。ルルルッ。
「はい、佐野です」
柔らかく鳴ったベルの音にお由宇が立ち上がって受話器を取った。
「はい……はい、そうですか、いえ、大丈夫ですので……御心配おかけしました」
俺の気配に気付いていたのだろう、話しながら椅子の背にかかっていたバスタオルを投げてよこした。
「ええ、はい、明日にでもそちらへ伺います。……風邪引くわよ」
受話器を置いて振り返る。
「体しっかり拭いて。それから、無闇にタイルに八つ当たりしないでちょうだい」
言われてようやく、なぜ右手が痛いのがわかった。こぶしに薄赤く血がにじんでいる。のろのろと投げられたバスタオルを拾って体を拭き、巻き付けてソファに腰を降ろした。
どうしてなんだ？
頭の中にはそのことばがぐるぐる回っている。
どうして、身を投げた。
エンドレス・テープのように頭の中に何度も何度も周一郎が欄干から落ちていく場面が流れていく。
どうして、待ってくれなかった。
外れかけたサングラスの下の真っ黒で虚ろな瞳。
どうして、諦めた……俺が、居たのに。
「はい、手を貸して」
差し出した右手に包帯がはかったようにきっちり巻かれていく。それを見るときもなく見ながら、また悔しいとも悲しいともつかぬ苛立ちが沸き上がってきた。
「病院を飛び出したままだったでしょう、清さんも病院側も行方を探して大変だったのよ」
「……い……かげんにしろよ」
「え？」
「……自分一人……辛いとか……思ってやがるんだ……っ」
「志郎」
「そりゃ、清にまで責められて、行き場もなくて、けど」
「……志郎」
「俺だって、高野だって」
そうだ、朝倉家で高野はきっと心配しながら待っている。そんなことさえ周一郎は忘れてしまったっていうのか。
「みんな……みんな、あいつを心配してんのに」
「志郎」
それとも、そんなこんなも届かないほど、周一郎は何もかもどうでもよくなってしまったのか。
『……僕の、せいです』
表情のない顔に過った傷み。
『僕が、あなたと、関わったから』
『僕が、あなたを、こんなところに連れてきたから』
震えて掠れたつぶやき。
『僕が、京子さんを、殺して』
『あなたも、殺しかけた』
「志郎」「違うだろ…」
頭の中で俯く周一郎に首を振る。
お前のせいじゃない。お前が引き起こしたことじゃない。
それでも。
おそらくは、周一郎や朝倉家が関わったことが、京子や良紀を巻き込んだのは確かだ。俺が怪我をしたり殺されそうになったのも、おそらくはそのつながりで。
あの瞬間、俺はそれを初めて理解した。
それはたぶん、周一郎の居る世界をきっちり感じとったから。
そこに踏み込んでいけるのか、俺は。
それほど力が本当にあるのか、俺は。
一番信じなくちゃいけなかった時に、俺は自分を疑った。
その俺の怯みを、周一郎は確実に読み取っていた。
だからこそ、諦めた。
こちらに戻ってこないと決めてしまった。
きっとそういうことなんだ。
清を詰れたもんじゃない。高野を嗤えたもんじゃない。
「……俺も…追い詰めただけ…なのか？」
だから、あいつは死ぬことの方を選んじまったのか？
「でも……でも……っ」
きっと他に何かもっといい方法があったはずだ。お前が死ななくてよくて、清も少し楽になって、そういう方法が何かきっとあったはずだ、なのに。
「死んじまったら探せねえだろっ！」
パンッ！
「てえっ！」
いきなり頬を殴られて我に返った。
「お、お由宇」「何をぐるぐる考えてるの」
お由宇は静かに言い捨てた。
「あなたが考えて何か解決するとでも？」
「おい」「何か？」

ひらひらと白い掌をかざされて思わず小さくなる。
「いえ、はい、ありません」
「よろしい」
お由宇はいつの間に淹れてくれたのかコーヒーのカップをそっと押しやって微笑んだ。
「落ち着きなさい。病院には連絡を入れておいた。周一郎は、今警察が捜索してくれている。清さんには廻元さん？ あのお坊さんについて面倒を見てくれている。今あなたにできることは何もないのよ」
「……うん……」
俺は唸ってカップを取り上げた。
「お由宇」
「何？」
「周一郎……本当に」
そのことばを口にするのが怖かった。
けれど、逃げていても何もきつと始まらない。
「自殺、したんだろうか」
「……私が知っている限りでは朝倉周一郎が自殺するなんてあり得ないわね」
くす、と微かにお由宇は笑った。
その慣れた口調にふとひっかかる。
「前から聞こうと思ってただけど」
「ん？」
「お由宇、ひょっとして前から周一郎を知ってるのか？」
「……そうねえ」
表向きは単なる心理学科の大学生、その実、いろいろな情報を苦もなく集めることができる奇妙な友人はくすぐつたような顔になった。
「知っていると言えば知っている……けれど、友人だったことは一度もないと思うわ」
「じゃあ、何だ？」
「何……ねえ」
自分もカップを持ち上げてゆっくりと中身を口に含む。
「……商売仇……と言うべきかしらね」
「商売仇？」
なんじゃ、それは。
尋ねようとした矢先、再び電話のベルが鳴ってお由宇が立ち上がる。
「はい……え。ええ、はい、わかりました。今そこに？ ええ、伺います」
受話器を置くときらきら目を光らせて俺を振り返る。
「願いが通じたわね。周一郎が見つかったらしいわ」
「え！」
「今、あなたが運び込まれていた病院に収容されているって。比較的水も飲んでなくて、本人も疲れてて『誤って』落ちたから、必死に泳いで何とか這い上がった、と言っているらしいわ」
「病院だな、わかった！」
バスタオルを後ろへ払いのけ、俺は勢いよく立ち上がった。前に座って、コーヒーの残りを飲んでいたお由宇が一瞬びくりと体を震わせ、やがてゆっくりと目を伏せて溜め息をつく。
「いきなりとんでもないものを晒さないで」
「え……？ あっ、あ——っ！」
「叫ぶのは私の方でしょ」
平然とつぶやいたお由宇の前で俺は慌ててバスタオルを引き寄せて蹲った。
「お、俺のジーパンとシャツっ」
「もう乾いてるでしょ、お風呂場」
「サンキュ、お由宇！」
急いで飛び込み、洗濯機の上に載せられていた服を着込んで飛び出す。
「助かった、いろいろと！ またお礼するから！」
「あ、志郎」
ばたばたと玄関で半乾きの靴に脚を突っ込んだ俺は続いた声に固まった。
「ところで、ここからどうやって病院に行くのか、わかってるんでしょうね？」
「わ、かりません～」
ひきつって振り返る。
「考えてみたら、なんでお前、こんなところにいるんだ？」
「ようやくそれに気付いたの？」
お由宇はしみじみと大きな吐息をついた。

病院に慌ただしく戻ってみると、入り口付近ですれ違ったのは今朝見たばかりの刑事達、当然俺にもまた事情聴取があると思ったのだが、相手は不愉快そうなしかめつつらで側をすり抜けていく。

「あ…れ？」
「滝さん、ですネ？」
その中に一人がふいと思直したように戻ってきて、軽く頭を下げた。
「あ、はい」
「いろいろとこちらでお聞きしたいこともあったんですが、朝倉氏が事件性がないことを保証すると言われていきますので、我々は引き上げます」
「は？」
朝倉氏？
形式ばった言い方に戸惑うと、先に出ていきかけた警官が早くしろ、もう関わるな、と吐き捨てるように呼び掛けてきた。わかってる、と応じた目の前の警官が、小さく溜め息をついて、
「できたら、もうこれ以上ややこしいことをせんとして下さい」
「はあ」

「じゃ」
「あの」
言いかけた俺を振り切るように警官は脚を速めて遠ざかっていく。
つまり？
これってドラマとかでよくある『圧力がかかった』とかいう状況、みたいなんだが？ まあそりゃどうしても尋問受けたいとかそういう趣味はないが、調査打ち切りだとしたら、京子と良紀の死んだことはどうなってしまおう？
首を傾げていると、受付から呼ばれて、周一郎の部屋を教えられた。
「あなたも休んで頂きたいんですが。朝倉さんが入られたのは個室ですし、簡易ベッドもありますから」
「はあ……すみません」
なるほど、今夜はもう同じ部屋で大人しくしておいてくれ、ということか。
じろりと見上げてきた受付に頭を下げる。かなり落ち着かない不安定な感じはするが、とにかく周一郎が無事かどうかを確かめたくて教えられた部屋に急いだ。
「周！……一郎……？」
一気に飛び込もうとして、そうだ、こいつは溺れかけて助けられたところだったんだ、と寸前思い出し、そろそろとドアを開けると、
「滝さん…」
煌々と明るい部屋の中、薄緑の寝巻きのようなものを着せられた周一郎が、白いベッドの上ではっとしたように振り返った。
サングラスはどこかに流れてしまったのか掛けてなくて、それでも平然としている姿に、いつも整えられていた前髪が乱れていることだけが事件を思わせた。確かに怪我はなさそうで、ほっとしたように潜めていた眉を緩めてふわりと笑う。
「……すみません」
あれ？
その瞬間、さっきの落ち着かなさを数倍にしたような奇妙な感覚が俺の中に広がった。
「滝さん？」
「……大丈夫か？」
「はい……御心配おかけしました」
近寄るに従って俺を人なつこく見上げ、僅かに微笑んだ瞳はきれいに澄んでいる。心配をかけたと言いながら、自分の方が俺を心配しているようなその表情に、ますます違和感が募ってくる。
「大丈夫、なのか？」
「え？」
「なんか、………明るくないか？」
ああ、そうだ。
無意識に尋ねたとたん、違和感の正体に気付いた。
明るすぎる。
こども。
周一郎の笑みも。
あれほどずたずたになっていたのに、なんでこんなにあっさり笑う？
いや、確かに周一郎なら、どんなに傷ついていても仮面を被り通せるけれど。でも。
すごく残念だけど、周一郎なら、こんなふうに俺を見上げてきたり、受け入れたりしないんじゃない、か？
「え？」
なんだよ、周一郎なら、って。まるで、周一郎じゃないみたいに。
俺は自問自答に戸惑った。
「明るい？ そうですか、外から来るとそう見えるかもしれません。………僕、どこかおかしいですか？」
まるでその俺のうろたえを見抜いたように周一郎が微かに顔を歪めた。
「滝さんにもう心配させたくないから………落ち着いたふりをしている、つもりですが」
「あ、ああ」
落ち着いたふり、か。なるほど。うん。確かにそうも言える、そう見える、けど。
けど、周一郎なら、そんなことは言わないんじゃないだろうか、とまた奇妙な感覚に引っ掛かった。
「は？」
「あ、いや」
だから、何だよ、この、周一郎なら、って。
慌てて口を押さえて零れそうになったことはばを飲み込み、少し後ずさりする。
「滝さん？」
姿も声も仕種も顔も、周一郎そっくりだ、ってか周一郎以外の何にも見えない、なのに、なんで俺は。
「疲れ、てんのかな」
「……いろんなことがありましたから」
沈んだ声になった周一郎が俯く。
「滝さんが僕を疎ましく思うのは仕方ないですけど」
傷ついた痛々しい表情。大事な友人に嫌われたかもしれないと不安がる少年の。
けど。
だから。
だからさ、そういうことは周一郎ならきつと言わない。そういう顔を晒さない、そう思った。それを見た相手が付け込んでこないかと恐れて。不安を見せることで俺を傷つけないかと心配して。
なら、誰だ？
ここに居るのは、一体誰、なんだ？
「ベッド、があるんだよな」
危うくそのまま尋ねそうになり、それがこのベッドの上の周一郎をひどく傷つけるだろうと想像がついて、俺は慌ててベッドの下を覗き込み、片付けられていた簡易ベッドを引っ張りだした。必要以上に必死になってベッドを組み立て、二度指を挟みかけ、一度したたかに脚をぶつける。
大丈夫ですか、と覗き込んでくる周一郎に、何度も、違うそうじゃない、そう言いかけては、気にすんな、と

無理にことばを押し出し、ああ、あいつはいつもこんな気分だったんだと思った。

違和感と不安を押し殺して。相手の言動にぴりぴりして。

自分のことばも表情も必死にずっとコントロールして。

「今夜はここで寝てやるから、安心しろ。明日か明後日、体調が落ち着いたら家に戻ろう」

「はい……ありがとうございます、滝さん」

「……電気、消すぞ」

「はい」

うなずいて大人しくベッドに横になる周一郎に背中を向けて、俺も簡易ベッドで横になる。

ありがとうございます、だって？

確かに他人がいるところじゃ、周一郎もそれほどとっつきは悪くない。

だが、俺の知っている周一郎というのは、口が悪くて皮肉屋で素直じゃなくていじっぱりで。

でも、誰よりも深くいろんなことを感じ取ってて、だからこそ自分の気持ちも何もかもをいつも押し込めて、何重のもの鎧で心を隠し切っていて。

いつ休めていた？ 眠っている間もルトの視界が生きている。逃げ場がないまま、否応なく、惨い真実に晒され続けて。

当たり前じゃないか、人と関れなくなっても。

自然じゃないか、一人で生きると決心しても。

……普通なんだ、信じられなくても。

なのに、俺は。

すうすうと背中で微かな寝息を感じたとたん、そうだ、きっと、こんな時には絶対自分が先に眠るようなことはない、そう思ったとたん、とうとうほそりと尋ねてしまった。

「お前、誰だよ？」

7.幻の絆(2)

「あの家は知り合いの家なのよ」
数日後、俺と周一郎が戻ると聞いて、お由宇は嵐山駅まで送りに来てくれた。
「ちょっとこっちですることがあって来てたの……清さんは来てないのね」
「ああ」
俺はホームの椅子にちょこんと座っている『周一郎』を横目に声を潜めた。
「いろいろあいつの仕事のものもあったから、荷物は取りに行かせてくれたんだけど」
俺の頭の傷は案じてくれた、無事に朝倉家へ戻れるように神仏に祈ってくれるとも言ってくれた。
けれど、『周一郎』に対しては終始頑なで、周一郎が何度か話し掛けても、丁寧だけどそっけない、失礼ではないけれど関わる気はない、そんな対応ばかりで。
どうも清は、京子や良紀の事件に警察が碌に動かないことに苛立っていて、それは朝倉家が『何か』したのだらうと思っているらしい。
『人の真実言うのは、お金や力で動かさへんもんでっせ』
別れ際にぽつりと言われて、周一郎は一瞬怯み、
『いつか清も、僕が何も関わってないってわかってくれるよ』
そう小さな声でつぶやいた。
そうしてやっぱり俺は、周一郎ならきっとそんなことは弁解しないだろう、と思い。
真実。
その真実が、自分にとって惨いものでも、清はやっぱりそう言うんだらうか。
もし俺に見えている通りのものが真実ならば、清は、他にもない、自分の息子が、乳母として育てた子どもの命を狙い、大事にしてくれていた知人を殺し罪を被せたこと、また覚醒剤を流通させて多くの人間を苦しめているということ、を受け入れなくてはならない。
清自身も、息子を信じる余り、周一郎を自殺させるまで追い詰めたことを認めなくてはならない。
そんなことを本当に望んでるんだらうか。
……たぶん、それは望まない。
自分や自分の身内が汚れた手の持ち主だと受け入れることは、清の世界を壊してしまうから。
だからこそ周一郎は沈黙を守って身を引いたのだ、もう誰に信じてもらえなくても構わないと。そしておそろくは、それでもまだ大切な、かけがえのない人に、無用の苦しみを与えまいと。
「そうなんだよな」
「え？」
「周一郎、は黙り続ける、つもりだったはずなんだ」
お由宇が少し首を傾げる。
「なあ、お由宇？」
「何？」
「あいつ、『周一郎』に見えるか？」
「……どういうこと」
「見えるよなあ？ どっからどう見ても、『朝倉周一郎』だよな？ 他人の空似とかクローンとか、あいつそっくりのアンドロイドとかには見えないよな？」
お由宇はゆっくりと眉を寄せた。
「……つまり、あなたには『周一郎』に見えない、と？」
「お前にはそう見えるよな？」
「……ええ」
「だよな？ やっぱりそうだよな？」
はあ、と思わず溜め息をついた。
そうなんだ、誰が見ても『周一郎』に見える。清だってそう扱ったし、電話で迎えに来るの来ないのを打ち合わせしていた高野も別に何も感じていなかったみたいだし、何よりここまで仕草や何かまでそっくりな人間なんていないんじゃないかと思う、思いはするのだが。
「なんだかなあ……」
ほら、今だって、と思わず考えちまう。
あいつはサングラスの後ろで、確かに眩そうに目を細めている。けれど、視線の先にあるのは日差しを浴びてきらきら光っているようにさえ見える桜で。
周一郎なら、あんなものを見ているだらうか。
一瞬、脳裏に朝倉家に居る周一郎を思い浮かべる。
そうだ、きっと周一郎なら、どれほど見事な桜でもどれほど心魅かれても、眩しそうに羨むように見た次の瞬間、静かに目を背けるだらう。生き生きと輝く桜にもう居なくなってしまった京子を重ねるから。この美しい世界から彼女を切り離してしまったのが自分だと改めて思い知るから。
きっとあんなふうに、ただ単純に美しいなあという顔では見ないだらう。
「見えてるもんだけじゃ、ないもん」
周一郎の視界に入るのは、表面に見えている事柄だけじゃなくて、その事柄が成り立った意味込みだ。通常では見えないその世界、できれば見たくなかったものまでも、目の前に突き付けられ確認させられ、人の好意とか誠意とか優しさなんて全く信じられなくなってるのが周一郎なのに。
ああそうか、と気がついた。
二つの世界の境界に立って、どちらの世界にも属せずに、ただ一人引き裂かれる。
この前から俺が感じていたあの感覚をずっと抱えているのが周一郎なのだ。
だからこそ、気持ちや感覚を封じ、人と深く関わる事を恐れて。
ふい、と急に『周一郎』が振り返り、じっとこちらを見てどきりとした。
「……何だ？」
「いえ、滝さんがいなくなったような気がしたから」
微かに目を細め、すぐにそういう自分に照れたように苦笑した。
「子どもみたいですね」

「……高野に迎えに来てもらった方がよかったな」

「いえ……もう嵐山へ電車で来る機会もないでしょう」

だからこれでいいんです、と続けたのは確かにやはり『周一郎』に見える、けど。

俺がいなくなったと不安がることできる、それを人に訴えられる、そんなことができるなら、あの橋の上であれほど虚ろな目はしなかったと思うのは考え過ぎなんだろうか。

「……凄く引っ掛かっているのね」

「うん」

「ある人間が確かにその人間であるかどうか、かなり難しい証明だわね」

「だよな」

「人間は何をもって個別認識されているか、ってことよね」

「……うん」

顔も姿も仕草も癖も、ことば遣いさえそっくりで、なのに、なぜ俺は『こいつ』は周一郎じゃない、と感じているのか。その抛り所となると、ことばにしてしまえば幻のような、僅かな僅かな反応の違いにしか過ぎないのに。

人は変わる。

周一郎が清や京子のことでいろいろ衝撃を受けて、少し甘え気味になったり人なつこくなったりすることはあるはずだ。事実、朝倉家の事件の前と後では、周一郎はずいぶん俺とは距離を縮めてきたのだから。

同じような変化が、本当のところは自殺かどうかわからない、あの一件で周一郎に起こらなかったとは言えないはずだ。死にかけた恐怖が周一郎を人に近づけた、そう考えればいいだけだ。

だけど。

「確実に見分ける方法なんてないしねえ」

「うん……」

確実に見分ける方法。ある人間を確かにその当人だと見極める方法。

くす、と唐突にお由宇が笑った。

「『秘密』があればね」

「は？」

「あなたと周一郎だけしか知らない秘密があれば、それで確かめられるでしょ」

「そんなもの…」

あるかよ、と言いかけて、俺は目を見開いた。

電車がゆっくり入ってくる。周一郎が立ち上がる。振り向いて俺を呼ぶ顔に上の空で頷き、お由宇に手を振って周一郎の側に駆け寄りながら、俺の頭の中を青灰色の小猫が尻尾をくねらせてすり抜けていく。

ある。

あるじゃないか、これ以上ないぐらい、とっておきの『秘密』ってやつが。

「滝さん、早く」

「わあッた！」

この前の事件で全てを知っていたルトが、今度もただ一つの真実を教えてくれるかもしれない。

俺は速度を上げ出した心臓を『周一郎』に悟られまいとした。

8.まがいもの(1)

「お帰りなさいませ！」
高野はきつとずいぶん長く、玄関で待っていたのだろう。俺達が門扉を開けて中の小道を進む間に、もうそこまで出迎えに来ていた。暮れ始めた春の日射しの淡さのせいもあったのだろうが、明らかにあやうげな足取りの周一郎を気づかったようだ。

「お疲れでしょう」
いそいそと荷物を受け取り、少し先を進む高野が、時々物問いたげに振り向いてくる。
俺と同じ違和感を感じたのかと声を低めて尋ねてみる。

「何だ？」
「いえ」
「何だよ」
「……あれほど、お願いいたします、と申し上げましたのに」

「う……すまん」
責めるような相手の視線に思わず謝る。
そうだ、そうだった、俺は一応周一郎の供として付いていったんだ。

「滝さんのせいじゃない」
周一郎が鋭く聞き付けて、高野をたしなめた。

「僕が不注意だったんだ」
「……申し訳ありません」
一瞬戸惑ったような顔になった高野が周一郎へとも俺へともわからぬ曖昧な仕草で頭を下げる。

「僕は……楽しかった」
顔を背けながら微かにつぶやいた周一郎が、そういう自分に照れたように少し足を速める。よかったですね、と言いたげに振り向いてくる高野に、俺は微妙に引きつった。

だからさ。
そういうことをあいつは言わないって。
「……高野さん、ルトは？」

「は？」
「いつもならまっ先に迎えに来てそうだけど」
そう言えば、と高野が周囲を見回す。
湖の方へ回る小道からも、屋敷の方からも駆けてくる青灰色の姿はない。

「さきほどまでは居たのですが……」
玄関のドアを開けた岩淵が慌ててスーツケースを受け取る。吐息をついて肩を落とす周一郎に、高野が影のように寄り添う。

「お食事はお部屋に運ばせます。お風呂は」
「食事も風呂もいい」
「ではお休みのお支度を……滝さまは」
「あ、俺、腹減ったから何かもらってくるよ」
「そうですか…じゃあ、すみませんが、僕は先に休みます」
「ああ、おつかれさん」
高野に付き添われ、のろのろと部屋に向かう周一郎を見送る。

「お荷物を」
「あ、頼む」
岩淵が俺の鞆を抱えながら食堂に案内してくれた。
「あまり整えておりませんが」
「うん、コーヒーとパンでいい……それより、ルトを見なかったか？」
「ルト、ですか」

岩淵が不思議そうな顔で眉を寄せ、そう言えば、このところあまり見ていませんね、と続けた。
「周一郎さまが御不在のときもお部屋に居ることが多いのですが」
「ふうん」

どうぞ、と促されて、白地に緑で草花を描いたカップのコーヒーと一盛りの各種テーブルロール、バターとジャムを揃えられた席に腰を降ろす。もぐもぐ食べ始めた俺を残して、岩淵が夜の巡回の手配に出ていく。

整理しておこう、と思った。
綾野啓一という男は周一郎を恨んでる。
今回の『SENS』がらみの一件にわざわざ身内の清を巻き込んだ遣り口、しかも手駒である良紀の意味がなくなつたとなるとあっさりとは始末していつているような動きには、本当に容赦がない。

けれど、そういう手管や俺を狙ったことにはどんな意味があったのか。
周一郎を孤立させる意図はあったんだろうが、もし周一郎を殺したかったのなら、そんな面倒なことをしなくても京都に居る間にいくらでも機会があったはずだ。

清の世話になっている間には面倒を起こしたくなかった？ まさか。そもそもそういう殊勝なことを考えたなら、わざわざ周一郎を京都に呼び出したりはしないはずだ。

それに、あの『周一郎』だ。
あれほど似ている人間が、それほどほいほい世の中に居るとは思えない。だから、あれは周一郎、そう考えるのが筋が通ってはずだ。朝倉家に『周一郎』は居る、いつものように、いつもの顔で。だから事件は何も起きていない、たとえ本物の周一郎がどこかに捨て去られていても。

「そうやって周一郎を心身ともに孤立させて追い詰めて、……自分から姿を消すようにし向けた……？」

つまり綾野は、周一郎の偽者をたてて朝倉家を乗っ取るようとしている、ということか？
偽『周一郎』にはここでの豪勢な暮らしが手に入り、綾野は周一郎を苦しめることで妹の復讐ができ、同時に『SENS』がらみで危うくなった朝倉家を立て直すところを口実に事業を仕切る、絶好のチャンスになる。それこそ世間一般には何の問題もなく。

まるで、この間、周一郎がやったことみたいだ。自業自得、そうやってしまえばそうだろうけど。

ばかりと胡桃入りパンを噛んだ。しっかりした歯応えと胡桃の香りを味わいながら、いつかの朝食、めったに見せない周一郎の淡い微笑を思い出す。

『どこにそれだけ入るんですか』

『ブラックホールみたいに言わないでくれ』

『驚いてるんですよ』

『呆れてんだろ』

『……………食事も楽しいものですね』

サングラスの向こうで細めた瞳の静けさ。

誰かと一緒に食べるのも、楽しいんだな。

聞こえるか聞こえないほどの小さな声で。

「幸せなんかじゃ、なかったのに」

周一郎にとっては、この朝倉家も強制された居場所の一つ、ここでしか生きていけなくて、しかも望んでトップについたわけでもない。莫大な財産とか通常手に入らない地位とか、人生で成功の証とされるものを次々受け取ったあいつの世界には、いつも血みどろのものしか残ってなくて。

幸せじゃなかったのだ。

それこそ、綾野が羨むようなものなんて、周一郎は何一つ得ていなかったのだ。

窓辺に立ちすくむ小さな姿。

大悟の墓標を叩く幼い仕草。

傷ついても痛みを堪えて一人耐えて眠れない夜に側に居たのはルトだけで。

それでも、それまであいつが生きてきた世界よりはまだまだずっと生きられる場所だっただけ。

綾野の妹が早くに死んだのだから、その後大吾がそうそうに若子を迎えたのだから、あいつの責任じゃない。

なのに、掌でそっと抱えるようにあいつが守っていたものまで奪い去れる、どんな権利が綾野にあった？

「……くそっ」

唸って苛立ってきた頭を無理矢理戻す。

今最大の問題はそういう人生論じゃない、と無理矢理頭を切り替えた。

もし万が一、あいつが周一郎じゃなかったとしたら、本物の周一郎は何処に居る？

病院から出ていったのは確かに周一郎だった。欄干から仰け反るように落ちたのも。

なら。

脳裏に冷たい水の中に沈んでいる周一郎が浮かんで、思わずごっくん、とコーヒーを呑み込んだ。

もし、あの『周一郎』が偽者ならば、俺まであいつを見捨ててきちまったってことになるのか？

「ひえ！」

ふいにさわり、と足下に何かが擦りつけられて飛び上がった。

「にい」

「ルト！」

覗き込むとちょこんと座った青灰色の小猫は大きな目を少し細めて牙を剥いてみせた。

「た、ただいま」

報告しろよ、そう言われたような気がして、のそのそと床に座り込む。テーブルを覆った白いクロスがちらちらするのが邪魔で、ルトを招いたけれどこちらへこない。むしろ少し奥に身を引いて、来いよ、と言いたげに顎をしゃくられ、四つ這いになってテーブルの下へ潜り込んだ。

「高野さんに見つかったら、また一体何をされてるんですかって言われるぜ」

「にゃ」

「どこに居たんだよ、お前……なんか毛並みががさがさしてるな」

胡座を組んだ膝の中へ入ってきて、ルトは耳を伏せて俺の掌に頭を擦り付ける。おお珍しい。撫でてくれと甘えてきているようだ。周一郎がいなかったから寂しかったのか、と抱え込んで頭を撫でていると、ふいに食堂のドアが開いた。

「誰か……っ！」

かぶ。

「うお」

急いでテーブルの下から出ようとした俺の指をルトが可愛らしく噛みつく。閃光爆裂、神経回路が一瞬真っ白になった気がした。

「なにをす…」

ぎりり。

痛い痛い痛いっ。

ルトがじろりと冷たい目で見上げてきて、口を閉じてから気付く。

「滝さん…？」

周一郎……？

「あ」

そうか、もし今入ってきたのが本物の周一郎なら、俺を探すことさえしないはず、まっすぐに回ってきてテーブルを覗き込み、何をやってるんですか、あなたは、と眉をしかめて言い捨てるはずだ、何せ周一郎はルトと視界を共有してるんだから。

わかった。確かめてみろって言ってるんだよな。

ルトは俺の指に食いついたまま、じっとこちらを見上げている。

「滝さん？ 居ないんですか？」

休むと言ったはずだが、何か気になることがあったんだろうか。

『周一郎』はスリッパを鳴らしてゆっくりとテーブルを回ってくる。息を詰めてルトと睨み合っている俺の横を静かに通り過ぎ、もう一度戻ってきて、それから。

「……トイレかな」

低い呟きを漏らしてゆっくり戸口へ向かい、もう誰も部屋に居ないと思ったのだろう、もっと微かな声で唸った。

「あの間抜け、気付きやがったのか…？」

はい、間抜け、ここに居ますけど。

思わずそう言って飛び出したくなかった俺に、ルトがゆっくり口を開いた。わかったよな、と言いたげに指をペ

ろんと舌で舐めてくる。

「……あいつだけ……おかしな目でみやがって……連絡つけた方がいいかな」

声は周一郎と全く違うイントネーションでつぶやいた。

「綾野さん……俺がミスったって言うかな」

綾野。

そう言ったよな、確かに。

ルトがまた目を細めて指を舐める。

「……だから俺にはわかんねえって言ったのに」

偽者、なんだ。この『周一郎』ってのは、完璧に替え玉なんだ。

緊張して俺は続いたことばを聞き取ろうと耳をすませた。

「……男同士もそういう関係ってのは、ごまかせねえもんかな」

戸惑った不安そうな声が続ける。

「最後まで……やんのかな」

はあい？

「俺……我慢できっかな」

あいつしつこそうだし、きつそうだしな、と呟く相手にざわざわと鳥肌が立った。

ちょっと待った、そういう関係ってどういう関係どころ。

ぐちゃっ、とつぶれた頭の中を必死に立て直しながら考える。

男同士って誰のことだ、ひょっとして俺と周一郎のことか。いや、そもそもその情報はどっから仕入れた、なんか根本的なところが間違ってるぞ、わかってんのか。わかってないなら今ここで説明してやる、いや、是が非でもしてみたい。

そう体を起こそうとした俺の指を、ルトがしっかり噛み直す。

「い……っ」

「ちっ……やっかいなことになったぜ」

幸い俺の呻きは相手には聞こえなかったらしい、いまいましそうな舌打ち一つして、『周一郎』は部屋を出ていく。その足音が閉まった扉の向こうにゆっくりと消えていくのを待って、俺は唸った。

「ルトっ！」

「にゃん」

「にゃんじゃねえっ、お前人の指をすめるめか何かと間違えてんじゃないだろうなっ！」

「にゃご」

指を吐き出したルトがいかにもまずそうにべろっと舌をだし、横を向いてけほけほと咳き込んでみせる。

「人の指食っというそれかっ、大体お前はなっっ！」

「……滝さま」

ふいにがばりとテーブルクロスが引き開けられ、俺は慌てて振り返った。

「……そこで何をなさってるんですか」

岩淵が奇妙な顔で覗き込んできて首を傾げる。ルトがひょいと俺の腕から体をくねらせて飛び出し、いかに嫌々捕まってしまった的に一目散に逃げていく。

残ったのはテーブル下で胡座を組んで、噛まれた指に涙目になっている俺一人。

尋ねられて仕方なく、俺はへらりと笑った。

「……ちょっとかくれんぼの練習を」

「かくれんぼ……」

「今度全日本大学対抗かくれんぼ大会地域予選があって」

「そんなものがあるんですか」

「……ないよな？」

「……聞き始めです」

で、一体何を、とそこは高野とそっくりにあくまで生真面目に聞いてくる岩淵に、のそのそとテーブル下から這い出す。

「さっきの鞆」

「はい？」

「そのままにしといてくれ」

「は？」

「明日……もう一度京都へ出かける」

「もう一度……？」

岩淵が不審そうに首を傾げた。

「周一郎さまですか」

『どうぞ、滝さんは綺麗な女性と楽しんできて下さい。高野、一人分で手配しろ』

まるで遠い日になってしまったような出発のときの周一郎のことばを思い出してずきりとした。

あの時からきつと、周一郎は覚悟をしていたのだろうけど。

「いや、一人で。……とところで物は相談なんだけど」

バイト代の前借りは高野さんにおっしゃってくださいね。

心得た岩淵のことばに俺は引きつり笑いを返した。

「京都に？」

翌朝、いつもより少し遅く朝食を取っていた『周一郎』はさすがに驚いた顔になった。

「昨日帰ってきたばかりですよ？」

「それがさ」

清のところに忘れものしてきたみたいで。

俺はへたな言い訳を続けた。

「大学の資料本、ほら、持っていった文庫本あったろ？」

「……そう、ですか」

やっぱりな。

『周一郎』は戸惑い、あやふやに頷く。

別にあれは特別な本じゃない。それどころか『持っていった本』でさえない。どこの駅にでも売っている最近の話題作というやつ、それこそ暇潰しにキオスクで買ったものに過ぎないけれど、それをこいつは知らない。「仕方ないですね……でも、滝さんまでなぜ襲われたのかははっきりしてないんですから、無闇に動き回らないで下さいね」

「大丈夫だろ、向こうにお由宇も居るし」

「……佐野さんですか？」

「話してなかったっけ？」

「あっちで会われたんでしたね」

「ああ、なんで向こうに居たのかははっきり言わなかったけど、知り合いの家を別荘代わりにしてるとは言ってたろ？」

「ええ」

ほら、また引っ掛かったぞ、お前。

思わずそうからかいたくなって、慌ててコーヒーを呑んだ。

お由宇の話など周一郎にしていない。というか、周一郎が川に落ちた後に出会っているのだから話せるはずがない、なのにこいつは驚きもしない。

とすると、やっぱりいるんな情報は逐一こいつに伝えられてはいるけれど、凄く細かなこと、俺と周一郎の間のやりとりなんかは十分に掴んでないってことだ。

だから俺が狙われたんだな、と気付いた。

もちろん周一郎に罪悪感を負わせるという意図もあっただろうが、俺が一番、周一郎の違いに気付く可能性があった、だから消しておこうと思われたのだ。

「げ」

「は？」

「あ、いや」

待てよ、と喉に詰まりかけたトーストを無理矢理呑み込む。

ってことは、俺もあんまりうかうかしてられないってことじゃないのか？ もし『周一郎』が俺の動きが不審だとか考え出したら、それこそ傍目外聞かまわずに始末されかねないってことじゃないのか。

「清に……」

「ん？」

「清に連絡して送ってもらってはだめですか？」

『周一郎』が考え込んだ口調で尋ねてきて、また違和感に首を捻る。

だからさ。

ああいう事態になって、しかも清に複雑な思いを抱いている周一郎なら、絶対そんなことは言い出さないだろうに、なぜこいつもこいつを送り込んできたや奴も、そういうところは見逃しているんだろう。ここまで完璧に『周一郎』をやるんだから、きっと並々ならぬ努力をして練習してきたに違いないのに。

まるでこれじゃ、周一郎の上っ面しか見てないようなもの……。

そう考えてふいにすとんと納得した。

そうか。

こいつの振るまいは世間が知っている『朝倉周一郎』そのものなんだ。

冷静で温和でもの静かで苛立つこともなく穏やかで大人で切れ者で。

おそらくは周一郎が世間に向けて被っていた仮面そのままを演じている。

けれど、本当の周一郎っていうのは、いじっぱりで頑固で意固地で性格が悪くて皮肉屋で寂しがりで落ち込み

系で、ついでに世間を舐めてて嘲笑ってて絶望してて、けれどそういうのを感じる自分も大嫌いなんだなんて、誰も知らないのだ。

周一郎がどれほど普通に平凡に暮らすことを望んでいて、小さなほっとする時間を探しまくっていたかも、誰も知らない。誰にも一度も見せていない。

だから、今こいつが演じているこのままだが『朝倉周一郎』だと思われている、おそらくは、高野、にさえ。

だから、誰も気付かない、のか、こいつが『周一郎』じゃないってことに。

「ひでえ……」

「何？」

「あ、いや、こっこの、こと」

何だかひどく辛くて俺は残ったコーヒーを一気に飲み干した。

そんなのあんまりじゃないか。

こんな人形みたいな、こんな造りものみたいなやつが、周一郎だなんて思われているなんて。

誰かにそっくり入れ代わられちゃってるのに、一番側に居るはずの高野まで気付いてやれないなんて。

それはつまり、誰も本当の周一郎のことなんか見てないってことじゃないのか。

あいつがどれほど苦しんでるか、誰もわかってないってことじゃないのか。

今も行方不明になっているままなのに誰も探してやらない、この状況と、そっくりそのままだったってことじゃないのか。

あんな思いまでして、大怪我して世界中を欺いて、周一郎が必死に守った居場所なのに。

その居場所で一緒に居た人間は、周一郎の願いも気持ちも気付いていない。

それでも僕にはここしかない。

そうつぶやいて冷たく背中を向ける姿が脳裏を掠めて胸が詰まる。

「もう出かけるんですか」

「うん、列車、予約したから」

じゃあ、俺は探してやらなくちゃいけないよな。見つからなくても、もっとひどいことを見つけてしまっても、俺は周一郎を探してやらなくちゃいけない。

でないと。

「あいつ、どこへも帰れなくなっちゃう」

思わずつぶやいて、しまった、と顔をあげると、目の前の『周一郎』が凍りついた顔で俺を見つめている。

「あいつ……？」

「あ、ああ、その……文庫本をそう呼んでるんだ！」

「はい？」

「だから、文庫本を『あいつ』って」

「……あいつ……」

「そう、あいつ」

「……変わった趣味ですね」

「そ、そうか？」

ごまかせたか？ ごまかせなかったよな？

ちらちら『周一郎』を見ると、相手はしばらく固い表情でこちらを見ていたが、やがてゆっくりと溜め息をついて、テーブルに置かれていた手紙の束に手を伸ばした。

「まあ、今さらあなたの趣味をどうこうしようという気はありませんが」

「は……はは……は……？」

引きつり笑いをしていた俺の視界に、ふいに『それ』が見えた。

『周一郎』の右耳たぶの後ろあたりに小さいけれどくっきりとした黒子がある。いつもはまっすぐ向いているし、髪の毛に隠されていて見えない場所だが、俺は何度か寝込んだ周一郎の面倒を見ているから覚えている。

周一郎は、珍しいほど黒子がほとんどない。特に顔から首筋にかけては、思春期の男にあるまじき滑らかな皮膚、陶器を思わせる白さで透けるのはあまり日差しを浴びないせいだろう。

前に宮田が、彼はあそこがいいよな敏感そうで、とにやにやしたのを殴ったこともあるからはっきり覚えている。

けれど、目の前の少年の皮膚にはくっきりと黒子が浮かんでいた。

状況証拠ではない物的証拠、というやつ。

それを見せつけられて、さすがに平静が保てる自信がなくなってきた。

こいつは周一郎じゃない。ならば本物の周一郎はどうしたんだ。

生きているなら、なぜ連絡を寄越さない。連絡を寄越せないような状態になっている、のか。たとえば、とっくにもう。

背中に氷を当てられたような気がして、慌てて席を立った。

「じゃあ、行ってくる」

「いってらっしゃい」

差し込んだ日射しの中で眩そうに目を細めた相手が、ほっとした顔で振り仰ぐ。

その、周一郎そっくりの、けれど決して周一郎がしないだろう表情に胸が痛んだ。

8.まがいもの(2)

昨日の京都は温かで心安そうだったのに、今日の京都はまるで警戒心剥き出しだな。

そんなことを思って入浴したのがまずかったのか。

「……迷った……」

「にゃ？」

ボストンバッグから顔を出したルトが、竹林の中を通り抜ける道のまん中で立ち止まってしまった俺を見上げてくる。

「確かこういう道だったと思うんだが」

嵐山駅を出て、まさか清を訪ねるわけにもいかない。

手近の交番で、川に落ちた人間が助けられたとか、行方不明になった人間が見つかったとか、そういう話はなかったか、と聞いたけれど、『周一郎』救出の件ばかりで、新たな手がかりはなかった。

仕方なしにあの廻元和尚にでも会って相談してみようと思ったのだが、考えてみれば、行きは京子に連れられて、帰りは和尚に導かれているから、道をはっきり覚えていない。それどころか、寺の名前もはっきり覚えていないし、もちろん住所や電話番号も知らない。

何とかなるんじゃないかと山手の方向に歩き出してみれば、どうにも何ともならなかった。

京都の道は碁盤の目なんて誰が言ったのか、細い曲がりくねった道が唐突に別の道路や私道らしい未舗装の道にぶつかるものの、どちらへ行けばどこに繋がっているのか、看板一つまともにも立っていない。

こっちかな、いや、こっちだったかも、とうろろうしたあげくどンドン妙な方向に入り込んでいたようで、周囲は昔話に出てくるような密生した竹林、林道に人影一つもなく、道の先は山の中へ入るばかり、振り返っても離れてきた住宅街は影形もなく、完璧に迷ってしまった。

「この場合、『金色に光ってる竹』を見つけるか、『大きなつづら』がいいか『小さなつづら』がいいか聞かれるかってとこだな」

「ふ、にゃっ」

やれやれ。

そう言いたげにルトがボストンバッグから体を乗り出し、つるんと中から滑り落ちる。

「な〜」

「お前どっちだかわかるか？」

「……な〜」

俺を振り向いて鳴いてみせたルトを見下ろすと、相手はふん、と鼻を鳴らして顔を背け、竹林の上に広がる空に向かって静かに鳴いた。

「誰か呼んでくれるとか？」

「な……ぐにゃう」

ちょっとは黙れ。

そんな感じでじろりと睨まれて、慌てて口を嚙み、へとへとなった腰を降ろす。

「……野宿…するもの、ここじゃちょっと」

ざわざわと風が渡っていく。揺れる竹の向こうに紫に煙り始めた空がある。一気に暗さを増してくる林道には、街灯一つない。

「……ひょっとして、真っ暗？」

うわ、それは嫌だ。

「な〜う…」

ルトは何度か鳴いた後、無言で耳をすませるように黙った。

「何か聞こえるのか？」

俺もルトのまねをしてみたが何も聞こえない。

とにかく、せめて車が通る道までぐらいい探そうと向きを変えると、ルトも諦めたようにトコトコと付いてくる。古い笹の葉が散り落ちた道は足下が危うい。何度も滑りそうになって、それでもようやく抜けたと思ったら、道より数メートル上の場所に出た。斜めに緩やかに下っている低い崖は柔らかそうだが、その下の道はアスファルトで落ちると痛そうだ。

「にゃ」

「おい！」

ルトはくるっと尻尾を回して器用に崖を降りていく。細い足が軽々と地面を蹴っていくのに、仕方なしにそろそろと屈み込み、俺も足を踏み出そうとしたが、それがまずかった。

「ど？ ど、どわわわっっ！」

「ぎゃっ」

一気に足下が滑ってボストンバッグを振り回しながら落ちていく俺に、ルトがぎょっとしたように慌てて飛び退く。

「ひえええ…っ」

思いきり枯れ葉を散らしジーパンの尻を擦りつけながら、下の道まで転がり落ちた。頭を抱えて何とか打ちはしなかったが、そこら中擦りむいて、目はちかちかするし、しばらく蹲ってしまう。

「う〜」

「な？」

「……何とか」

「ふ、な」

ドジなやつ。

ルトが笑うように牙を剥いたとたん、はっとしたように顔を上げる。

「え、何、どうし……わーっ！」

ふいに、緩やかな坂を勢いよく乗り上げてきた自動車が目の前に現れて息が止まった。ヘッドライトに照らされて一瞬視界を失う。叫びながら頭を抱え込んで、こんなわけのわからないところで、しかもわざわざ交通事故でおしまいかよ、と神様を詰ったとたん、けたたましいブレーキ音をたてて車が止まった。

「大丈夫ですか！」

「う」

「どこがぶつかったんですか！」
運転手が大声で叫びながら降りてきて覗き込む。
「いや、その」
別にあんたが轢いたわけじゃないから安心してくれ、そう言おうとして顔を上げた俺は、後部座席のドアが開いてもう一人小柄な姿が現れたのに気付いた。
「溝口、どうした」
「申し訳ありません、直樹さま、この方が突然」
「轢いたのか」
ぎょっとしたような声を上げて、小柄な人影は急ぎ足に近寄ってくる。
「大丈夫ですか」
「や、別に俺は車に轢かれた、わけ、じゃ……」
覗き込んできた相手の顔がヘッドライトに照らされた。
歳の頃十六、七のまだ子ども子どもした男、ばさりと垂れたうっとうしそうな前髪の下には驚いたように見張った真っ黒な瞳、かなりの美形に入るだろう顔立ちは。
「周、一郎……？」
「は？」
「周一郎！」
転がり落ちた痛みも忘れ、思わず俺は立ち上がって、差し出された相手の腕を掴んだ。
「何でお前こんなところに！ いや、それよりも、無事なら無事とどうして知らせなかった！」
苛立ちと興奮に相手を揺さぶりながら喚く。
「なんで朝倉家にも戻ってこない！」
「直樹さまに何をする！」
「ちょ、ちょっと、待って、下さい」
茫然としていた溝口と呼ばれた運転手が急いで割って入ってきて、周一郎自身も怯えたように腕をねじって逃げ、俺は呆気に取られた。
「周一郎？」
「この方は直樹さまだ！」
溝口が俺と周一郎の間に立ちはだかつて叫ぶ。その背中に庇われて、周一郎が不安そうな表情でそとこちらを伺ってきて、俺は混乱した。
「ルト…？」
小猫は足下にちょこんと座ったまま、じっと周一郎を見上げているが、一声も鳴かない。走り寄っても行かない。
「何だよ……周一郎、だろ？」
「だから！」
「……いい、溝口」
少年は俺が動きを止めたのに、そと運転手の腕を押さえて進み出た。
「どなたかと勘違いされたようですね？」
「……勘、違い…？」
少年は気の毒そうな顔で俺を見上げている。細い首の線、繊細な卵型の顔、確かに髪型はいつものように整えられてはいないが、その黒々と光を吸い込む瞳や聡明利発を絵に描いたような顔は、周一郎以外の何者でもないのに、あえて言えば、その表情の豊かさがそれを裏切っていた。
「僕は里岡直樹、と言います」
「里岡、直樹…」
「ここは家の別荘への私道ですが……御存じでしたか？」
「私道…」
少年がゆっくりと指差してみせた方向を振り返ると、確かに道の彼方に瀟洒な日本家屋がある。
「道に迷われたんですね」
『直樹』はにこりと優しく笑った。
「時々あるんです、このあたりは入り組んでいるから」
駅までお送りしましょうか。
静かな声も周一郎そのままだった。だが。
これは一体どういうことだ？ こいつは何を話してるんだ？
困惑し混乱して、何度も側のルトを見下ろすが、小猫はまじまじと少年を見上げるだけで、俺を振り向きもしない。そして、ルトなしにこいつが周一郎かどうかを判断する手立てがないことを、今さらながら痛烈に感じて、俺は一気に落ち込んだ。
高野が他のやつらがどうのこうのと偉そうに言ったところで、俺にもこいつが周一郎だと証明しきれものなんて何もない。
そんな俺が何を正義の味方ぶって、こんなところまで一体何をしに来たんだ。
もちろん、俺の勘はこいつは周一郎だと教えてくる。けれど、なぜ里岡直樹などと名乗っているのか、それより何より、俺を見ても知り合いだという素振りさえ見せないのは演技なのか本心なのか、それさえもわからない。

。 頼りのルトは傍観を決め込んだみたいでゆっくり擦り寄ってきたから、のろのろと抱き上げたけれど、気持ち良さそうに喉を鳴らして俺の腕におさまるだけで、何も教えてくれはしない。
「俺は」
「その猫」
「は？」
「あ、いえ」
『直樹』はくすぐったそうに微笑んだ。
「なんて名前なのかなあと。可愛いですね」
「ああ、ルト、って言うんだけど」
「へえ、ルト」
『直樹』はそと指を伸ばした。神経質そうに指先でルトの頭に触れ、少し撫でて嬉しそうに笑う。

「ルト……いい名前ですね」

「あ、うん」

「確か何でも見える神様の名前なんですよ」

「……」

「そうだ、周一郎もそう言った。」

「けれど、それは。」

「……よく知ってるんだな」

「喉に絡みそうになったことばを無理矢理押し出す。」

「ふと、そう思って」

「『直樹』は褒められたと思ったのだろう、目を細めて満足そうに見上げてきた。」

「周一郎にそっくりだ。」

「けれど、周一郎はこんななににこにこ笑うことなどない。見知らぬ他人にこれほど人なつこく振る舞わない。そうだ、これは周一郎とは違うはずだ、見かけがそっくりな、全く別の……これほどよく似た、人間が、居ると？」

「神様、あなたの発想力はかなり衰えてきてるんじゃないのか。」

「ん、く、しゅんっ」

「ふいに相手がくしゃみをして、俺は我に返った。」

「直樹さま、もう戻られませんと」

「旦那さまや奥さまが御心配なさいます。」

「溝口が口を挟んで、また俺の期待が崩れていく。」

「そうか、家族がちゃんと居るのか。なら、これはきっと、周一郎じゃないんだろう。」

「それこそ、京都の竹林の中で出くわした、『あやかし』とでもいうやつなのだろう。」

「……すみません、俺、人を探してたから」

「俺はのろのろと頭を下げた。」

「そいつがあなたにそっくりで、間違った、ようです」

「僕に？」

「ええ」

「……その人はあなたの身内なんですか？」

「いや……身内、というか」

「俺は口ごもる。」

「周一郎を何だと言えいいのか。雇い主？ 同居人？ 身内でないのは確かだが。」

「その……友人、で」

「……大切な人なんですよ」

「へ？」

「……さっき」

「『直樹』は目を細めた。」

「とても真剣な顔で呼んだ、周一郎、って」

「ああ」

「まるで……まるで、死んだと思ってた人を見つけたみたいに、必死な顔してた」

「ああ、まあ」

「周一郎そっくりな顔で、周一郎のことを他人みたいに話す相手が微妙に胸に堪えた。」

「もしかして、あんな家に引き取られてなくて、ちゃんと『普通の家』で育ってたなら、周一郎もこんな風にまですぐな目で人を見つめたのだろうか。こんな風に通りすがりの人間に優しく笑って対応できたのだろうか。」

「とにかく間違ったみたいで。すみません。駅の方角はどちらですか、教えてもらえば俺は……ルトっ！」

「ふいにルトが腕から滑り降り、一目散に車の中に走り込んでぎょっとした。」

「おい、こらっ！」

「すみませんっ！」

「うろたえる溝口と一緒に慌てて車に駆け寄る。」

「ルトっ！ こらっ！」

「なう」

「なうじゃねえっ、何してんだ、そんなとこで！」

「な～」

「ルトは平然と車の座席の上に丸くなり、気持ち良さそうに喉を鳴らしている。体を突っ込み尻尾を掴んで引きずり出そうとした矢先、目一杯手を引っ掻かれて悲鳴を上げた。」

「ぎゃ」

「、きさんっ！」

「っっ！」

「背中に電流が走った気がして思わず振り返る。『直樹』が真後ろに立ってきょとんとしている。」

「何？」

「え？」

「なんて、言った？」

「何を？」

「今なんて言ったっ！」

「……何も……言わなかった、と思いますけど」

「いや、だって、今っ！」

「滝さん、って呼ばなかったか？」

「空耳……？」

「あの、それより……ルトくん、外に出ないようなら」

「『直樹』は困った顔で笑った。」

「今夜は僕のところにお泊まりになりませんか？ 今から駅に歩いて行くにはちょっと遠いし……それに僕」

「少し寒くて疲れてきました。」

「そういう相手の顔がうっすら青いのにとどきりとした。溝口がうろたえたように、直樹さまはあまりお丈夫では

ないんです、と重ねてくる。

「あ……じゃあ」

俺がうなずくと、『直樹』はこぼれるような笑顔を見せた。

9. 優しき別離

息子が突然連れ帰った男を、『直樹』の両親は訝りながらも拒まなかった。轢いてはいないけれど、車がぶつかった可能性はある、そう『直樹』に説得されて、とりあえず一晩は様子を見ようということになった。

「滝、志郎さんとおっしゃいましたね？」

「はい、啓仁大学文学部です」

「あまり聞かない名前だな」

ほっといてくれ。

それは口の中で呑み込んで、俺はにっこり笑う。

『直樹』が手配してくれたおかげで夕食にもありつけたし、明るい和室で正座しているのはきついが、あの竹林の中で野宿することを思えば、微妙な里岡夫妻の視線も気にならない。ルトまで隣にあげさせてもらっているのだから、文句を言うてはいけないのだろう。

「御迷惑おかけしてすみません」

べこりと頭を下げると、じん、と足に痺れが走る。できればぼちぼち部屋に引き上げさせてほしいが、何が気になるのか、里岡は考え込んだ表情で俺を見つめている。

「なぜ京都に」

「人を探しておられるそうです」

『直樹』が、運んできた茶をそれぞれの前に並べながら口を挟む。

運転手が居るような家の子どもがそんなことをしなくても、と思ったが、里岡家は日本扇子団扇商工組合の重鎮でもあって、代々京扇子の生産を支えてきた旧家らしい。一人息子である『直樹』はその跡継ぎとして高校に通いながら仕事と礼儀作法を学んでいる、その一つとしての接客だと告げられる。

「人を…」

「朝倉、周一郎さん、ちょうど僕ぐらいの歳で……松尾橋から川に落ちたんだそうです」

「そうか」

「何か、そういう話を聞かれてませんか」

「いや」

里岡は微かに首を振った。

「申し訳ないが、私もずっとここに居るわけではないので」

「ここは直樹が使っているんですよ」

夫人がそっと付け加える。

「直樹、くんが？」

「僕は体が丈夫じゃなくて」

『直樹』が隣から無邪気に笑った。

「ちょっと長く歩いたり、うろうろしたりするとすぐに目眩がしたり寝込んだり。情けないですよ」

「医者に見せてもどこがどうというのではなくて、精神的なものかもしれないとも言われてるんですけど。」

「それで高校もほとんど行けなくて」

「や、待て」

思わずぎょっとした。

「そうだ、そう言えば、こいつ、サングラスをかけてない。」

「もしかして、あの『直樹』くん、君、眼鏡とかコンタクトとか」

「え？」

『直樹』は瞬きしてきょとんとする。

「なぜ？ ああ、少し眼は悪いんですけど」

でも生活に困ってほどじゃないんですよ。

「でもなぜそれを？」

「あ、いや、その、」

ひょっとして羞明があるのに気付いていないのか？ もともと勤がよかったやつだから、視力がほとんどなくても生活できないってほどではないかもしれない、そう思って愕然とする。

ちょっと待て。

それはどういうことだ？

周一郎が『直樹』を演じているのなら、自分の体調や状態はわかっているはずだ。それと周囲に覺らせずに適度に振るまいつつ、体調を保つこともできるだろう。なのに、この『直樹』は本当に自分の状態がわかっていないように見える。本当に、自分が『里岡直樹』だと思っているように見える。

それとも、やっぱりこいつは、異常に周一郎によく似た『直樹』という男なのか？

「不思議だな、どうしてそんなことがわかるんだろう」

『直樹』は首を捻っている。

「僕、おかしなことしました？」

お父さん達だってあんまりそんなこと言わないのに、ねえ、と振り返られて、里岡が一瞬確かに顔を強ばらせた。

「な、直樹、今日は疲れたでしょう、先に休みなさい」

「え？ 大丈夫ですよ」

うろたえたように夫人が口を挟むのに、『直樹』が軽く首を振る。

「それより、僕、もう少し滝さんのお話、聞きたいんですけど」

だって、僕と同じぐらいの人が川に落ちて行方不明だなんて、気になるでしょう？

『直樹』が心配そうに続けるのに、里岡がゆっくりと眉を寄せた。

「直樹」

「はい」

「もう下がりなさい」

「でも」

「明日はお前も出なくてはならないんだ」

「あ……はい」

「明日？」

「はい」

『直樹』が少し赤くなって嬉しそうに笑う。

「僕が正式に里岡の仕事の継いでいくことを組合のみなさんにお披露目するんです」

「……少し早いかと思ったが」

里岡が低い声で付け加える。

「伝統産業は周囲の注目もある、若い力を欲している。京扇子は新しい時代のアクセサリーとしても瑞々しい感性を必要としている」

「僕のデザイン感覚がいいんですって」

『直樹』が部屋の棚を指差した。

そこに飾られているのは羽根のように広げられた一本の扇子、淡い桜色の地に乱れる花びらと豊かに深い幹、そこを過る白銀の蝶の絵柄、艶やかで華やかで、それはもういなくなった少女を思わせるような色味で。

「あれは……」

「大本の図案があったのを急ぎ仕上げた」

里岡が立ち上がりて扇子を取り上げ見せてくれる。受け取った『直樹』がぐるりと翻してみせると、一瞬鮮やかな光が零れてどきりとした。裏は桜地に黒と金で花びらを描き込んである、その金が弾かれるように眼を射る。

。「こーやって裏表翻すと面白いでしょう？」

「……ああ、綺麗だな」

扇をかざした『直樹』は里岡の側でごく自然に親子に見えた。

能力を生かす場と、温かな家族と、落ち着いた家と。

それは周一郎がおそらく心から望んだものだろう。体調のことだって、これほど手厚く対応されているのなら、そのうちちゃんと治療を受けられるだろう。何よりも、俺の勤が何度叫ぼうとも、目の前の『直樹』は『直樹』であることを疑っていないように見える、望んでいるように見える。

もしかしたら。

俺は茶を啜りながら、顔をしかめた。

もしかしたら、『周一郎』は、本当に居なくなってしまうのかもしれない。たとえ、目の前に居るのが本人だとしても、もう『朝倉周一郎』に戻る気はないのかもしれない。

「じゃあ、僕、休みますね」

『直樹』は俺に褒められて嬉しかったのか、いそいそと扇子を棚に戻した。静かに一礼して部屋を出て行く、その細い後ろ姿が安心してしていると教えてくる。ここに居て、幸せなのだ、と。

『直樹』が出て行ってしばらく黙っていた里岡が、ふいにぼつりと言った。

「探して、どうする」

「え？」

一瞬何を言われているのかわからなくて瞬きする。

「その子を探してどうする気かね」

「どうする、って……いや、ただ」

生きてるか、死んでるか、それだけでも知りたいのが人情でしょう、と苦笑いすると、相手はにこりとも笑わないまま、腕を組んだ。

「……では、もういいだろう」

「は？」

「無事に、生きている、それでいいだろう、と言っている」

「え、いや、あの、まだ俺は周一郎を見つけてな……！」

ふいに頭を殴られた気がして俺は口を噤んだ。まっすぐに俺を睨み据えている里岡の顔を、信じられないままに見返す。

生きている、と、里岡はなぜ知っている。

思わず部屋を出ていった『直樹』を目で追う。

「なんで」

「……あの子はここで幸せだ、そうではないか」

「や、だって、それは」

「向こうにももう、居るのだろう」

京扇子生産を担う家。それがようやくはっきりと綾野に結びつく。

「ここで」

造ったのか、『SENS』を。

「待てよ」

そのために、人が死んで。それをあいつは背負わされて。

なのに、その、場所で、その、場所を、周一郎が継いでいく、と？

「…間違ってる」

「何が」

「よく、わかんないけど……それは、間違ってるよ、あんた」

わけのわからない焦燥と苛立ち、腸がねじられるような怒り。

「綾野とグルなのか」

「では尋ねるが、『直樹』は不幸せそうか」

「っ」

「朝倉家で幸せだったのか」

「……」

「あの子の未来はどちらが豊かなんだ」

ぐい、と睨み上げてくる里岡に反論の一つもできない。

けれどそれは。

「違う」

「どこが」

「違う、それは違う、はずだ」

それになぜあいつがそんなことを受け入れた？ そんなとんでもない、状況を。
俺の困惑に里岡は重く息を吐いた。

「……あの子には記憶がない」

「……は？」

「……朝倉周一郎の記憶はないんだ」

「なん……だって？」

「川に落ちて流されたのを助けた時にはもう自分が誰だか覚えていなかった」

俺は茫然とした。

「きっと捨てたかった記憶なんだろう」

「そんな…」

「……素性も事情もわかっている」

里岡はきしむように唸った。

「だが、私達にも息子が必要だ」

「でも」

「工程には関わらせない、デザインだけだ。それであの子はここで幸せに生きていける」

君はあの子の幸せを壊すために探すのか。

言い切られて、必死に俺はことばを押し出した。

「もし、万が一、あいつがそれを知ったら」

「……」

「もし、万が一、あいつが記憶を取り戻したら」

「……」

「自分が何をしているか、あいつが知ったら！」

壊れちまう。

「……だから君は二度と関わるな」

テーブルに静かに置かれた分厚い封筒に俺は目を落とした。

「今までそんな気配はなかった。今日初めてだ、あれほど何かに固執した様子を見せたのは……君が直樹を刺
激している」

滝さん。

静かに呼び掛けて、振り向くと顔を背ける『周一郎』。

滝さん？

無邪気に笑いかける『直樹』。

どちらが幸せだ？

どちらが。

「……十分なものが入っている。足りなければいつでも来ればいい」

「っっ」

そんなものを望んで、ここに居るわけじゃない。

それでも。

俺はぎゅっと封筒を握った。握りしめて俯いた。

「明日、出ていきます」

「……」

「二度と、伺いません」

掌の中の厚みが持ち上げられないほど重かった。

10. 淡き夢みし(1)

翌朝早く、俺とルトは里岡家を出て行くはずだった。はずだった、というのは、昼近くになってもまだ、俺は里岡の家に、正確に言うと『直樹』の部屋に居たからだ。

実は、あの後『直樹』は夜中過ぎに発熱し、今朝は見事に床から起きあがれなくなってしまったのだ。

里岡夫妻は今日の会合を抜けるわけにはいかず、かといって、他に別荘に残る人間が居るわけもなく、通いで来ている家政婦は、今日は昼すぎからしか来れない。

一人で大丈夫か、と尋ねられた『直樹』は、いつもの通り、大丈夫です、そう答えるはずだったんだろうが、今日は控えめに、家政婦が来るまでの数時間だけ、俺についていてほしいと言いつつ出した。

もちろん事情がある里岡は渋ったし、俺もできればさっさと出て行きたかったが、熱のある潤んだ目で「駄目ですか」と不安そうに見上げられては、他に手立ても見つからない。

家政婦が到着次第、家を出て行くということで俺は『直樹』に付き添うことになった。

佇まいにふさわしく、というか、額に張り付けるジェル製冷却剤一つないと言われて、与えられたのはタオルと洗面器、それに氷枕。

冷水で絞って冷やしたタオルはすぐに熱を含んで重くなる。

「……すみ、ません」

汗の滲んだ額にタオルを載せてやると、『直樹』は掠れた声で謝った。

「気にすんな」

今さら謝るぐらいなら引き止めなきゃよかっただろう、と苦笑すると、『直樹』ははにかんだように笑った。

「本当にそうですね…でも」

一人で寝てるの、今日は嫌だったから。

くたりと布団に身を任せたまま、『直樹』が眉を寄せて見上げてくる。

それはいつかの寺で、同じように布団に横になっていた周一郎を思い出させた。

「……滝さんに居てほしかったから」

「……」

きっと、あいつはそんなことを死んでも言わないだろうが。

どれほど一人が辛くても、どれほど疎むような思いをしていても、周一郎は助けなど絶対求めてこない。こっちが捜しまわって倒れているのを見つけるまで、自分では動けなくなるまで平然と、苦痛などは感じていないという仮面を被り続けるだろう。

ならば、そういうことだけでも、自分が必要なときに助けを求められるなら、『直樹』のほうがいいのかもしれない。いや、きっと人間としては、いい、はずだ。

「…ん…っ」

「どうした？」

「……どこかへ……落ち…込みそう…」

急に『直樹』が手にすがってきて覗き込むと、真っ青な顔をして喉を鳴らしている。

「吐き……そう……」

「気分が悪いのか」

「…めまい……が…して……」

「めまい？ ああ」

俺は慌てて周囲を見回した。確かに昼間なら照明も要らないほどの明るい部屋、当たり前人間には気持ちいい場所だろうが、体調が崩れている時にこの光の中に居るのは周一郎にとってきついはずだ。

「ちょっと待ってろ」

「たき…さん…っ」

必死にしがみついてくる手をそっと解いて、額のタオルを広げて目元まで覆ってやる。それから、立ち上がって窓の障子を閉め切り、雨戸がついているところはできる限り閉めていった。

「『直樹』くん？」

「…は…い」

「もう少ししたら楽になるから」

白くなった唇を震わせている相手の目元を掌で押さえてやる。

「……あ…れ…」

やがて浅い呼吸を繰り返していた『直樹』がゆっくりと落ち着きを取り戻してきた。枕元に胡座を組んで座った俺にしがみつきそうだったのが、少しずつ丸めていた体からも力を抜く。

「…ほんと…だ……」

「だろ？ ここはまぶしすぎんだよな」

目は閉じたままではいるよ、そうつぶやいて、温まってしまったタオルを絞り直してもう一度載せようとする、『直樹』がそろそろと目を開けた。

「こら、また気分が悪く」

「どうして……？」

「は？」

「……どうして、こうすると、楽だって、知ってるんですか」

ふわりと急に開いた瞳にまぎれもなく周一郎の表情が過って、一瞬ことばを失った。

「それは」

ほら、俺も風邪とかで寝込むと、あんまり明るい部屋とかに居たくないしさ。

「でも……滝さん……知ってたみたいだ」

「何を」

「……こうすると、僕、は楽になるんだ、って」

「う」

「まぶしいって…言わなかったのに」

すぐに部屋を暗くしてくれた、と『直樹』はじっと俺を見た。

「他の誰も、してくれなかった」

僕がまぶしいって言うまで。

「どうしてわかったんですか？ 僕がまぶしいのが、つらいんだって」
「あ〜……それは……」
まっすぐに曇りのない瞳に凝視されて口ごもる。こういうときに限って、ルトは側に居てくれない。今ごろあちこち探索しているのだろうが。
「……勘、だ」
「勘？」
「そうだ、勘」
「……僕を周一郎さん、と間違えたのも？」
「……勘だ」
「……あてにならないんじゃないの」
「そうかもしれん」
「そうかもって…」
くす、と『直樹』が微かに笑う。苦しいのがずいぶんおさまってきたようで、血色も戻ってきてほっとした。
「おかしな…人だなあ」
「ほっとけ」
年上捕まえて失礼だろうが、そう唇を尖らせると、今度は目を閉じてタオルを載せられた『直樹』が、手も下ささい、とねだった。
「気持ちいいから」
「わかった」
タオルの上から掌を重ねる。そんなことをしたらすぐにタオルが温まるよなあ、と思いながらも、まあ相手がいいって言うならいいか、と思い直す。
「……………滝さん」
「うん？」
「……何か…話して」
「何かって」
「……………周一郎、さんのこと、とか」
「はあ？」
「……だって興味あるもん……僕とそっくりなんでしょう？」
「あ…ああ」
「世の中に同じ顔の人が三人居るって……その一人なのかな」
「そうかもな」
「……おんなじ？」
「え？」
「……中身も……おんなじ？ 僕と」
「…さあ」
一瞬なんと言っているのかわからないものが腹の中で振じれた。
「さあ？」
「……俺は……君をあんまり知らないから」
「……そ…か」
『直樹』は残念そうに溜め息をついた。
「……昨日会ったばかりだもんね」
「…そうだな」
「……でも……おかしいんだよ、滝さん」
ずっと前から知っているような気がする。
そう呟かれて、思わずどきりとした。
「僕…本当は他人は苦手なんだけど……滝さんは違う」
『直樹』は低い声で続けた
「凄く……安心する……なんでだろう」
「なんでかな」
「……滝さんは大丈夫だって……そう思うんだ」
胸が、詰まった。
周一郎の声で、周一郎のことばで、それを伝えて欲しかった、そう思った。
「そう、か」
「……………だから……熱…下がらないといいのになって……思ってる」
「は？」
「……熱下がらないなら……滝さんが居てくれるでしょう…？」
「『直樹』くん…」
「……………でも……」
駄目だよな。
小さく囁いて、『直樹』は微笑んだ。
「……周一郎さん……探さなくちゃ、駄目だもんね」
だから、僕の側にずっと居ることはできないよね。
もう、見つかっている。けれど、二度と見つけちゃダメなんだ。
そう叫びたくなるのを堪えた。
「うん……なるべく早く……探してやりたいんだ」
一世一代の演技を始める。
「寒い思い、してるかもしれないから」
そんなことはない。
「さみしがっているかもしれないから」
そんなこともない。
「一人で待っているかもしれないから」
幻の、周一郎が背中を向けて去っていく、そんな気持ちが広がってつらくなる。

大丈夫だ、もう一人でも、寒くも、さみしくもない、はずだ。周一郎に戻らない限り。

「……………いい、なあ」

「……え？」

「……僕も……」

タオルを指でそっと押し上げて、『直樹』が目を細めた。

「そんな風に探してもらいたい、な」

「…そうか…？」

「うん……きっと絶対、滝さんを待ってるよ」

確信するように笑う顔がさすがに辛くて、タオル温まっちゃったな、と絞り直すふりをして凝視から逃れた。

「だって……きっと喜んでた」

「何を」

「滝さんが、居てくれること」

あやうく絞ったタオルを落としそうになって、慌てて握り直す。

「そうかな」

「うん…きっと凄く嬉しかったはずだ。うんと……安心してたはずだ」

『直樹』がどこかあやふやになっていく口調で繰り返す。

「絶対……待って……る……」

「『直樹』くん？」

戻ってきたのは微かな寝息だけ。

同時に背後の襖がそっと開いて、家政婦です、と小さな声が響いた。

「あ……今眠ったみたいで」

「そうですか、ありがとうございます」

部屋はこのままにしておいてやって、元気になるまであんまり光をいれなくて、と頼んで立ち上がる。うなずく家政婦の足下からルトが飛び込んできた。

「行こうか、ルト」

猫に話し掛ける俺を奇妙な目で見ながらも、相手は駅の方向を教えてくれた。

「なう？」

「……戻るぞ、朝倉家に」

そして俺は、できるだけ早くあそこからも出て行こう。

ずきずきしながらそう思った。

10. 淡き夢みし(2)

昼過ぎの嵐山駅はまだ込み合っていた。
電車から降りてくる人の波に押されながら、それでものろのろと順番を待って改札を通り、ふいに誰かに呼ばれたような気がして振り返るけれど、そこには誰もいない。

そういうことを何度か俺は繰り返した。

「……いないんだなあ」
溜め息をついて首を振り、
「いなくなったんだ、な」
言い直した。

他でもない俺が、周一郎を里岡家に置いてきた。

何かの拍子に自分が何に関わっているのかを知ったとしても、『直樹』なら里岡家として為すべきこと、耐えしのぐべきこともちゃんと見極めるだろう。

後は記憶が戻ってこないように祈るだけだ。

缶コーヒーを買って、人気の失せたホームの椅子に座る。隣に置いたボストンバッグの中でごそごとルトが身動きして、にい、と不愉快そうに鳴いたから、周囲を見回してちょっとだけだぞ、とチャックを開けてやった。

暗がりいきなりと光った瞳にまっすぐ見上げられて、その向こうにまだ周一郎の視線が繋がっているように思えて辛くなる。

「責めんなよ」

ぼやいた。

「お前だって、あっちのほうが幸せそうだったろ？」

ふん、とルトは鼻息で応じた。

「何なら、お前だってあっちに飼ってもらえばよかったんだ」

「な、あ？」

「……あ、そっか、へたに刺激しちゃ、まずいのか」

ルトがじろりと睨み上げてくる。

「そっか……俺はお前から周一郎を取り上げちゃったのか」

「な～う」

「……すまん」

とりあえず謝って、軽く振った缶コーヒーの蓋を開ける、と。

「どわ！」

ぶしゅぶしゅぶしゅと中身がいきなり泡と茶色の液体を吹き零した。止める間もなく思いっきり服に浴びて、慌てて立ち上がったせいでなおさら周囲に中身をぶち撒く。

「何だよ、これ、コーヒーじゃないのか？ ……は？」

ぶしゅぶしゅと景気の悪い音をたてながら、ようやく噴出がおさまってきた缶をまじまじ見つめて呆気に取られた。

「微炭酸ですので振らないで下さい……？ 微炭酸？ コーヒーの微炭酸？」

何だよ、それは。

「新感覚飲料あなたの頭を刺激する……？ ……刺激してくれなくていいって」

思わずげんなりして缶をゴミ箱に捨て、茶色まだらに汚れたジーパンとシャツに顔をしかめた。

「これで帰るのか……？」

余りにも目立つ……ってか、正直こんなに汚れてちゃ、座席に座るってのもはた迷惑な気が。

「はた迷惑よね」

「うぎゃ」

ジーパンの股間を覗き込んでいた矢先、背後から耳元に囁かれて飛び退いた。

「お…由宇」

「一人なの？」

「……あ……うん」

「置いてきちゃったの、『里岡直樹』」

「うん……って、えええっ」

知ってたのか、と叫ぶと、まあいろいろとね、でも昨日よ、確認したのは、と相手はロングヘアを揺らせて上品に笑った。

「なんだか、なあ」

とにかくその格好じゃ帰れないでしょう。

お由宇はそう言って、前にも世話になった家へ連れ帰ってくれた。

「お前も京都に別荘があるのか」

そんなセレブだとは知らなかった、ととりあえず渡されたバスローブを搔きあわせながら、淹れてもらったコーヒーを飲む。

「馬鹿ね、違うわよ、ここは知り合いの家。一時的に借りてるだけ」

洗濯機で俺の服を洗ってくれながら、お由宇はお腹空いたでしょ、とトーストを焼いてくれる。

「前になんで京都に居るのかって聞いたら、ちょっとね、で済まされたけど」

「ちょっとね」

「おい」

「……と言うわけにも、いかないか」

はい、と焼き上がったトーストにマーガリンを添えられて、手を伸ばした。ルトも足下でミルクをもらって、あれだけでかい家の猫にしては好みがるさくないというのか、文句一つ言わずに食事を続けている。

「『SENS』って……知ってるわよね？」

「……おい」
「怖い顔しないの、使うわけないでしょ」
「…そりゃ…そうだろうけど」
「そんなものなくても、私には世の中は十分刺激的よ」
お由宇はくすくす笑って、自分もカップを取り上げた。
「『SENS』を追っているのは叔父のほう」
「麻薬系…だったっけ？」
「違う。仲のいい同僚の配下がそれに関わっていて、もう少しで綾野の尻尾を掴めるって時に馬鹿馬鹿しい連絡ミスがあってね、彼は死ぬ羽目になった」
「うん？」
いや、それはいいんだが、お前は一般大学生じゃなかったっけか。
「その配下は三条良紀、って言うんだけど」
「！」
「知ってるわよね？」
「知ってるも何も……え、え？」
「彼はこっち側から綾野の方に潜り込ませていた人間で、今度確実な証拠を持ち帰ってくるはずだった。叔父と同僚はこちらでちゃんと彼を確保して、そこで警察内部で彼と証拠の安全を守る予定だった」
「ちょ、ちょっと待ってくれ」
何が、何だか？
「なのに、その情報が漏れてて、空港でへたな大捕り物、拳げ句に追い詰められた良紀を捕まえかけたのは、綾野と通じているかもしれないと疑われていた警官」
「う…」
「証拠も、自分の安全も守られない可能性があるばかりか、綾野側に利用されるかもしれないと良紀は考えた」
「だから…自殺…？」
「表向きはね。けれど、ばたばたしていた時に良紀を突き落とすという目撃情報もある」
「……じゃあ、なんで」
そこまでわかっていて綾野を追い詰めなかったんだよ、と唸ると、
「証拠が消えちゃったのよ」
「は？」
「良紀が持っていたのは手帳だけ。そこに周一郎の名前があったから、こちらも動かざるをえなかったけれど」
上層部じゃ周一郎は今回ほとんど関わっていないと見ている。
「けれど、肝心のものがない。可能性があるとしたら、直前に良紀が周一郎に頼まれたものに紛れ込ませて送ったか、妹か家族に託したか」
実のところ良紀の正体は結構早くに綾野に見抜かれていたようで、そっちの牽制含めて京都の実家が妙な強盗に襲われて家を壊されたりしてるんだけど、それは聞いてた？
お由宇に尋ねられて、京子が家を改装している、そう言ったことを思い出した。
「でも……良紀はそれで逆に覚悟を決めたみたいね」
妹にまで手を出してくるようならば、追い詰めない限り安全はない。だから一気に大勝負に出て、綾野から確実な証拠を奪って日本へ逃げようとした。
「あつちをうろろろしている間に知り合った女の子がいたみたい。その彼女が『SENS』の中毒で死んだとも聞いている」
良紀を泳がせ、そこに周一郎を接触させて、綾野は全てを絡めて始末しようとしていた。日本の警察権力が周一郎を追い詰められなくても、周一郎が周一郎であるかぎりその相手には追い詰められる、たった一人の女性を利用して。
「……清を…」
ふいに『直樹』が手にかざして見せた、翻る桜色の舞扇を思い出した。
表は穏やかな春の景色、豊かに咲く桜に舞い飛ぶ蝶の艶やかさ。
けれど、その裏には同じ桜が黒と金の散る花卉を纏い、激しい光が視線を焦がす。
全く違う風景が表と裏で背中合わせに存在するその不思議さは、『直樹』の指先にひらひらと動かされる扇が山を谷に、谷を山に変えていく光景と重なっている。
周一郎そのものもあの扇のようだ、と思った。
『直樹』のような素直で優しい顔と、冷酷に人を操る『周一郎』の顔の二つを背中合わせに抱えている。
人は真実のそれぞれの面を見ているに過ぎず、真実そのものを見ているわけではない、そう言ったのはどこの国の文豪だったか。
「……もの、は…まだ見つかっていない」
お由宇は初めて苦々しい顔になった。
「細工するにしても、扇は仕上げるまでに二十以上の工程を必要とする手間暇かかったものだから、急に誂えることなんてできなかったはずだし……」
「そうなのか？」
微かな違和感に首を傾げた。
「骨にだあっと糊つけて、絵を描いた紙を張ればいだけなんだから？」
「あのね」
お由宇はやれやれと言いたげに立ち上がり、何処からか一本の扇を持ってきて広げてみせた。
淡い薄い紙が張られた華奢なものだ。
「これは夏扇だけど、造りは同じよ。ここが親骨、中骨、要、地紙の天と地、山と谷」
ひらりと指先で翻して、静かな口調で続ける。
「扇には世界が載っているというのはこの天地、山谷が含まれるから。で、この竹の部分は扇骨、和紙の部分は地紙と言うの。それぞれを作るのも二つを一緒にするのも、専門職がいる手間ものなのよ」
「へえ……」
「じゃあ一、二日で仕上がるもんじゃないんだな、そう思ったとたん、また『直樹』の扇を思い出す。」
「でも、あれは」
「あれ？」

「ああ。里岡のところで見た扇。凄く綺麗だったけど、『直樹』がデザインしたってのは辻褄が合わないんじゃないかと」

『大本の図案があったのを急ぎ仕上げた』

確か里岡はそう言っていた。

けれど、どんなに大本の図案があったとしても、急に仕上がるものじゃないはずだ。ましてや、昨日今日見つけた『直樹』がデザインしたなんてことは不可能なはずだ。

それとも、誰かとつくにあれを仕上げている人間が居て、『直樹』がそう思い込まされているのだろうか。

「『直樹』のデザイン……？」

「瑞々しい感性とかなんとかで、里岡の跡継ぎとしてお披露目かなんかが今日あって、本当はそれに出るはずだったんだ」

体調を崩して寝込んでしまいさえしなければ。

あれほど嬉しそうに喜んでいたのに、と眉を寄せると、お由宇が、

「どんな図案か覚えてる？」

「ああ、えーと、桜を描いたやつで、綺麗な蝶が飛んでるんだ」

「……蝶……」

「もっと凄いのが裏でさ、同じような絵柄なのに、そっちは黒と金の花びらが散ってるやつで」

「金の、花びら？」

お由宇が目を細めた。

「志郎」

「なんだ？」

「『SENS』は絵柄が決まってる、必ず蝶が描かれている」

「…え」

「そして、薬が塗り込められているのは、そこに舞い散る金色の花弁なのよ」

俺は大きく目を見開いた。

11.罨は待っていた

「え……ああ、そうなんだ、ちょっとこっちで気になることができて」
電話の向こうの高野は不審そうだ。
『坊っちゃんも御心配なさってます』
付け加えられたことばに思わず軽く引きつった。
「あ、ああ、周一郎も、な」
「変わらないのか、と尋ねると、
『お元気でいらっしゃいます、ただ滝さまがおられないのをずっと気にされていまして』
そりゃ、気にもするよな、正体がばれてるかもしれない相手が、こともあろうに本物が居る京都に行ったま
ま戻ってこないんだから、と一人ごちた。
『は？』
「あ、なんでもない」
「志郎」
「あ、すまん、これから出るんだ。また連絡入れるから」
支度を終えたお由宇が白いブラウスに淡いピンクのスーツという華やいだ格好で現れて、一瞬どきりとした。
「珍しい格好だな」
「そうね」
くすりと笑って、バッグだけは大きめのものを肩から掛ける。
「ミニコミ誌の駆け出し記者に見える？」
「そういう触れ込みで行くのか」
で、俺は？
そう尋ねると、ひょいと一眼レフを寄越した。
「カメラ？」
「一応随行カメラマン、というところね」
取材にしちゃ道具が少なすぎるけれど、一瞬だけごまかせればいい。
「夕べはお世話になりました、ということ入り込むわ」
今別荘に居るのは『直樹』と家政婦だけ、夕方を過ぎれば里岡夫妻が戻ってくる。今入り込むしか機会がない

。「あの扇が『SENS』だったってのは」
どうにもやりきれねえな。
唸りながら、カメラと大きめのリュックを背負う。背中でごろん、と動いた塊がぐにゅう、と無気味な声をあ
げる。
「わかってる、狭いんだろ」
ルトがまたぐるぐる唸った。
「俺だってあんまりいい気持ちは…ったあつ」
女の子を背負ってるとか何ならな、と思った瞬間に爪を立てられ引きつった。
「何してるの、行くわよ？」
「や、だってこいつが」
「志郎？」
「はいはい」
前門のお由宇、後門のルトだ。もともとのヒグマと象に比べるとどっちがましなんだろう？ あれ？ ヒグ
マじゃなかったか？ 月の輪ぐまだったか？
「行くわよ」
「お、置いてくなよ」
首を傾げながら、俺は慌ててお由宇の後を追った。

「取材、でございますか」
応対に出た家政婦は不審そうな顔で俺とお由宇を見比べた。
「はい。最近伝統工業に興味を持つ若者が増えてますし」
お由宇はにっこり笑いながら名刺とそれらしいパンフレット、見本誌などを広げてみせる。
パソコンってのはほんと凄いやな、ああいうのが一晩で作れるんだから。それほどお手軽なのに、そういうこ
とに疎い者には、現実にはどこかに会社があって、発行されている誌面があるんだと思ってしまう。
「関東の本社でもニューヨークの方でも、活躍されている若手の方の話が欲しいということで」
「はあ、ニューヨーク…」
おいおい。
俺は固まった笑顔の後ろで冷や汗を流す。
確かにニューヨークの方、と言っただけで自分の会社がそこに支社を持つてるとは言ってないし、関東の本社
と言っただけで自分達の会社の本社だとは説明していない。
だから、厳密に言えば、お由宇は「一般的な話」もしくは「知っている会社の話」をしているに過ぎないとい
い逃れはきく、きくけど、それってよく防犯ビデオとかに、絶対こういうのには引っ掛からないでとか説明され
ている手口じゃなかったか。
平然と微笑む横顔に、きつとお由宇の旦那はいいように操られるんだろうなと溜め息がでた。
海外の話を持ち出されて相手の心証は少しい方に傾いたらしい。これだけの家の家政婦にしては不用心すぎ
るだろうと思っていると、ためらった顔で、
「一応お尋ねしてみませんか…」
「ちょっとお顔を見るだけでも。後でまた伺うこともできますし」
お由宇は強く押さないで微笑み、そのまま後ろ手で俺に合図した。ごくりと唾を呑んで、俺はリュックのチャ
ックを引き降ろす。
そのとたん、

「あっ」
「えっ」
とんつと背中のリュックから飛び下りたルトは、すぐに家政婦の脇を抜いた。一瞬閃いた稲妻のような動き、勝手知ったる他人の家、あっという間に廊下を駆け抜けていくルトに家政婦がうろたえた顔で振り向く。
「何してるのっ」
お由宇がすばやく俺を振り向き叱咤して、こっちもルトなみの素早さでパンプスを脱いだ。
「申し訳ありません、お邪魔します！」
有無を言わず駆け込むお由宇に、あ、と後を追おうとする家政婦に向かって、俺は慌てて声をかける。
「すみません、ほんつとにすみませんっ」
「あ、は、はい」
「あ、あいつ、お腹、減つてたつてさつきから騒いでて、ええ、うんと騒いでて」
「は？」
いぶかしそうな家政婦に俺に引き止め役は無理だろと思いつつ、必死に話し掛ける。
「やっぱその、リュックに猫、入れとくつてのは、む、無理がありますよね」
「あ、はあ」
「でも、あの、ポストンバッグとか、スーツケースとか、エコバッグとか、そういうのより自然ですよ」
「あ、あの」
「籠とかじゃ爪が引っ掛かるし、ああざるとかだつたら大漁だ〜とか！」
「ざる？」
家政婦が凍りつく。
「ざる、に猫ですか」
「あ、普通いれませんか、ざるに猫」
「ざるに猫は」
「網とか、ならねえ」
「網？」
「ええ、網に猫、つも」
いれないですよええ。
何言つてんだ、俺。
引きつりながら笑つと家政婦はなお不安そうな顔になって、
「あの一体何のお話を…」
「だから、猫をどうやつて運ぶかつていう」
「……それはケージとか」
「刑事？ ああ、確かにお由宇の身内は警察だけど、さすがに猫を警察が運んでくれるとは」
「いえケージ」
「掲示？ 猫拾いますとか？ でもあれつて普通ダンボール箱とかにいれてありませんか」
「そうじゃなくて、ケージに入れて運ぶものじゃ」
「ケース？」
「ケージ！」
それつてコレクションとかを入れるもんじゃ、と首を捻つた俺に家政婦がいらいらと怒鳴つたとたん、
「何の話をしてるんですか…」
「しゅ…直樹くん」
ふらりと家政婦の背後に立つたのは、寝巻にカーディガンを羽織つた『直樹』。その後ろから、どうもすみません、とルトを抱えたお由宇が現れる。
「本当に申し訳ありません……今日हतてもこれ以上は」
ほら、ちゃんと抱えてて、そう言いつつ俺にルトを押し付けたお由宇が、いかにもすまなそうに頭を下げながら、今日हतもご無理を言いません、また日を改めさせて頂きます、と家政婦に伝える側で、『直樹』がじつと俺を見つめてきた。
黒曜石を思わせる透明なまなざし。
『直樹』の柔らかな視線ではなくて、周一郎の冷やかな気配をたたえた強さで。
「では失礼いたします」
お由宇が身を翻して出ていくのに、慌てて頭を下げてくつついていこうとすると、
「滝さん」
「う」
静かな声で呼び止められて固まつた。
「お…お由宇…」
「あ、ごめんなさい、社に連絡しなくちゃ」
お由宇はあっさりバッグから携帯を取り出しながら離れていく。その一瞬、ちらつと視線で促されて、バッグの中の艶やかな黒い反射が見えた。
ルトを奥へ飛び込ませる、それができなければ何か理由をつけて入り込み、扇子を手に入れてくる。
お由宇が仕組んだ単純な仕掛けはうまく成果を上げたらしい。早速連絡を取つて京都を離れる、そういう心づもりなのだろう、すたすたと遠ざかつていく背中が容赦なく小さくなる。
おーい……俺は？
「滝さん」
背後でひたりと足音がして、もう一度柔らかく呼び掛けられ、仕方なくルトを抱えて振り返る。
「はい」
「……カメラマン？」
『直樹』は少し首を傾げてみせた。もう一歩近付いてきて、そつと手を伸ばす。撫でられたルトがなうん、と甘えた声で鳴く。
「あ〜、まあ、うん」
「……もう会えないんですね？」
「っ」
ひょい、とふいに掬うように見上げられて、錯覚した、その眼にサングラスがかかっているように。

「滝さん？」
寂しそうな口調、けれど瞳はどこか優しい。何かの理由があって俺が自分に近付いた、そうわかっていると言いたげな表情が、次の一瞬、懐かしい鋭い笑みに綻んだ。
「用事はもう、済んだんですね？」
周一郎。
何もかも見抜く、その叡智にどれほどお前が苦しんでいただろう。
「ああ」
俺は引きつった笑みを消した。
「もう、会わない」
俺の姿がお前を引き戻してしまうなら、俺は二度とお前に会わない。
幻の家族でもお前を守る家族ができる。偽りの幸福でもお前が笑える。それが少しでも長く続くように、それを妨げるものをできるだけ取り除けるように、俺は頑張るから。
「幸せに、なれ」
俺はぎゅっと奥歯を噛み締めて、『直樹』に背中を向けた。

「あら」
とっくに駅へ向かっていたと思ったお由宇は少し先で俺を待っていた。
「居座らなかったの」
「は？」
「少し戻りかけたんじゃないの、『直樹』は」
「ああ……うん……って！」
はっとして相手を見遣ると、くす、と悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「お前、まさか周一郎を刺激するつもりもあって！」
「あなたがあんまりしょげてるから」
「違うだろ」
そんな優しい理由で動くようなお由宇じゃない。
「そうね、まあ大切なライバルを失うのもつまらないと思って？」
「ライバルって」
ほんとお前と周一郎はどういう関係なんだよ。
「…知らない方がいいわよ」
一瞬ためらったお由宇はすいと笑みを消して前を向いた。
「知らない方がいいことも、世の中にはたくさんあるわ」
軽く鞆を押さえながら、
「これが『直樹』を追い詰めても、『直樹』は必死に闘うだけでしょう？」
「……」
「でも、周一郎の記憶があれば、そんな簡単なことじゃすまない」
「そう、だよな」
お由宇が無駄に動くわけではない。遅かれ早かれ『SENS』とそれに関わる人間は摘発され、やがては里岡にも追及の手は伸びるだろう。
『直樹』でいるだけなら、突然襲ってきた家族の危機に、悩みつつ信頼を揺らがせつつ、それでも温かな父母への思いを頼りに、あいつはしのいでいこう。事業を立て直し保持していく才能なら溢れるほどあるのだから、それほどたたくに里岡は『直樹』の活躍で持ち直すだろう。そして、それは『直樹』の評価を格段にあげるはずだ。
けれど、朝倉周一郎なら。
『SENS』とそれに関わる京子や良紀の件、『トップ・トランス』や朝倉家、自分自身への嫌疑も晴らさなくちゃならない。しかも相手は少なからず敵対関係にある綾野だ。いつ裏切るか寝返るか、いやそもそも周一郎や朝倉家を失墜させようとしているのに、状況によってはそっちまで庇わなくちゃなくなるとなる。
たとえ今回をうまく切り抜けても、身中に虫を飼うことにはかわりない、猛々しく宿主を食い荒らすつものの牙を隠した幼生を。
「……もう、いいだろ」
俺は唸った。
「え？」
「もう十分苦しんだんから」
薬になってもいいんじゃないか、あいつは。
「そりゃ、好きだけどな、周一郎は」
いじっぱりで意固地で鋭くて疑い深く皮肉屋で、けれど本当は優しく、誰よりもいろんなことを見てしまって傷ついているのに、それを一人で抱え込む。見抜かれかけて平静を装おう、薄赤く染まった横顔はカワイイとこだと思う。
「けど」
胸に詰まったのは最後に見た微笑。
俺にもようやくはっきりわかった。
確かにそうだ、俺が側に居るだけで、何かが周一郎の中に動きだしてしまう。『直樹』の意識を破って、周一郎が顔を出す。側に居る時間が長ければ長いほど、『直樹』を周一郎に引き戻してしまう、里岡氏が言ったように。
「……いいんだ、あれで」
『直樹』であいつは幸せなんだ。
「ほんとにいいの？」
ぼつりとお由宇がつぶやいた。
「ん？」
「『直樹』を『直樹』でいさせるためには、あなたもそれなりに面倒な……志郎っ！」
いきなり前方から眩しい光が照らした。
逃げて、そう叫んだお由宇が一瞬後には身を翻す。

「え、あ、ちょっっ！」
車のライト、降りてきた人間が走り寄ってくる、それだけ見取って俺は慌てて向きを変えた。背中でしたばたしたルトを逃がしてやらなくちゃ、ととっさにチャックを引き降ろす。
「にゃっ！」
「げっ！」
ルトは俺の頭を思いっきりどついて夜闇に跳ねた。衝撃に視界がぶれ、足下がお留守になり、もちろんそこには反応が鈍くて主の意志をまともに受け取らない、俺のもう一本の脚があり。
思いきり、自分の脚に躓いた。
「うあっ、…っ！」
つんのめると同時に背後に不快な圧迫感、やばいと思う間さえなく、次の瞬間ルトより数倍派手な一撃を受けて、俺は一気に闇に沈んだ。

馬鹿なことをしている。
そうだいつだって、何の得にもならないことで意地を張って馬鹿を見て。
『馬鹿だな、お前は』
頭の中で声が囁く。
『何のためにつっぱってるんだ、さっさと謝れ、謝っちまえ』
声には聞き覚えがあった。小学校のころの担任だ。
クラスで小さな会を催すことになって、そのために金が集められたことがあった。
だが、その金が体育の時間中になくなって、誰が盗んだと騒ぎになった。
担任は立派とは言いがたい人間で、俺が孤児で経済的に厳しい状況にあることを理由に、疑いをかけてみんなの前で俺の鞆をひっくり返した。当然ものは出なかったが、今度はどこへ隠したとなじられ、盗人の上に嘘つきだ、正直に話すまでそうしてろ、と廊下に正座させられた。
『知らないっ、俺は知らないっっ！』
尋ねられるたびに否定して、そのたびばこりと頭を殴られたけど、適当に謝っちゃえばいいんだよ、そういうクラスメートも居たけれど。
お日様が見てる。
俺が暮らしていた園の園長はそう言っていた。
人生は長い坂で、そこをみんなうんうんうなりながら登っていく。
大きな荷物を背負ってる人もいれば、ほとんど荷物のない人も居る。
お前達は始めから大きな荷物を背負って歩き始めたけれど、心配するな、空にはお日様があって、お前達がどんなふう歩いたかを坂にしっかり焼きつけておいてくれる。
いつか坂の上に来た時に、お前達は胸を張って誇らしく笑える、お前達が登ってきた道の見事さを指差して。
見る、これが俺の為したことだ、と。
きっと今大きなでこぼこがある時なんだ、と俺は思った。
このでこぼこをどうやって歩いていくか、お日様がじっと見てる、俺の背中から。
恥じないように、最後に凄いだろって笑えるように、俺はちゃんと登ってみせる……。
へえ、こんなことを覚えてたんだ。
ぼんやり考えながら瞬きすると、目の前に揺れていたもやが緩やかに固まって、その口のあたりがぱくぱく動いた。
準備はいいか？
準備？
では周一郎について話したまえ。
何を？
何でもいい。
誰かが奇妙な会話をしている。
さあ早く。
どうして？
それは気にしなくていい、さあ早く。
誰と誰が話してるんだろう？
なぜ周一郎について話さなくちゃならない？ なぜ俺が？ 一体誰に？
ああ、でも理由は簡単だ、俺が一番よく知っているから。
周一郎を、他の誰より、よく知っているから。

「！」
急に意識の焦点があった。
灰色に曇っていた視界に唐突に明暗ができる。同時に、凄まじいめまいとむかつきが襲ってきた。
口を押さえて跳ね起き、視界の端に映った洗面台に駆け寄る。たどり着くや否や腹からわき上がる苦い塊を吐き戻す。
「ぐ、う、っ…」
頭の中で極彩色のスパークが飛び散り、胃袋全部吐いちゃうんじゃないかと思うほど、俺はたて続けに吐いた。一段落つく頃には目の前は暗くなるし足下は危うくなるし、やっとのことでコックをひねって水を流し、喘ぎながらへたりこむ。
「く…そ…」
胃が痛くて呼吸が苦しくて、壁にもたれかかってずるずる座り込んだ。めまいがひどい。冷や汗が止まらない。体が小刻みに震えて寒く、口をきくどころか、気を抜くとふっと眠り込みそうになる。
酒じゃない。こんな二日酔いなんてない。
脳裏を掠めたのは宮田が話してくれたことがある睡眠薬の呑み過ぎ、が一番近い。
「は…」
はあはあ喘ぎながら自分の膝の間に頭を突っ込んで真っ白な床を見つめた。のろのろと視線を動かして行って、部屋の中を見上げていくと、壁も天井もみんな寒々と白いのに気づく。

SF なんかでよく見る、実験室か研究室のようだ。

「どこ…だ…？」

竹林の中でいきなり襲われたのだ。後頭部を殴られて気を失って、それから？

「…く…」

また吐き気がこみ上げてきたけれど、膝が笑ってたてなかった。どこのどいつだか知らないが、ついでにここはとんでもなく清潔そうだが知るもんか、残り少なくなった胃の内容物をこのまま床一面に目一杯ぶちまけてやる、そう息を吸い込んだ矢先、がしりと肩を掴まれて体を起こされた。

「苦しいかね？」

覗き込んだのは、白衣の男、のっぺりとした顔は頭までつるりとしている。

「あ…」

たりまえだるこのくそやろうおれのからだになにしやがった。

言いかけたとたんに、ぐぶ、とむせた俺に、男は平然とした様子でまくり上げた腕に注射器を突き立てた。

「君が素直でないからいけないのだよ」

淡々と子供をなだめるように続ける。

「誰だって『一般人』がこれほど粘るとは思わないじゃないか。弱い薬でもいけると考えるだろう？」

そんなところに同意を求めるな。

「大丈夫、すぐに吐き気もましになるし、数日すれば普通の生活ができる」

数日ってなんだよ、数日俺はどうなってるんだよ。

頭の中での反論はもちろん男には届かない。

「何、軍で使うような『自白剤』じゃない、マイルドなものだ。それだって君が粘るから少々量を過ぎただけで、ああ、しかし君が鈍感だと言ってるのではない、安心してくれ」

男は少し笑った。

「いろいろと聞かせてもらったが、君は昨今にしては珍しく純粋な気持ちを『周一郎』に寄せているのだね。てっきり肉体関係か何かで繋がってるのかと思っていたが、友情？ 親愛？ まあそういう非常に微妙な状況で、しかも性欲を介在していないのに強力で安定している精神構造というのは久しぶりに見た」

おーい……なんか今すごいことを言わなかったか。

ってか、ここはどこだ？ お前は誰だ？ 一体俺は何をされたんだ？ 第一、

「ど…して」

「おお、もう話せるようになったのか、すばらしい」

俺は学習中のオランウータンか。

「どうだろう、綾野様の一件が終わったら私の専属実験体にならないか。もちろん報酬は十分出すし、『SENS』はまだ改良が必要なのだ」

「あ…やの」

ざぶり、と頭から水を被ったような気分になって、瞬きしながら男を見返した。

「じゃあ、ここ、は…」

「さあもう立てるだろう」

男に腕を引き上げられ、のろのろ立ち上がって部屋から引っ張り出される。室内と同じように飾り気もなくでもない、大学の医学部研究室棟を思わせる廊下をよたよた歩きながら、じんわりと痺れていた頭に思考能力が戻ってくる。

『SENS』の改良、と男は言った。

そのための実験体が必要だと。

あれからどれぐらい時間がたったのかわからないが、髭の伸び具合からすると二、三日はたってるんじゃないか。その間、誰も俺がいないのに気づかなかったのだろうか。

いや、高野は気にしてくれていただろうし、お由宇はなんとか逃げたみたいだから、搜索願いがら出してくれているはず。

その瞬間に思い出す、朝倉家に居る、偽物の周一郎を。

あいつが俺はまだ京都に居る、とかなんとかごまかしてしまえば、それで十分通るんじゃないか？ 本物の周一郎が京都に居る以上、あいつは堂々と朝倉家に居座れるわけだし。

ってことは？

俺はこのままこの男の実験体とやらになって、ここで一生飼いやし？ それとも、周一郎同様、さりげなく消されていってしまう、のか？

「おひさまの…ばかやろー…」

ちゃんと見てくれてるんじゃないのかよ。

「は？」

なんだね、それは、と俺を支えていた男が廊下の端のドアを開けながら俺を覗き込んだ瞬間、

「遅かったね」

ひんやりとした声が俺の思考を止めた。

12.懐かしき微笑

眩しい。
部屋に入った瞬間に視界が真っ白に焼けて、思わず目を閉じる。
「……太田」
微かによろめいた瞬間、鞭のようにぴしりと鋭い声が響き、俺を支えていた白衣の男がびくりとした。
太田、そっか太田というのか、覚えとくぞ太田、俺の体を好き放題しやがって太田、そのうちちゃんとお返し
てやるぞ太田。
胸で繰り返しながらゆっくり目を開ける。
「滝君の憔悴が激しいようだが」
「そ、それはその」
「傷めつけたのかね？」
「いえそんなことはこれっぽっちも」
内側を傷めつけた場合は『傷めつけた』うちに入らないのか？
思わず反論しそうになったが、その前に目の前に立っている男の視線にぐさりとやられた気がして動けなくな
った。
なんだろう、こいつの目。普通の日本人の茶色がかかった黒い虹彩のはずなのに、なんだか爬虫類か何かの、縦
に瞳孔が切れた金色の眼に見えて、無性に気持ち悪い。
しっしっ、あっち行け、そう言いたくなる。
「ご指示の通りほらどこにも怪我をさせてませんし傷もほら」
「わ」
いきなり上に着ていたシャツを腹から胸まで捲り上げられてぎょっとした。
「綺麗なもんです、ええ、それにこういう弱い筋肉層ではたいしたことできませんし」
おいたいたことって、何する気だったんだ。
「しかし、この男の特筆すべきは肉体ではなく、極めて鈍くて回復力の早い精神ではないかと」
「離せっ」
捲り上げられたシャツを掴んで引き下ろし、今鈍いと言ったろ、それも極めて鈍いとか言ったろ、そう突っ込
もうとして、そのシャツがパジャマに近いものだ気づく。
「あれ？　なんで俺こんなもの着てんだ？」
「……なるほど」
くすり、と目の前の男が笑って顔を上げた。
「確かに鈍いな」「でしよう！」
こら何を二人で確かめあってる。
「そうすると、滝君は今なぜ自分がここに居るのか、何をされたのかもわかっていないのだな？」
「ええおそらく」
太田は嬉しそうに笑った。
「ほんと鈍くてどンドン薬を試したくなって困りました」
「おい……」
さっき薬を使いすぎたとかどうとか言ってたのは、ひょっとしてそういう理由だったのか。
「じゃあ、私が誰かも知らないし、ここがどこかもわかってないということだな？」
「え」
太田は笑みを強張らせた。
「捕まえてから眠らせて情報を得ていただけだろう？」
「あ、いや」
「その大半は何をしやべったかも覚えていないはずだな？」
「覚えてる」
俺はぶすっと唸った。
いくら俺が馬鹿でもそれぐらいはわかる。
「ここは『SENS』とかの秘密研究所で、あんたは綾野啓一っていう周一郎を恨んでせこいまねばかりしてるおっ
さんだ」
「…………太田」
「あ、あの」
側に居てもわかるほど、太田は冷や汗をかいて震えている。
「一体誰が、そんな情報を与えていいと？」
あてずっぽうだったが見事にヒットしたらしい。思わず嬉しくなるとにやっと笑った瞬間に、その笑みを見た
綾野が眼を細める。
「…全く馬鹿でもないようだし」
ほっとけ。
「それに人の気持ちに入り込むのは天性の才能があるようだな」
下がっていい、と言われて太田が慌てて側から引いていく。
取り残されて俺はゆらいだ体を支えるために踏ん張った。
「……こちらへ来たまえ」
綾野が静かに斜めの前のソファを指す。
そこでようやく、この部屋が、今までの部屋とは違って、企業の応接室のような造りになっているの気づ
いた。灰色と黒で統一されたモノトーンの上品な調度、綾野が立っていたのは窓を背にした大きな机の後ろで、
机の上にはデスクトップのパソコンと積み重ねられた書類の束、それから広げられた新聞がある。
「立っているのは大変だろう」
「……なんで、俺は」
こんな所へ連れてこられたんですか。
尋ねた俺に綾野はまるで芋虫が突然しゃべり出したとでも言いたげな表情を向けた。
「…………『直樹』が君を捜している」

「……え？」

うっとうしそうに新聞を取り上げ、ソファの前のローテーブルに置いて、それとなく見るように促す。思わず引き寄せられて覗き込んだのは全国紙、続いて上に載せられたのは京都の地元紙だ。

その両方に結構大きな囲み記事で『尋ね人』があった。

「周一郎の名前を手がかりに、松尾橋での事件を調べ、君の名前を知り、収容された病院を知り、松尾駅での事件を知り、それが自分と『扇』で繋がっていることになお興味を持ち、両親が自分の問いにちゃんとした答えを与えないと立ち、京都府警を当たり、廻元に会い」

「清にも、会ったのか」

どきりとして確認した。

「……あの子供は誰なのだ、なぜ周一郎そっくりなのだと聞かれたよ」

綾野は眼を細めた。

清はさすがに『直樹』と詳しく話をしたいと思わなかったようだが、それでも俺の行方を知っているかもしれないからと朝倉家を紹介したらしい。

「そうして、朝倉家から私に連絡が入ってきた」

「『直樹』が…」

もう会わない、そう言ったときに納得していたとばかり思っていたのに。

「……まったく」

計算外だ。

綾野は冷たい口調で吐き捨てた。

「十分幸せな暮らしをさせてやってるじゃないか、なぜ君のような者を探しまわる」

へえへえ悪うございましたね、庶民派で。

「……それでも、嘘じゃないか」

心の中で突っ込みながら、俺は顔を上げた。訝しそうに見下ろしてくる相手に繰り返す。

「それはあいつが得た暮らしじゃない、あんたが勝手に与えたもんだろ」

「……朝倉家の方がよかったのだと？」

綾野は冷やかに笑った。

「あんな牢獄のような場所が？」

「それでも」

あいつが選んでようやく得た場所なんだ。

つるりと反論してしまい、そうか、と気づいた。

そうか。

どんなに酷い場所や環境であっても、自分で選んで進んできた道ならば、そこには自分の全てがある。

けれど、どんなに傍目から見て満たされた幸福な環境であっても、そこに自分の生きてきた痕跡が一つもなければ、それは自分の居場所なんかじゃない。

『他の誰も、してくれなかった、僕がまぶしいって言うまで』

耳元に『直樹』のことが蘇った。

『どうしてわかったんですか？ 僕がまぶしいのが、つらいんだって』

どうしてわからないことがある、それほど満たされ愛されているはずの居場所で。

どうして何に苦しんでいるのかわかってもらえなくて、その苦しみを取り除く方法を周囲の誰も知らないなんてことがある。

ましてや、こうやって助けてほしいと繰り返し訴えるまで、その方法を誰も試してみてくれない、大事にしているならばそんなところまで放置しないはずだ。

周囲にどれほど見事で美しく揃えられたものがあったとしても、使い方一つわからない場所の何に人が愛着を感じるだろう。自分が慣れ親しんだ記憶のないものばかりに囲まれて、どうやって人が寛げるのだろう。

「ああ…」

なんてこった。

「間違っちまった…」

脳裏に掠めたのは朝倉家の庭、俺から一メートル離れた周一郎の座る場所、俺にはあいつの考えてることも思ってることもわからない、けれどそこは確かにあいつの選んだ場所だったのに。

あいつが選んであいつが求めた場所、だったのに。

朝倉家ならあいつは俺に文句が言える、へたった時に高野にカバーしてもらえる、ルトを抱きかかえて眠ることもできる。

けれど里岡のあの別荘で、豪華な調度に囲まれて、『直樹』はまぶしいのが辛いのだと訴えることさえできずに一人布団で横になるしかない、光溢れるあの場所で。

「…おんなじじゃねえか…」

勝手に周一郎の幸せなんて考えて、そんなもの、俺が安心するための手段だったに過ぎないんだ。

里岡夫妻を嗤えたもんじゃない、俺だって五十歩百歩だ。

けれど、『周一郎の中身』には俺が一番近くて、取り繕って整えた大人じゃない、頑なに心を押し殺しているあいつを一番よく知っていたのは俺だけで。

「そう、か」

きっと無意識に、周一郎は俺にすぎた、『直樹』を『周一郎』に戻してくれると思って。

だから熱を出して、寝込んで、ここは嫌だと訴えていたんじゃないのか。俺を引き止め、連れ帰ってくれと、訴えていたんじゃないのか。

なのに、俺は。

「置いてきちまった…」

あいつが拒んだ罪のまっただ中に。

誰も助けてくれない光の牢獄に、幸せになれ、なんて酷いことを言って、置き去った。

『用事はもう、済んだんですね？』

偽りの安心を押し付けて。

何もかも見抜いた、懐かしくて鋭い笑み、その奥に底なしの闇をじっと抱えて。

あなたも、僕を、見捨てるんですね。

嘲笑が聞こえる。

「く、そっ……俺は…馬鹿だっ…」
お由宇はわかっていただろうか、いや、きっとわかっていたらうな。
「アホで間抜けで冷凍庫のなすびだっっ」
だけど俺は何もわかってなくて。
付き合い長いんだから、わかっていたなら教えてくれよ、と俺は居ないお由宇をののしった。俺にもちゃんとわかるようにもっとちゃんと教えておいてくれなくちゃ、
「俺にまともなことができるわけねえだろがあっ！」
「……盛り上がってるところをすまないが」
「う」
ふいに間近から覗き込まれて、両手を上に向けて叫んだ姿勢のままで固まった。
「聞こえたか？」
「はい？」
「聞こえてないのか？」
「何が」
あまりの自分の馬鹿馬鹿しさに目の前の男の不気味さが吹っ飛んでしまった。爬虫類がどうした、蛇だろうがトカゲだろうがブロキオサウルスだろうがティラノだろうが、
「結局氷河期には勝てなかったくせに」
「……何の話だ」
「冷血動物は大変だと」
「……『直樹』が来る」
綾野は俺との会話を諦めたらしい。ざまあみる、爬虫類ごときがホモサピエンスと会話しようなんて百年早い…。
あれ？
瞬きして問い直す。
「なんだって？」
「『直樹』が来る」
「……なんで？」
「君に会いに」
「……なんで？」
「私が知らせた」
「……なんで」
何となく、答えがわかるような気がしたが、それを考えたくなくて俺は質問を繰り返した。
「あそこに部屋が見えるな？」
窓に近寄った綾野が庭の一角を指し示す。
「ああ」
そこにあったのは小さな離れと言った感じの小部屋、広くて大きな窓、ベランダがあってそこから外にも出られるようだ。
「あそこで『直樹』と会いたまえ」
「……なんで」
「会って、君はここで医学研究に協力することになったから、安心してほしい、と彼を説得するのだ」
「医学研究…」
それってやっぱりさっきの太田とかいうやつの実験体とかになるって意味だろうな。
「『直樹』は君の所在が不明なことに不安がっている。君が姿を見せなくなって一週間、どんどん手を広げて探し回っている」
「ああ」
そういうの得意だもんな、というか、元々とんでもなく能力のあるタイプなんだし。
「『直樹』は里岡の病弱な跡取りとして大事にされ世間から隔離されて生きるはずだったんだよ？」
「知るかよ、そんなこと。」
「このままではよけいな知識と経験を積むばかりか」
「あー」
「そうだ、遅かれ早かれ『直樹』は朝倉周一郎に辿り着くだろう。表に向けた顔ではなくて、その裏の顔を掴むだろう。」
「俺を封じても意味ねえじゃねえか」
「その通りだ」
「だから困った人なんだよ、君は。」
綾野はうっそりと笑った。
「だから君自身に『直樹』を封じてもらう」
「断る」
「そんな役目を誰が負える、今自分がとんでもない間違いをしたとわかったところなのに。」
「断れないよ、もう『直樹』は来てるからね」
「え」
「カメラがいつでも君を追ってる。部屋にも庭にも高性能のマイクがある」
「……スターだな」
「囚われの、ね」
綾野が言い放ったとたん、ばん、と激しく扉が開いて驚いた。
「滝さんっ！」
振り返ると同時に飛び込んできたのはまぎれもなく里岡直樹、一気にソファまで駆け寄ってきたかと思うとぎゅっとしがみつかれて息が詰まった。
「どこに、行ってたんです！」
悲鳴のような声。
「どうして、どこにも、居なかったんです！」
周一郎。

涙声で詰られて、しがみついた腕に力を込められて、その瞬間胸に宿った顔に切なくて視界が曇る。
きっとお前はこんなことは言わない。
きっとお前はこんなことはしない。
けれど今響くこの叫びの向こうに、確かにあなたの微笑が見える、全てを見抜く、その笑みが。
「…わる…かった」
俺はそっと『直樹』を抱えた。
「放って行って……悪かった」
『直樹』がぎゅううっと強く抱きついてきた。

13.謎が解ける時(1)

庭の一角の離れへは細い通路で繋がっていた。敷地のどのあたりになるのかはわからないが、通りからは奥まっているようで、車の音も人声もしない。

「ごゆっくりどうぞ」

「ありがとう」

目の前のテーブルにコーヒーを置いたグレイスーツの女性は、『直樹』に微笑みかけられて僅かに赤面しながら下がっていった。

それもそのはず、ただでさえ端正な美少年系だった相手が、今日はきちんとスーツを着こなし、淡い色のサングラスまでかけていて、黙っていても貴公子風なのが、穏やかで優しい振る舞いを加えて完璧な仕上がりで座っている。さっき俺にしがみついて半泣きになっていたせいも、潤んだ瞳や薄赤くなった目元でにっこり笑われると、相手が鬼でも誘惑できそうだ。

「……何のつもりだ」

だが俺は不安で不愉快だった。

何だこの格好は。

人が『直樹』でいさせてやろうと決心したとたん、この出で立ち、まるで周一郎のコスプレじゃないか。それとも俺を探しまわっているうちに記憶が戻ったのか？ にはしては微笑が儂げで可愛らしすぎて、どうにも落ち着かなくて困る。

「え？」

「スーツ、は訪問するからだとしても」

なんでサングラスなんかかけてる。

「……知ってるじゃないですか」

『直樹』ははにかんだように微笑んだ。

「僕、まぶしいのは苦手なんです」

「ずっとかけてなかっただろう」

「父や母が気にするかと思って」

それに、と『直樹』はコーヒーカップを持ち上げ、一口含んだ。

「……………似てますか、『周一郎』さんに」

「ぐ」

まっすぐ見返されて危うくコーヒーを吹きかけ、慌てて呑み込む。

「……………似てない」

「……似てますよ」

「似てねえよ」

「似てますって」

『直樹』が静かに目を伏せる。

「朝倉さんの執事さん、ですか？ 高野さんが一瞬立ち竦むぐらいには」

「げ」

ちょっと待て。

思わず呆気にとられて相手をまじまじと眺める。

「その格好で、朝倉家へ行ったのか」

「ええ」

「周一郎、が居ただろう」

「……ええ」

「会った、のか」

「お会いできませんでした」

「そ、そうか」

「その代わりに、高野さんにお会いして、滝さんのお話をいろいろお聞きしました」

「げげ」

いろいろ？

「どんな」

「何もないところでもこけられるとか、階段から日に何回も落ちられるとか、どれだけ屋敷のものを破壊するかとか」

「……………」

あのくそおやじ。

「でも、誰よりも…」

「？」

黙り込んだ『直樹』がゆっくり視線を上げて、目を細めながら天井近くを見やる。つられて振り返り、そこに垂れ下がったシャンデリアの煌めきの合間に、細いコードが巻き付いているのを見つけた。集音マイク、そう気づいたとたん、まるでそちらに向かって挑戦するように『直樹』がきっぱりとことばを継ぐ。

「誰よりも『周一郎』さんを大事に守っていた人だと」

「……………あ、ああ、うん」

ベタ褒めにされて顔が熱くなり、照れ隠しにコーヒーを飲もうとしてひっかかる。

守って、いた？

なんで過去形？

今も朝倉家には『周一郎』が居る。なのになぜ。

「そして『周一郎』さんも」

『直樹』はなおもゆっくり室内を見回している。サングラスの奥の瞳が、笑みの柔らかさを裏切ってどんどん鋭くなっていく、その色に俺ははっとした。

ひょっとして、『直樹』に会って、高野も気づいたのか、この瞳の色で、これが誰だか。

だから過去形、になったのか、異変を感じて。

ならば今頃、もう高野は動き出しているだろう。坊っちゃま一途な自分が欺かれていた怒りと不安にひょっと

したら寝食忘れて、周一郎の足取りの洗い直しにかかっているかもしれない。

それで綾野はいら立ったのだ、朝倉家を制御できたはずだったのに、偽物周一郎は役に立たず、思ってもいなかった包囲網が動き始めてきたから。

だから俺を攫って確保してしまい、俺を餌に『直樹』を呼び込むなどという荒事に至ったわけで。

「……っ、な、『直樹』くんっ」

ならば今一番危険なのは俺じゃない、『直樹』だ。

半端に記憶を失ったまま、事のと真ん中に突っ込んで来て、しかも本来ならガードに入ってる高野の守りも朝倉家の後ろ盾もなく、一人で綾野の懐に居る。いつ始末されてもおかしくない。

「はい？」

「もう、帰った方が」

「え？」

きょとんと『直樹』は小首を傾げた。小動物みたいに可愛い仕草、無邪気に目を細めて軽く首を振る。

「まだですよ？ 用件が済んでない」

「用件？」

「だって僕は」

滝さんをここから連れて帰るつもりだから。

「は？」

「聞こえませんでした？」

僕は。

「あなたを連れて帰る」

「……なんで？」

「なんで？」

『直樹』がオウム返しに繰り返すのに、慌ててさっき聞いたばかりの理由を思い出す。

「お、俺はここで医学研究に協力してるんだよ」

「あなたが？ まさか」

むか。

なんだ、一瞬すごくむかっとしたぞ、その言い方。

「まさかって」

「だって、あなたの大学の成績でどんな協力ができるかって言えば……ああ、実験体？」

「大学の成績？」

そんなものまで調べたのか。

「……実験体、って、何、の」

こら、一体いきなり何を中心まで突っ込んで。

穏やかに優しい微笑を浮かべながら、口調は『周一郎』そっくりに鋭く厳しく容赦なく、いやむしろ、微笑んでいるだけに性質が悪く見えるほど辛辣なことばを言い放って、ふいに小さく舌を出した。

「『直樹』くん…？」

「似てるでしょう？」

「何…」

「僕は『周一郎』さんに似てるんですよね、あなたも高野さんも間違えるぐらいに？」

「……」

「なぜ、ですか？」

「……」

「双子？」

「……」

「違うんじゃない？」

優しい声音、けれどそのことばは寸分の逃げを許さない。

「僕は、ひょっとしたら」

「『直樹』だよ」

俺は遮った。

「君は、里岡『直樹』だ」

どこかで見ている綾野の視線、どこかで耳を澄ませている綾野の耳、いつ伸びてくるかわからない綾野の指、そのどれにも掴まれないようにと祈りながら繰り返す。

「君は里岡『直樹』だ」

「じゃあ、どうしてあの扇が必要だったの？」

『直樹』がふいに笑みを消した。

「どうしてあれを持っていったの」

「それは」

「あれがなんだか、滝さん、知ってるはずだよな？ あれは僕の初作品。僕の里岡継承を証するもの、なのになぜ、あの時、あの人、佐野さんという人と一緒に持っていったの？」

僕は父に怒られた、とぼつりと『直樹』がつぶやいて俯いた。

「今まであんなに父が怒ったことはない。覚えている限り一度も。僕が体調を崩すような無茶をした時でさえ、手を上げなかったのに」

「殴られたのか」

「……うん」

言われてみれば、頬に微かな擦り傷があった。

「里岡はもうおしまいだって。自分の初作品を人に渡すような人間には跡を継がせられないって、お披露目も延期になってる」

「人に渡す…？」

なぜ盗られた、じゃないのか、と訝った俺に、『直樹』は淡い笑みを返した。

「差し上げました、そう言ったんだよ」

「え？」

「僕が、滝さんに、差し上げました。僕の恩人だから、そう言ったのに」

「……ああ」
「初作品だからこそ、そう言ったんだ」
父は喜んでくれると思ってた、人のつながりは縁だから、と常から教えてくれていた。
なのに、里岡は激怒した、当たり前だ、あれこそきっと良紀が持ち帰った証拠の品、『SENS』そのものだったろうから。
「……なぜなんだろうって、気になったんだ」
どうしても、納得できなかった。
「なぜ、僕は父に……打たれた？」
それはきっと、手放してはいけないものを手放したから。
けれど初作品を恩師に捧げる、そういう話はよく聞いている。あるいは大切な一品でもこれと思った相手には譲る、それも縁を結ぶ一つの絆、そういうことを見知っている。
何がまずかった？ 扇か、それとも渡した相手か。
腑に落ちない、聞かされていたことにも見せられたものとも合致しない一つの事実。
なぜ、あの『扇子』は人手に渡っては駄目だったのだろう。
「そうしたら」
出入りの家政婦が教えてくれた、滝達の取材というのも違うようだ。
「渡された冊子の会社は存在しないって」
ならば、必要だったのはあの『扇子』だ。
「あれには違う意味があった、そういうことなんだと気づいた」
僕の初作品ということ以外の意味。
そして、その意味は。
「僕の初作品、という以上に大切なものだった、ということだ」
だから、僕は、父に打たれた、そういうこと。
『直樹』はたゆとうように揺れる眼差しになった。
「父には、僕より、あの扇の意味の方が大事だった、ってこと……なぜ？」
鋭く冷えてくるその横顔に周一郎の表情が重なる。
綻びてくる、偽りの世界。
綾野にもきっと納得できなかつたろう。
なぜ『直樹』が俺を追い始めたのか。
だから、見えない深い所で『周一郎』が目覚め始めたのだと考えて、動くことにしたのだろうけど。
「違った、のか」
「え？ 何が？」
「いや、こっちの話」
いささかがっくりしながら俺は必死に考える。
そうだ、違ったんだ。
『直樹』はちゃんと里岡『直樹』として生きようとしていた。むしろ『直樹』として生きようとしたからこそ、父に反発し、自分が扇を扱う世界で生きていく基本をもう一度掘り直そうとして、俺を、いや、俺が持ち去った扇を探していたのだ。
「なのに」
「ん？」
「なのに、それほど大事なもののなのに、探し出そうとすると、みんなが立ち塞がる。……どうして？」
「あ～」
「なんでみんなあの扇にそれほど拘るんだろう、そう思って、今度はあの扇のことを詳しく調べてって」
わかっちゃった。
『直樹』は寂しそうに笑った。
「あれは、僕が作ったものじゃないんだ。僕がデザインしていたなら、まだ扇にはなっていない」
「……どうということだ？」
「僕のデザイン帳を父が見たのは最近のことだと知らされた……でも、それでは扇は作り上げられないんだ」
だからあれはきっと、他の誰かのもの。
『直樹』はそっと唇を噛んだ。
「他の誰かがデザインしたもの。なのに、どうしてみんな僕のだって言って、僕も僕のだと思い込んでいる？」
デザインした人はきっと傷ついたよ。
声を震わせて誰かの意匠が不本意に利用されたことを嘆く『直樹』、それは皮肉にも扇とその作り手、遣い手を尊重する組織の一員に誰よりもふさわしく見えた。
だが、その誰よりも継承者として必要な豊かな心根を、心やましいことがある里岡夫婦も綾野も勘違いした。
『直樹』の動きを勘違いして阻もうとして、逆に自らの非道を暴いていく羽目になっている。
「……『直樹』くん」
「？」
がしっと俺は相手の肩を掴んだ。
「悪いが散歩につきあってくれ」
「え？」
「外に出たくなかった」
綾野が駆けつけてくるまで、危険が間近に迫るまで、どれぐらい時間があるだろう。

13.謎が解ける時(2)

もう『直樹』のことは綾野に伝わっている。
あの扇が持ち去られたこと、それはひょっとしたら今までは綾野に伝わっていなかったんじゃないか？
里岡夫婦は扇盗難の意味をわかっていた。それがどれほど致命的なミスだったのか知っていた。だから『直樹』を叱責し問い詰め、扇を秘密裏に回収しようとした。
だが、おそらく扇はまだ戻っていない。いや、むしろお由宇の手から当局へ、手ぐすね引いて待っていたらろう京都府警へ流れただろう。
綾野の焦りは高野や朝倉家の動きが始まったからだけじゃない、『SENS』ルートの洗い出しが進み、ルートそのものの壊滅の可能性ばかりか、自分には絶対届くはずのない手が伸びてくる可能性がでてきたからだ。
「滝さん？」
「君はどこから入ってきた？」
離れのベランダから庭へ抜け、『直樹』の肩を抱きかかえるようにして尋ねる。
「あそこへどこをどう通って？」
「あの、でも」
廊下を通ってきたし、入ってきたのは玄関から、でもこの庭が表に続いているかどうか。
「どうして？ なぜ外へ？」
室内ではどこへ行こうとマイクがあるはず、そう思ったとたん、はっとして離れに入るまでに着替えさせられたシャツとズボンのポケットや合わせを探る。
そうだ、綾野のことだから部屋だけにマイクを仕込むはずがない、むしろ俺の服か何かにさすがにカメラは無理でも、盗聴器ぐらいは。
「何してるの？」
「いや、ちょっと、その」
説明するわけにもいかずにあちこちひっくり返していると、
「ここですよ」
すい、と『直樹』の指先が伸びてシャツの襟の後から薄いプレートを引っ張り出してぎょっとする。
「これでしょう？」
「あ、ああ」
「ね？」
にこりと笑った『直樹』がそれを指先から滑り落とし、止める間もなくがき、と靴の踵で踏みにじった。
「な、『直樹』くん？」
「え…？」
瞬間、『直樹』は動きを止めた。まじまじと自分の指と俺とを見比べ、やがてゆっくり自分の足を見下ろす。
「……僕、……これ……壊しちゃいました…」
信じられないようなあやふやな声音、不安そうに眼を上げてきて、
「どうして…？」
「……行こう」
その肩をもう一度抱えて歩き出す。前方の小道の端に裏門らしいものが見えている、そこを目指してどんどん歩く。
「どうして…？」
『直樹』は困惑と不安を浮かべてぼんやりした顔で額を押さえた。
「どうして……壊しちゃったんだろう…」
「いいんだよ」
俺は震え出している肩を握る手に力を込めた。
盗聴器が壊されたのはすぐに伝わる。明らかな敵意も伝わっている。
綾野は追っ手を出すのにもう躊躇しない。できるだけ早く『直樹』をこの場所から離れさせなくてはならなかった。
「だって」
「いいんだ、あれは盗聴器だと思う」
「盗聴器…？」
「だから壊してもいい、いや、壊すしかなかったんだ」
「壊すしか、なかった…」
「ぐっ」
いきなり『直樹』が立ち止まって、俺は目一杯自分の足を自分で踏んだ。
「ったたた、おい、『直樹』くん！」
「どこへ、行くんです？」
「え」
「なぜ、こんなに急いでるんです？」
振り仰いできた瞳は、サングラスの向こうで怯えていた。
周一郎は、こんな風に怯えない。
冷然と人を見下す視線、それこそ自分が切り刻まれていっても、他人事のように冷静なはず、だからこれこそ周一郎ではありえない証拠、けれどその表情は肩を怪我して俺の部屋に転がり込んで来た時、俺を庇って撃たれた時の顔を思い出させた。
何も誰も信じられない、その世界に一人放り出された孤独と傷み。
「滝さんっ」
「大丈夫だ」
ぐい、と頭を掴んだ。引き寄せ、ごしごし、と荒っぽく撫でた。
「大丈夫だ」
「で、もっ」
盗聴器？ なぜ滝さんはそんなものを付けてるんです？ なぜ僕はそんなものを見つけられるんです？ なぜ僕はそれに驚かないんです？ なぜ僕はそれを当然みたいに壊しちゃうんです？ なぜ僕は。なぜ僕は。

「っっっ」
がたがた震えながら、『直樹』は俺の服にしがみついた。
「教えてっ、くだ、さいっ……っ」
僕は、一体、誰、なんですか。
「なお…」
「家のアルバムに僕の写真は数枚しかなかった。卒業アルバムが小学校のも中学のも一冊もない。僕の服がみんな新しく、僕の部屋は僕が使った覚えのないもので一杯で、僕の友人のメルアドも住所も電話番号も名前もどこにもない…っ」
滝さんっ。
悲鳴のような叫びが堪えかねたようにしがみついてきた『直樹』から溢れる。
「助けてっ、助けてっ、助けて…っ！」
「なおき…っ」
「みんなが知ってる僕が、僕じゃない…っっ！！」
ああ。
「『直樹』くん！」
がくがく震えている体を抱き締める。
ああ。
ああ。
ほら、見ろ。
一人の存在は、これほど揺らぎ無く強固にその基盤を世界に結びつけている。
たった一人で生きていく孤独から救ったつもりでいて、見る、同じ孤独、いやもっと酷い、その孤独の中で気づかない顔をして生きていけと命じられたような状態に追いやって。
「滝さん！ 滝さん！」
壊れちゃうよ。
「『直樹』！」
だから、堪えかねて、耐えきれなくて、唯一自分の真実を知っているかもしれないと、『直樹』は俺を探しまわった、それがそれまで自分が居た世界を壊していくことだとしても。そしてようやく辿りついて、掴みかけた『何か』が今、目の前で指の間からすり抜けて。
「『直樹』！」
「違うっ」
「えっ」
「違う、違う、違う…っ」
身悶えていた『直樹』ががばりと顔を上げて、ずれたサングラスの向こうからびしょ濡れになった顔でつぶやく。
「僕は……さとおか、なおき、じゃない…」
「う」
「でも……じゃあ……僕は……だれなの…」
滝さん。
「教えてよ…」
「君は」
「……うん…」
「君は……」
ここで告げる真実は、きつとこの先こいつを追い詰める。
ここで教える名前は、きつとこの先こいつを苦しめる。
そして、ここで伝える意味は、こいつを再び一人にすることになるかもしれない。
それでも、それこそがこいつの真実であるならば。
大きく息を吸う。
神様。
サイコロ振ってる悪戯好きのあんたに、今だけお願いする。
こいつがこれ以上傷つくことがないように、どうか守ってやってくれ。
誰にも助けを求められなくて、一人ですたずたになっていくようなまねなんか繰り返さなくていいように、たとえば記憶が戻っても、俺には助けを求めている（有効かどうかは別にして）、そう覚えててくれるよう、守ってやってくれ。
ゆっくり吐き出し、それから『直樹』を覗き込んで丁寧に教えた。
「君は、朝倉、周一郎だ」
「……僕、が」
『直樹』がゆっくりとことばを繰り返す。
「あさくら、しゅう、いちろう、」
僕が。
「あさくら」
周一郎。
瞳が潤んでほっとした顔になりかけた矢先、
「違う」
「！」
凍るような声が背中から響いた。

14.明かされた気持ち

早すぎるだろ、おっさん。
ひょっとしてムカデみたいに百本ぐらい足があるんじゃないか。あんたは爬虫類じゃなくて、昆虫の方だったのか。ひょっとして、それは史上最強、氷河期にも平気で耐え抜いたという伝説の、全国5632万の主婦の敵ってやつじゃないのか。
胸の中で罵倒の限りを尽くしながらのろのろと振り返ると、背後に立っていた綾野が、薄い笑みを浮かべて繰り返した。
「君は違うよ、里岡直樹君」
ご両親が心配して、連絡を下さったよ。
「お、とうさん、たち、が」
「いろいろあって、叱り過ぎてしまったとおっしゃっていた」
「叱り、すぎた…」
俺にしがみついたまま、『直樹』がぼんやりと繰り返す。
「そこに居る滝君は妄想癖が酷くてね」
だから、私がいろいろ面倒を見ていたのだけれど。
「君にまでそんなことを吹き込むようなら、もうちょっと管理を考えなくてはいけないな」
俺は猛獣か。
お由宇か宮田がいたら、俺が猛獣とは猛獣も地に落ちたとか何とか突っ込んでくれるんだろうが、そんな和やかな雰囲気になりそうにないと気づいたのは、綾野の遙か後方の建物の陰に一瞬光ったもの、のせいで。
あれはやっぱり銃口、なんだろうな？
でもって、あれほどこれみよがしに俺の位置からしか見えないように立っているのは、遠回しな威圧ってやつだよな？
「こちらへ来たまえ」
滝君、君もお客様を手荒に扱ってはいけない。
「……ふん」
すっかり危険人物にされてしまった。
「で、も」
ぎゅ、と『直樹』が俺の服を掴み直し、綾野は眉を寄せた。
「僕は、いえ、僕が周一郎さんだとしたら」
おーい。
今銃口がこっちに動いたぞ。ひょっとした『直樹』ごと始末しちゃう気か？
考えた瞬間にはっとする。
里岡夫婦が来た、と言った。それは『直樹』は諦めろ、そう説得されたということじゃないのか。
「……」
ごく、と唾を呑み込んで、そろそろと向きを変えた。『直樹』が俺の体の後になるように、ゆっくり移動する。
。「大丈夫、ですよ」
ぼつりと『直樹』が囁いた。
「あの位置からなら跳弾しない限り、当たりません」
「『直樹』…？」
何だって？
『直樹』が知っているとは思えないことばを聞かされぎよっとする。
「ちょうだん、って何のことか、よくわかんないけど」
泣き笑いのような表情で、『直樹』が俺を見上げる。
「そうだって、わかる」
「……」
『直樹』の内側が細かな破片になって崩れ落ちていくのが見えた気がした。
「直樹君？」
不審そうな綾野の声を遮って、
「……僕にはわからないけれど」
震える声で『直樹』が応じた。
「でも、僕にはわかる」
「何のことだ？」
綾野が訝しげに顔を歪めた。
「滝さんが守ってるのが、周一郎、で。今僕は滝さんに守られてる」
ぼろぼろと涙が零れ落ちた。
「僕にはわからないのに、僕はわかる、今滝さんに守られてる」
振り仰ぐ瞳がきらきら光る。
「僕は、そう信じてる、滝さんは、滝さんだけは、僕を見捨てたりしない」
「何を言ってる」
繰り返す綾野に応じずに、『直樹』はまっすぐ俺を見上げる。
「そう…だよな…？」
「……ああ」
そんなことばを、きっとあいつは絶対言わない。
未来永劫、そのことばを、そんな祈るようにすぎるように、訴えることはない。
それでも。
距離を置いて座っていても離れない。
側に居るために慣れない日射しの中に出てくる。
俺と食事をするのを待って、俺が安眠するのを確認する。
俺に自分の正義を弁解しない。

俺が出て行くのを引き止めない。

けれど俺の毎日を、寄り添うように知っている。

「そうだ」

「……ん」

「周一郎の何を知っている」

嬉しそうに笑った『直樹』を殴りつけるように、綾野が冷たい声で言った。

「私はあの子が朝倉家に引き取られた時から知っている。七、八歳だったか。子供のくせに大人びた顔で、自分は朝倉大悟のBUSINESSを手伝うために居るのだと言い放った」

妹はずっと気味悪がっていた。

「何を考えているかわからない。何を与えても喜ばないし、どんな優しいことばをかけてもにこりもしない」
奇妙な猫を連れていて、その猫も周一郎の側を片時も離れない。

「魔女の使い魔のようだと嫌がっていた」

使い魔。

当たらずとはいえ、遠からずだなと思った。

才能を買われて引き取られたのは知っていたが、その時からルトが居たとは知らなかった。

けれど、ルトが居たなら、きっと周囲の気持ちや陰口なんかは筒抜けだっただろうし、今はそれなりに慣れて諦めてもいるが、そんな幼い時では、周囲が気味悪がっているということを押付けられる一方で苦しかったに違いない。そんな相手が何をくれても喜べないだろうし、優しいことばの裏でののしられては笑うことなどできないだろう。

「大悟はそれでも『相棒』だと無邪気に喜んでいて。大悟の側では多少周一郎も子供に見えたが、それでも自分を引き取ってくれた義理の父親が死んでも、泣くどころか悲しみもしなかったよ」

「そんな……人だったんですか…」

綾野の冷やかな糾弾に『直樹』が顔を強張らせる。

「違うよ」

思わず反論した。

「周一郎はそんなやつじゃない」

才能だけしか認めてもらえなくても。

それでも朝倉大悟が周一郎にとってただ一つの居場所だったのは、その後の行動でよくわかる。そんな居場所を失って、泣けもしなかったのは、もう自分がこの世界と関わる気持ちがなかったからだ。大悟を陥れた連中を罵にかけて葬って、その後自分はどうなってもいいと思っていたからだ。

「あいつはいつも」

ぽん、ぽん、とふざけるように大悟の十字架を叩いていた仕草、虚ろで遠い眼差し、溢れるほどの才能と財力を手にしていても、周一郎はいつも生きあぐねていた、俺にはそうとしか思えない。

「誰よりもいろんなことを知っていて」

誰よりもいろんなものを見ていて。

「だから、黙ってることしかできなくて」

『直樹』が困惑した顔になる。

「……滝さんは周一郎さんのことをよく知ってるんです、よね…？」

じゃあ滝さんの方が正しいんですね？

『直樹』の中の秤がもう一度周一郎に傾きかけた矢先、

「それに、滝君だって、周一郎に酷い目にあわされているんだよ？」

「え？」

「はい？」

ふいに綾野が肩を竦めて言い出して、ぽかんとした。

「確かに滝君は善意の人だ。だが、君が見たようにこれほど周一郎のことを心配し大切にしようとしている彼を、周一郎は自分が朝倉家を手に入れるための駒として使ったんだ」

「…ほんと…？」

「いや、それは」

不安そうに『直樹』が見上げて、俺はうろたえた。

確かに駒として扱われた、けれどなぜそれを綾野が知っているんだろう。

「表面上では朝倉家の相続問題は周一郎が巻き込まれた哀れな被害者だ。けれど私は違うと思ってる。あのしたたかな小僧が？ まさか。そう考えると、あれは全部あいつの仕組んだお芝居だった、そう考えた方が自然というものだ」

単なる推測か、とほっとして我に返る。

「や、だって」

「そのせいで、滝さんは危うく殺されそうになったんだしね」

「う」

「……ほんと…なんだね…？」

「本当だとも」

平凡な家庭教師として雇われたと思わせておいて、その実事件に巻き込んで、ゲームの駒のように弄んだ。滝君が犯人だと疑われるかもしれなかった、そればかりじゃない、滝君も殺される可能性さえあったのに。

「周一郎は人間として何か根本的に欠けていた。自分以外の人間を操ることしか興味がなかった歪んだ性格だったんだよ」

綾野はあっさり切り捨てた。

「その才能は周囲から恐れられ疎まれた。誰も周一郎を愛そうとはしなかったし、誰も側に居てほしいとは望んでいなかった。大悟だって仕事のことがなければ、周一郎を引き取ったかどうか。彼が居た施設でも気味悪がられて、優しくしようとした保母でさえ怖がって、途中で仕事を辞めてしまったほどだ」

綾野は事実だけを伝えると言った沈痛な表情を作った。

「なぜなら、周一郎はその保母の触れられたくない傷みを遠慮なく暴いて引っ搔き回し、嘲笑ったからだ。誰だって触れられたくないことはある、知られたくないこともある。なのに、誰も知るはずのないそのことを周一郎は知っていたばかりか、周囲に触れ回った。保母は混乱し、かわいそうに恐怖のあまり周一郎に怪我をさせて臆になったそうだよ」

「っ」
びくっと『直樹』が無意識のような仕草で額の隅に指を当てた。真っ白になった頬、さっきまで流れていた涙こそ止まったものの、小刻みに体を震わせ、いつの間にか俺の服から手を離して立ち竦んでいる。
「ちゃんとした立派な女性だったらいい。周一郎に出会わなければ、そんなことにならなかったかもしれないね」
「……」
「そして、私の祖母も」
周一郎の乳母だったのだが。
「そんな冷たくて残酷な少年に誠意を尽くした結果、大切な友人を奪われ殺され、今は失意のどん底にいるよ。彼女が何をした、ただ周一郎の面倒を見ただけだ」
綾野は深く溜め息をついた。
いかにも問題のある少年を見守ってきた理解ある大人のように。
いかにも社会から逸脱した人格に思いやりを向けて接してきたように。
けれど。
違うだろ。
腹の底にぞわりと不快な波が動いた。
確かに清はそれこそ善意の人だったかもしれない。でも、事実をきちんと見ていたわけでもなかった。自分に
見たものだけを組み合わせる一方的に決めつけて、周一郎の弁解一つ説明一言も聞こうとせずののしった。
それほど一筋に周一郎を育ててきたのなら、周一郎がどんな人間だったのか、ほんとは誰よりわかっていた
はず、わかっているくせにならなかつたはずだ。確かにあぁ、人殺しなんてあんまりなことがあった、それでも、もうほんの少しでも周一郎を信じてやってもよかったんじゃないのか。
「周一郎は人の心がなかつたんだ。優しい気持ちがわからなかつた。仕事のことしか考えていなかつた、それで誰がどうなろうと」
綾野は眼を細めて苦しそうな顔を作った。
「……君は聞いたことがないか、『SENS』という麻薬がある。あれを扇子に仕込むことを考えついたのは周一郎だよ」
びく、と『直樹』が体を震わせて眼を見開いた。その頭の中で、自分の初作品と奪われた扇、激怒した父が一気に『SENS』ということばに結びついていくのがわかる。
「まさ、か」
不安そうに紡がれたことばは、その『SENS』に自分の父親が、歴史のある老舗が手を染めているという事実への衝撃だったはずだが、綾野は別な意味に取った。なおも煽るように冷たい笑みを浮かべながら、
「本当だよ。あんなに美しい伝統工芸品を人を狂わせる悪魔の道具にしようと考えたんだ」
「そんな…ひどい」
ちょっと待った。偉そうに自慢そうに『SENS』に関する裏情報を曝け出してるが、それってひょっとしてまずいんじゃないか？ だってそういうことは一般に流通している知識じゃないだろうって、俺でもわかるぞ？ 一体何のために。
呆気にとられた俺の目の前で、綾野は周一郎をなお貶める。
「そうだ、そんなひどいことをする、それも自分の利益のためだけに」
君はなりたいたいのか？
「誰からも愛されない、誰からも必要とされない、周一郎という少年に」
綾野の口調にはっとする。
「こんな善意の滝君まで操り利用し、傷めつけて楽しむような人間に」
そういうことか。
ふいに気づいた。
綾野が口を極めて周一郎を悪の化身のように扱っているのは、牽制のためだけではなく、開きかけている『直樹』の記憶の蓋を閉じようとしているのだ。
誰だって、ましてや今孤独に陥っている『直樹』が、これ以上救いのない立場に追い詰められてはたまらない、そう思わせることで、周一郎に揺れかけた気持ちを封じようとしているのだ。
「でもそれはう、」
「嘘だ！」
「はい？」
いきなり台詞を横から奪われ、俺は固まった。
「『直樹』？」
「それは嘘だ、嘘ですよ！」
今の今まで震えて怯えていた『直樹』が、ぐい、と俺の前に進み出た。髪の毛をかきあげながら綾野を見据える綺麗な動き、その鮮やかさにはっとする。
これは、この人の眼を奪う印象は。
「周一郎さんが滝さんを傷つけるのを楽しむわけがないんだ。どうしてそんなことをしなくちゃならない？ たった一人、自分のことをわかってくれそうな人によく巡り会ったのに？ たった一人、自分の本当の姿を見せても側に居てくれる相手を見つけたのに？」
あれ？
『直樹』のことばが妙なニュアンスで響いてきょとんとした。
おい、待て、なんでそんなことがわかる？
「自分が死んでも誰一人悲しんでくれない、むしろ喜ぶ人間ばかりだ、そう思い知らされ続けてきて、人の心の裏側ばかり見させられて、そんな自分が汚くて嫌で辛くて、どれだけ逃げたくて死にたくて……」
呆然とする。
それは『直樹』というより、むしろ周一郎の、いや、周一郎しかわからないこと、じゃ。
「どれだけ自分が普通じゃなかつたことが悲しくて、それでもそうやって生きるしかできなくて苦しくて、なのに、そうしてる場所にたった一人、笑って踏み込んでくれた滝さんを、『ぼくが』どれほど失いたくなかつたか、わかりますか？」
綾野が目を見開いた。
「わかるわけないだろう、あなたなんか。わかるわけないだろう、『ぼくの』気持ちなんか。大悟だって能力

がなくなれば、『ぼくを』見捨てるかもしれない、けれど滝さんは違う、『ぼくを』絶対見捨てない、だって、ルトのことを知っても戻ってきてくれて、『ぼくが』突き放しても笑っててくれて、どれだけ大事だったかわかるわけない、どれほど怖かったかわかるわけない！」

お、い。こんなことってあるのか。

『直樹』が今、『周一郎』の気持ちを話してる、『周一郎』では絶対口にするはずのない気持ちを。「離れなければ巻き込んでしまう、滝さんを危険に晒してしまう、そう何度も思ったのに、何度も決めたのに、どうしてもどうしても側に居てほしくて、だから『ぼくは』怖くて、側によれないほど、怖くて…！」

「……」

そんなことを、考えてたのか。

あの一メートルの距離は、周一郎が、必死に釣り合いを保とうとした距離、俺の安全と自分の孤独を何とか釣り合わせようとした、ぎりぎりの距離。

「だから、今度だって『ぼくは』、『ぼくが』居ることで滝さんが危なくなるぐらいなら、『ぼく』なんて 要らないんだって思って……」

じゃああれは。

松尾橋から身を投げた、本当の理由は。

「なのに、なのに、それでも『ぼくは』滝さんと再会して嬉しくて嬉しくて、でも滝さんが探してるのは僕じゃなくて、でも『ぼくで』……あ…れ？」

ひょっとして、記憶を失った、本当の理由は。

「『ぼくは』……？ 『ぼく』……??」

周一郎、だから一緒に居られない。

けれど、違う人間であれば一緒に居られる。

まさか、そんな馬鹿なことを、考えたり？

「おーい…」

ひょっとして、こいつは世界で一番馬鹿じゃないのか？

「あれ……？」

「ん？」

「……滝、さん？」

「うん……って、え？」

瞬きした『直樹』が訝しそうに俺と綾野を見比べる。

「ここ…は…？」

額に当てた指先、自分の内面を覗くような瞳があっという間に表情を失う。

「この、状況…は」

涙を残した眼にアンバランスな冷静さが漂うと同時に、紅潮していた頬がすうっと白くなった。

「き、さま…っ」

綾野が俺を睨みつける。

「、違うだろっ」

「貴様が余計なことを！」

「違うって！」

いや、何か大きく勘違いしてないか？ 挑発したのはそっちだろ。

「滝さん？」

「はい」

「…僕は」

「お前は」

名前を口にしようとした矢先、綾野の背後から全力疾走してくる男に振り向く。

「大変です！」

「何だっ！」

ヒステリックに怒鳴りつけられて、男は一瞬凍りついたが、すぐにうわずった声で叫んだ。

「警察が来てます！」

「そんなことはないはずだ」

「捜査令状があります！」

「なにっ」

さすがに綾野の視線が動いた、その瞬間、俺の中でスイッチが入る。

「逃げるぞ！」

一気に走り出した俺を、数瞬遅れただけで、それまでとは打って変わった冷静さで『直樹』が追ってきた。

15.走る走るとき走れば走れ！

「どこだ！」
「ここからは出られないはずだ、探せ！」
ばたばたし始めた屋敷内、それに輪をかけてばたばたと人相のよくない男達が走り回っている。
「ふ、う」
これは遅かれ早かれ見つかるな。
溜め息をついて植え込みの影にもう一度深く身を潜める。
「あっちにはもう行けないし」
さっき見えていた裏口はぎっちり防御されていて、近づくことさえできない。
「…大丈夫か？」
「は、い」
何かしきりに考えている表情の『直樹』がはっとしたように顔を上げた。逃げ始めたあたりでサングラスを落としてしまっているからか、さっきより青ざめていくのが気になる。
「何か思い出したか？」
「……いえ」
『直樹』は苦しそうに下唇を噛んだ。
「でも」
そっと額に指を当ててゆっくりと撫でた。
「ん？」
何だ、と覗き込むと、その指の下に額の隅に薄白く残る傷跡があった。
「……怖かった、って、思いました」
「え？」
「それまで優しくかったのに、急に詰られて、ひどく怖かった」
澄んだ瞳が潤む。
「僕は、してはいけないことをしてるんだと、思いました」
「『直樹』…」
「見てはいけないものを見て、だからみんな僕が疎ましくて嫌いで……居ない方がよかったんだって」
生きてちゃ、いけなかったんだって。
「……同じでした」
「……何が」
「扇のことを、おとうさんに話したときと、同じ」
幼い口調が確認するように続ける。
「周一郎、のことを、おかあさんに話したときと、同じ」
知らなくていいことなのに。
知ってはいけないことなのに。
「……どうして、僕は」
いつも、いつも。
「見なくていいもの、ばかり、見つけちゃう、んだらう…？」
膨れ上がってくる涙の粒を堪えもしないで零しながら、『直樹』はひくっ、と小さくしゃくりあげる。
それはまるで、施設に居たころに傷つけられた周一郎が、その時流せなかった涙を流しているようで。
俺の前でも語り尽くせなかった思いを打ち明けているようで。
胸が、詰まる。
「……お前が見つけなくても」
そっと頭に手を載せた。
「きっと誰かが見つけたさ」
「でも」
「あっちに居るやつは、性格は悪いが間抜けじゃない」
「あっち？」
俺の指差した上空の方向を『直樹』は素直に見上げる。
「神様」
「かみ、さま」
「知らん顔をしてるんで、気づいてないかと思うときもあるけど、実は眼の端で全部見てて」
こっちが忘れた頃に突きつけてくる。
「お前が間違ってるとしたら」
それを誰かのために使ったことだ、きっと。
「誰かのため……？」
「うん」
人は弱くて脆いから、真実ってのは苦手なんだ。受け入れられる時間と場所がある。
「それをちょっと早く言い過ぎたんだ」
「……ちょっと早く、言い過ぎた」
『直樹』が首を傾げて俺を見た。
「だからさ、あーえーとうまく言えないけど」
お前はそれを誰かのために使うんじゃないかって、自分が幸せになるために使うべきだと思うな。
「自分が、幸せになるために…」
しばらく黙っていた『直樹』は、くすん、と涙をすすりあげて涙を拭った。
「じゃあ、今、みたいな時？」
「そうだな」
にこりと笑う相手に俺はほっとする。
「今出口を見つけるってのは凄く大事だぞ」
「わかりました」

応えた『直樹』が眼を閉じたかと思うと、すとん、とふいに表情が消えてぎょっとする。

「『直樹』？」

「ここから半径二十五m内から外部へ動ける通路は二本。一本は母屋の方へ、もう一本は別の中庭へ通じています。半径五十m内になると、外へ通じるルートは七本、けれどそのうち四本が建物の中、残り三本が中庭からのさっきの裏口と表通りへの通路、こっちはガードされているけど、もう一本は……」

ぱちりと眼を開けて淡々と報告する。

「この斜め隅の、今は使われていない用水路。ここから外へ抜けられる」

「はい？」

なんですかそのサーチシステムみたいな回答は。

俺がよほど奇妙な顔をしていたんだらう、『直樹』は解きほぐすように説明してくれた。

「……ここへ来る時、表通りから通されて、建物の構造地図が途中にありました」

それと、通ってきた通路、さっきみた離れと庭、走ってきたルートを組み合わせていけば。

「簡単です」

見上げてくる瞳がよく見知った光をたたえていた。

全てを見抜く英知の視線。

「それに用水路の上を渡っているあの生け垣を潜って、庭を抜けた向こうにルトがありますから」

平然と、しかも主たる威厳を秘めたその口調。

「こっちは使われていない裏口だけど、鍵がかかっている金属の透かし扉で、ああ、外には」

くすりと笑いを零す皮肉な笑みを浮かべた唇。

「手回しがいいことだ、佐野さんがパトカーまで引き連れて待機している」

これだからあの人には用心しなくちゃならないんです。

「だから、滝さん、僕達はここから抜けて」

『直樹』は植え込みの陰、人一人通り抜けられる程度の細い通路を指差しながら俺を振り返る。

その仕草はまさに、

「……周……一郎……」

「え？」

「お前、記憶が戻ったのか……？」

「記憶？」

何のことです？

訝しそうに瞬きする。

「僕にルトの見えるものが見えるのは当然……」

言いかけた『直樹』が今度こそ真っ白な顔になった。

「……これは……何……ですか……？」

「……」

「この、眼の奥に見える、これは一体」

『直樹』がぞくりと身を震わせた。

「何が見えている……？」

「それは……」

「居たか?!」

「いやまだだそっちは！」

「こっちへ来たはずだぞ！」

響き渡った声にはととして身を潜め、戸惑った顔の『直樹』を引き倒す。間一髪ですぐ側を数人の男が手にそれぞれ物騒なものを抱えて通っていく。

「ガキはともかく、男の方は仕留めていってことだ！」

「とろそうなやつだったから、すぐ見つかるんじゃないか」

「間抜けな顔してたから絶対押さえられる」

「足も遅そうだったし、きっとアホ面晒してそのあたりに居るぞ！」

おい人をそこまで馬鹿にするのか確かに居るけどな、ここに見事に居るけどな、って。

「っ」

がさり、といきなり目の前に銃口が突きつけられて血の気が引いた。

「……滝さん」

「、」

弱々しい震えた声でつぶやいた『直樹』をより一層草に沈め、抱え込みながら後へ庇う。ぶるぶる全身揺らせながら、『直樹』が必死にしがみついてくる。

「…たき…さん」

吐息が腹のあたりで囁く。

こわいよ…。

「っ、」

銃口がゆっくり茂みをかきわける。覗き込まれたらおしまいだ。まず俺から撃たれて、それから『直樹』が始末される。

「、、、」

せっかくこんなに素直に気持ちを打ち明けられて、せっかくこんなにちゃんと人に救いを求められて、せっかく明るく笑えるようになったこいつをまた、あの光の牢獄に押し込めてしまうことになる。

歯を食いしばって銃口を睨み据える。

ああ、怖い、怖いさ、前に目の前で周一郎が撃たれたのを見ている。溢れる血とむせ返る熱が一気に流れ去る人の体も知っている。

悲鳴を上げればこの怖さはすぐになくなり、安らかで柔らかな暗闇の平穏が待っているとわかっている、こんな恐怖に耐えるよりはきっと、その方がうんと楽なはず、それでも。

『直樹』をきつく抱え込む。

怯むな。

眼を閉じる。

深呼吸する。

体を緩める。

そうだどうせ一度きりの人生だ、慌てなくてもいつかちゃんと死ぬだけだ。

「たき…さ」

「…」

静かに『直樹』の体を撫でる。優しくその背中を叩く。眼を見開いて手を伸ばす。揺れている銃口をうまく掴んで引っ張れたら。その先を地面に向けられたら。一発目が外せたら、二発目までの時間ができる。すぐその用水路に『直樹』を追い込むことができる。

「…走れ」

「え…」

「俺が掴んだら、すぐ走れ」

「でも」

「いいから走れ、わかったな！」

「うあ！」

叫ぶと同時に銃口を掴んだ。力の限り引き寄せて、そのまままっすぐ引き下ろす。相手が悲鳴を上げて大きく震える。『直樹』の背中を殴って促す。

「走れっ！」

「そうだ今が走るとき、走る走る走るとき走れば走れ！」

「くっ」

鋭い舌打ちは『直樹』のものか、周一郎のものなのか。

側から跳ね起きた少年、同時に掌の中で衝撃があって、どんっ、と重い振動音が俺の腕のすぐ側で弾けた。

「いたぞ！」

軽い発射音と重い衝撃、焼け付くような感覚に両手を離してしまっ、それでも突っ込んできた男の頭を思いっきり抱え込んでしがみつく。

「どわあああああ！」

「うああああ！」

わめいたのは俺わめいたのは男、もんどりうって一緒に草の上に転がる、『直樹』の足音がふいに地面から消える、ああどうかうまく用水路に飛び込んだのであってくれ、でなけりゃ俺がなんで苦手なハードボイルド、『半熟卵』にはきつすぎる。

「がっ」

抱えた頭はすぐに振り払われて、引きずり出されて顔を殴られ、そのまま地面に転がった。

「このくそがああ！」

激怒しまくってる相手がどすっと俺の胸を踏む、待てそれで普通に死ぬるから、その上撃たなくっていいから！

「うわっ」

構えられた銃口にもう終わりだと顔を背けた矢先。

「ピイイーーーーッ！」

「確保ーーーーっ！」

「えっ」

鳴り響く警笛、空気を圧する十数人の怒号、ぎょっとした男が振り返る先を見たたん、全身凍りついた。

「なっ」

「たきさん……っっっ！」

駆け寄ってくるのは周一郎、涙でぐしゃぐしゃの顔で両手を広げて、まるで男も銃も周囲の何もないように、俺しかそこに居ないようにまっすぐ何ためらうことなく。

その背後から、どこにそんなに潜んでいたのか、次々と踏み込んでくる制服警官、それを先導するように芝生を駆けに跳ねる小さな猫と、それを追うお宇の姿。

「こいつう！」

男は激怒した。一瞬にして真っ赤になった顔が主人の言いつけを忘れて餌に飛びかかる猟犬みたいに歪んで見えた。俺を蹴って向きを変え、走り寄ってくる少年の胸に狙いを定める。

「やめっ」

お前は馬鹿かアホかすつとこどっこいかきゅうりのへたか。

「俺が先だって言ってたぞ！」

「うお！」

蹴られた左肩が熱くなる、それでも男の足を掴んでがっしり引き寄せてやってバランスを崩させ、ざまあみろ、そう思った瞬間。

「っっ！」

振り返った男がライフルを構えた。

至近距離。

狙いがぶれる。

スローモーションで引き金が引かれ、銃口が軽く跳ね上がり、飛び出した弾が俺の左肩へ吸い込まれる。

「く…あ…っ！」

「志郎っっ！」

高い悲鳴。

「この野郎！」

二発目を撃つ時間は男にはなかった、次の瞬間飛び込んできた警官らしき塊に視界からあっという間に跳ね飛ばされて消え去ったから。

その代わり。

「い、てええっっっ！」

とにかくそう叫ぶしかなかった。

体中から汗が噴き出し、まるでそれで貼付けられたみたいに地面に寝そべったまま身動きできない。血の気が引いて吐き気がしてこのまま吐いたら窒息死するそれは笑える銃で撃たれて窒息死だぞなんだそりゃとか思っているうちに、涙で歪んだ真っ青な空に突き出された顔に瞬きする。

「お…由宇…」

「しゃべらないで！」

「っっっ」

すいません何したんですかすごく痛い気が狂いそーなほど痛いんですが、と目で訴える。

「弾は…擦っただけね」

ほ、と汗を浮かべた顔で陰しく寄せていた眉を緩めて、お由宇が左肩をまた強く押した。

「いたいいたいいたいっ」

「痛い痛いつてタフね、もう」

呆れたようにお由宇が応じる。

一応撃たれて結構な傷になってる、今止血してるところだから痛いぐらい我慢なさい、そう言いながら、駆けつけてきた警官から何かを受け取りなおきつく肩を押さえて手当してくれている、らしい。

「吐きそう…なんだが」

「我慢なさい」

「……吐くぞ」

「窒息するわよ」

「……なら横向けてくれ」

「もう」

いやもうってあんな俺は認識に間違いがなければたぶん重傷で。

「うぎゃあああ」

「男のくせになに」

「いたいいたいいたい」

横向けられて死ぬかと思った。こみ上げてきた吐き気が痛みで倍増しになった。よしもう完璧に吐く、そう息を吸い込んだとたん、目の前に立ち竦んでいる姿に気づく。

「う」

「……たき…さん…」

えーと『直樹』だっけか周一郎だっけかああもうどうでもいいや今。

「ぶじ…だったんだな…」

「……ぶじ…じゃない…」

よろめくようにふらふら体を揺らせて近寄ってくる少年はくしゃくしゃになった髪の毛に草を絡ませ、あちこり泥だらけになっている。

「けが…」

したのかおい。

思わずぎょっとして起きかけて、ぴ、と頭のどこかで停止音がして沈む。

「滝さんっっ！」

「あなた馬鹿？」

あのなあお由宇、怪我人に向かってさっきからなんて言い草だ、かなりきついんだぞわかってんのかと必死に反論したつもりがことばになっていなかったみたいで、走り寄ってきた少年がへたりと側に崩れ落ちてきたのをかろうじて見上げた。

「たきさ…」

少年はがたがた震えている。

「たき…」

伸ばしてきた指が俺の左肩に触れる。

「たき…」

ぬるんと妙な感触で撫でられてまた吐き気が込み上がってきて喉を鳴らすと、ばたばた近づいてきた男達がほら君離れて、と少年を押し除ける。

「……」

シャツを捲り上げられて腕にぷつりと何か刺さった。つり下げられた透明なパック、吐き気が緩やかに引いていく。

押し除けられた少年はのろのろとした仕草で自分の右手を眺めている。その右手の指先がべったりとした赤黒いものに塗れていて、それが俺から流れたものだと思うとまた苦しくなって目を閉じてぐびぐび唸った。

「…や…だ…」

掠れた声が響いた。

「や……だ……」

滲んで揺れて今にも消えそうな弱々しい声が、周囲の喧噪を通して不思議にはっきり耳に届き、俺は今にも眠り込みそうなのをかろうじて目を開けた。

「滝…さん」

少年が激しく揺れる右手を握り締め、口元にあてて震えながら泣いている。

「いやだ…いやだ……いや…だ…っ」

内蔵を引き絞るような悲痛な声。

「いやだ……あなたを……あなたを…失う……のは……いや……っ」

い、や、だ…あ…っ。

悲鳴を空へ投げ上げて、少年はいきなり動きを止めた。

それから突然操り糸に引き上げられた人形のようにするりと立ち上がる。

「……救急車は？」

静かで冷淡な声をはっきりと響いた。

「早く担送してください」

走り寄ってくる人の気配、見下ろしてきた少年がガラス玉のような無表情な瞳からまるで壊れたおもちゃのようにぼろぼろ涙を落としてくるのを俺はぼんやりと見上げた。

「馬鹿なことを」

吐き捨てる冷笑。

「何をやってるんですか、あなたは」

こんなところへ勝手にやってきて僕なんかにか構ってあげくに撃たれて死にそうになって。

「いいかげんにしてください」

もうまっぴらだ。
「僕は金輪際あなたと関わらない」
面倒ばかり引き起こして事態をややこしくするばかりで何一つまともにできなくて何一つ変えることもできなくて。
ことばは続く。俺を見捨て切り捨てる冷たいことば、けどそれを全て裏切るのはとめどなく流れる涙と俺の血で汚れた頬、そして。
「でもあなたがどうしても突っ込んできてしまうなら」
顔を背けながら少年は言う。
「あなたを害するものを僕は許さない」
それがたとえ僕自身でも。
「今あなたが払ったものの代償は」
くすり、と微かな笑い声が響いた。
「あの男に払わせましょう」
握りしめたこぶしを軽く口元に当てて目を伏せる、唇の端を汚したのは俺の血か。その細められた瞳が酷薄な色に輝いて俺を振り返る。
「後悔してもらおう、朝倉周一郎を敵に回したことを」
ああ、戻って、きた。
「…おか…えり…」
「っ」
何をぶっ飛んだことを言ってるんですか馬鹿ですかあなたは今自分の状態がどうなってるのか自覚さえないんですかほんとにいつもいつもいつもいつも。
「おか…」
いきなり真っ赤になって詰り出す相手がことばをうまく聞き取れなかったのかと押し寄せてくる眠気に苦勞してもう一度繰り返した。
「…えり……」
周一郎。
暗転した視界の彼方。
小さな後ろ姿が振り返りもせずにはぼつりと応える。

ただいま、滝さん。

16.舞扇の裏表

あれ？
ここはどこだ？
俺は瞬きしてきよろきよろした。
周囲はほとんど何も見えないが、足下が緩やかな坂道になっていることだけはわかる。ほのかに光っているその道をゆっくり上って行って、やがて左右が切り立った崖になっているような、人一人通れるか通れないぐらいの狭い場所にたどり着いた。道はその先は上ってきたと同じように緩やかな坂道で、今度は下っていくようだ。
ヨモツヒラサカ。
ふいにそのことばが浮かんでぎょっとした。
おいおい、俺は死んだのか？
けれど不思議と怖さはなくて、ただこの光景をどこかで見たことがある、そう考えていて、廻元が投げかけてきた心理テストにそっくりだと気づいた。
ならあいつが居るはずだよな？
下っていく先の方を透かし見たが人の気配はない。
ただただ真っ暗でしんとして冷たく深く静まり返った闇があるだけだ。
「周一郎？」
呼んでみた。
しばらく耳を澄ませてみたが返答がない。
「『直樹』？」
ひょっとして記憶が戻ったと思ったのは俺の都合のいい妄想だったのかと呼び名を変えてみたが、これにも返事がなかった。
「うーむ」
これはまじで死んでるのか、俺は？
「うーむ」
困ったな。
きっとあいつはパニックになってるぞ？
自分を責めて殺したいほど憎んでるに違いない。
死んだものは仕方ないのかもしれないが、それにしてもこれからどっちへ行けばいいのかと考えていると、今の上ってきた方から誰かがやってくるのが見えた。
『滝さん』
にこやかに笑う顔、いそいそとした足取り、明るく声をかけてくる姿は『直樹』のものだ。
『心配してました、どこに行ったのかと』
ああうん、すまん。
謝りながら、そうかこいつが残っちゃったのか、と一瞬ためらったとたん、
『あなたは肝心なところで抜けてますからね』
はい？
冷やかな声の下っていった坂道の方から響いて慌てて振り向くと、そちらから眉をしかめたサングラス姿の周一郎がやってくる。
『おかげで僕がどれだけ苦労するか』
心底うんざりした吐息まじりの呟きを漏らしながら、俺の隣までやってくる。
『覚えててください、あなたの尻ぬぐいを誰がするのか』
『覚えててね、僕がどれだけあなたが必要なのか』
左から周一郎が、右から『直樹』が同時にしゃべって混乱する。
「は？ あの」
『忘れないでください、あなたはドジで間抜けなんだから』
『忘れないでね、僕はあなたが傷つくと苦しいんだ』
「お、おい」
頼むから同時にしゃべるな、どちらがどちらかわからなくなる。
そう言いかけて、いや待てよ、そう思い直す。
別にいいじゃないか。
どちらがどちらであっても、どちらも同じ人間なんだし。
「えーと、つまり」
お前らは俺のことを大事にしてくれてるってことだよな？
『っ』
『うん』
一人が真っ赤になり、一人が満面の笑顔でうなずいて、ふいにお互いの方を向いて強く一步を踏み出す。
「えっ」
待てぶつかるやめろ、ってかそこには岩があるはずだろ。
そう口を挟む間もなく、俺の目の前で二人は自分達がまるで幽霊だったように交差してお互いの中をすり抜けた。呆気にとられた俺が固まっている間に背中合わせになった二人が今度は同時に俺を振り向き、次の瞬間。
ばんっ、と目の前で巨大な扇が開かれた。
淡い桜色の地、そこに舞い狂う黒と金色の花弁は鮮やかで美しいがどこか闇をたたえている。人の心の光と影、その絡み合う見事さ、それを理解り合う困難さ。
ふいにくるりと扇が翻る。
今度は豊かに広げた枝と太い幹に幻のような花びらを散らせ、蝶を遊ばせる光景となる。穏やかに和やかな春の情景、だがしかしそれは一瞬の命とその後の闇を含んでいる。
どちらを選ぶ、そう廻元の声が響いた。
魔性の闇か、圧倒する光か。
周一郎の姿も『直樹』の姿もどこにもない。
そこにあるのは、目に見えない何者かの手によってくるくと翻され続ける扇のみ。

どちらを選ぶ。
選べるのはただ一人だぞ。
俺は。
俺は。
足を踏み出し、空中に舞う扇をぎゅっと掴んで引き寄せた、ところで目が覚めた。

「ではお大事に」
「ありがとうございました」
「お世話になりました」
病院の受付に頭を下げたお由宇からは、と缶コーヒーを渡され、振りかけて一瞬手を止める。また微炭酸とかじゃないだろうな。
「どうしたの？」
「いやちょっと前に酷い目に」
いきましよう、と促されて広げていた新聞を折り畳んで待合室のラックに戻した。
そこには『古典芸能黒い交流』とか『暴かれた旧家の闇』とか、それこそドラマになりそうなタイトルが大きな見出しで並んでいる。
「しかしなあ…」
まさか『SENS』がどうこうってだけじゃなくて、美術品の密輸まで関わってるとは思わなかった。
「ICPOから情報提供と協力は依頼されていたんだけど」
「はい？」
「ICPO。インターポール」
「いや、わからないのはそこじゃなくて」
今おかしなことを言わなかったか、依頼とか何とか。
「フランスと日本を結ぶ国際的な密輸組織があるということまでは掴めていたんだけど、そこから先に立ち塞がっていたのが朝倉だったから」
なかなか公的な手段では情報を掴むのも難しかったけど。
お由宇はまるで隣のスーパーだと大根が150円したんで畑のおじさんに交渉するしかなかったのよ、と言うような口調で続けた。
「まあ今回の件が『内部告発』なんて派手な展開になったから」
いろいろとやりやすくなって助かったわ。
こくと『まさかおいしいミルクティ』を飲みながら微笑むお由宇に、やっぱりこいつも得体が知れない、と溜め息をついた。

内部告発。
俺が入院している間に、世間ではあっという間に事件が進行していった。
綾野が関わっていた、かもしれない太田新薬研究所が警察の捜索を受けたのは、そこに俺が拉致されている可能性を『直樹』とお由宇が示唆し調査を依頼したのと、あの扇から『SENS』が発見され、里岡に捜査が及んだためだ。
あの日やってきた『直樹』は実は既に警察と繋がっていて、マイクとカメラを身につけた状態で入ってきたこと、里岡が話をつけに来たというのも老舗の存亡を秤にかけたうえでの警察への協力だったこと、そこで確かに軟禁状態になっていた俺は踏み込むのにかっこうの餌だったこと、そういう事件のあらましを見舞いに来てくれたお由宇が少しずつ教えてくれていた。
綾野はあの時結局捕まらなかった。混乱に乗じ、密かに姿をくらましていて現場で逮捕されるようなことはなかった。
そのままでは太田が一人で『SENS』を開発販売し、『トップ・トランス』を利用して海外への販路を広げた、そういう落ちになるところだったはず、それを覆したのが『トップ・トランス』の幹部社員と名乗る人間の内部告発、しかもそれは古典芸能で交流するという名目で『トップ・トランス』をスポンサーとして何度もフランスを訪れていた一団が、実は古美術品の密輸に関わっており、『SENS』もその取引の一つに入っていたと暴露する内容で、綾野はもちろん朝倉家や里岡までも巻き込む大騒動に発展していた。
だがセンセーショナルな見かけとは裏腹に、業界では着々と里岡と『トップ・トランス』の関係者を切ることで終結に向かいつつあり、皮肉な見方をするコメンテーターは密輸にせよ『SENS』にせよ、それを求める人間がいるかぎり、こういったルートも組織も根絶しないでしょう、とまとめていた。
「処罰されたのは結局」
「研究所所長太田正道と里岡雄樹、ぐらいね」
「綾野は」
「さすがに自分に繋がる証拠をそれほど残してるわけじゃなくて」
今回もまあ怪しいとは思われているけれど、一通りの事情聴取が済めば保釈金を積んで出てくるでしょう。
ほんとにあんたは見てるのかよ。
俺は一瞬、痛いほど真っ青に晴れた空に輝く太陽を見上げた。
「周一郎はどうしてる？」
「さあ」
お由宇は軽く首を振った。
「表舞台には一切顔を出してないわね。『直樹』として事情聴取されてるはずだけど」
「ああ、うん」
実は一度だけ入院中に周一郎はやって来ている。
俺がまだあんまり動けない時に人目を避けるように『直樹』として。
『滝さん？』
サングラスをかけていないまっすぐな視線で俺を見て、不安そうにベッドの側に立ち竦んでいた姿を思い出す。

「滝さん？」

「ん…」
熱っぽい体を持って余して目を開けると、そこにいつの間にか周一郎が立っていた。
「大丈夫？」
「『直樹』…？」
一瞬あまりにも柔らかな問いかけに時間が前後したような気がして、熱のせいもあったのだろうがついそう呼びかけると、
「…はい」
ぴく、と体を震わせた相手は微かに笑った。
「熱があるの？」
静かに伸ばされてきた掌はひやりとして気持ちいい。
「ちょっとな」
回復するために体が頑張ってる証拠らしいぞ。
そう笑い返すと、ばか、と小さく応えた声があって目を開ける。
「ごめん」
「ん？」
「巻き込んで……ごめん」
たどたどしい謝罪。
「怪我…させて……ごめん、ね」
額に載せた掌から伝わってくる震え。
「僕は、ほんとに、滝さんを巻き込む気じゃなくて」
俯いて視線を合わせない瞳が揺れている。
「あの時、回りが、真っ白になった」
囁くような声が続く。
「僕は、生きてちゃ、いけない」
苦くて淋しい響き。
「こうやって、大切な人を、いつも、傷つける」
ほう、と吐き出される息。
「見なくていいものを見て、知らなくていいことを知って。大人しく殺されてれば、いいのに」
それもできない。
「どうしたら……いい？」
滝さん。
「僕は…」
なんで生まれてきたんだろう。
「こんな能力」
誰も幸せにしないのに。
「違う…だろ？」
「…え？」
「違うぞ…」
ほら、と俺は額の掌に無事な方の手を載せる。凍りついたように固まる相手に笑う。
「こうやって俺が生きてるのは、お前が居たおかげだし」
あのままだと確実に死ねてるわけだし。
「俺は今こうやって生きてて嬉しいぞ？」
翻る扇を思い出していた。
「あのな……裏表だと思うんだ」
「……はい？」
「人間も世界も」
全部一面だけあるんじゃないで、全部一面だけ正しいんじゃないで。
「表も裏も」
全部正しい。
「そりゃ時々酷いことがあるけどさ」
酷いことばかりかもしれないけどさ。
「それでも空は青いし、風は吹くし」
俺の世界もお前の世界もきっと必要なんだ、誰かにとって。
「片方の世界が壊れる時、もう片方から助けが来て」
片方の世界だけじゃ思いつかない方法とか見つけられない道とか、そういう、自分の世界を越えたところから救う力が来る。
「だから世界が壊れずに済むんだ」
今回のことがそうだろう？
「俺だけじゃ死んでた」
先にお前を見殺しにしてたら、俺も最後に死ぬしかなかった。
「ありがと、な」
「っ」
びくりと震えた掌が慌てて手を引こうとする、それを引き止める力は俺にはなくて、ぱたりと滑り落ちた俺の掌をはっとしたように相手が掴む、その必死さに。
「ありがと、周一郎」
「くっ」
一瞬くしゃくしゃに歪んだ顔に笑いかける。
「どっちでもいいけど、俺は『直樹』より、お前がいいや」
「……馬鹿ですね、相変わらず」
はげ落ちていく笑みの向こうにあったのは、痛々しいほど怯えた顔、それでもその顔が訴えるのは胸を貫く激情で、ただ繰り返す、どこへも行くな、と。
「うん、すまん」

馬鹿で。
「その馬鹿を」
これほど守りたい僕もきっと馬鹿です。
聞こえるか聞こえないかの掠れた声を耳の奥で覚えている。

「『直樹』は……行方不明になったんだろ？」

「……そうね」

表舞台に出ていた里岡『直樹』は警察の事情聴取を受け、家に戻され、そしてふいに消えてしまった。体調が悪い、そう言って病院に受診しようとして、数日前に雇われた運転手ごと行方不明だ。本当ならばそちらも騒ぎになるはずだったが、そこにちょうど内部告発が重なり、次々明かされる新事実の波に埋もれていってしまった。一連の事件に関わって始末されたのではないかと、警察は太田を追及中らしい。

「『周一郎』は」

「海外へ逃げた、と考えられてるけど」

「ふうん」

朝倉家に周一郎が戻ってくる直前、こちらは一人で屋敷を抜け出したらしい。本物の周一郎を迎え入れる準備に右往左往していた高野は急ぎ追っ手を送ったらしいが、既に相手は中国へ、そこからすぐに転々と移動していたらしく、その足取りは掴めていない。

そうして表と裏の境界線は一瞬見えたように思えてすぐに曖昧に現実に呑み込まれていく。

掴んだと思った真実も、あっという間に重ねられる虚構の中に埋もれていくんだろう。

それでお前は どうする、そう廻元は尋ねた。

「さすがに元気そうだな」

「さすがにってなんだそれは」

見舞いに来たぞ、と廻元は買ってきたまんじゅうをさっさと枕元で広げて食べ出す。

「俺の分は？」

「おお、ナースステーションに置いてきた」

「は？」

「世話をよろしく頼むとな。気を利かせただろう」

「それはかなり違ってるとような気がする」

溜め息をついていると、まあ茶でも飲め、と枕元の急須で茶を淹れてくれたが、

「それは俺の茶だろう」

「堅いことを言うな」

「……」

その口調に思い出したのはもういない少女のことで。

同時に思い出したのだろう、廻元も静かに茶を啜って、懐かしいな、と低くつぶやいた。

「……あの年寄りのことは心配するな」

「え？」

「毎日寺に来ておるよ」

「……ああ」

綾野清は明かされた一連の出来事を受け入れなかった、というより、もう朝倉家には一切関わりたくないと言ってよこしたらしい。周一郎の気持ちも、京子や良紀のことも、綾野の処遇も、きっと何もかも清の生きている世界を壊すものでしかなかった、そういうことなのだろう。

「この先を京子と良紀の菩提を弔って過ごすというから、まあそういう納め難いものを納めるのも寺の役目だからな」

破戒坊主でもするべきことは心得ているぞ。

わっはっは、と病院中を揺らすような豪快な笑い声を上げ、

「許してやれ」

「は？」

「許してやれ、あの年寄りを」

「……」

「あれもまた、生きたくて必死なのだ」

「……ああ」

わかっている。

たとえ自分の拒否が周一郎を殺すと思っても、自分が真実から目を背けることがより多くの人を傷つけるとわかっている。

「わかっているよ」

真実を認めないこと、自分以外の正しさを認めないことでしか、生きていけないという世界もまたある、そういうことだ。

脳裏に過ったのは盗まれた金を探して俺の鞆をひっくり返した教師の焦った顔。

認めない、認めないぞ、認めてしまえば俺は自分を疑うことになる、自分の世界を疑うことになる、だから。

「……怖いんだろ？」

「……ほう」

廻元は目を見開いて最後のまんじゅうにかぶりついていた手を止めた。

「怖いよな？」

俺だって怖い。

周一郎の居る世界が。

人間が自分を守るために誰かを傷つけることを良しとする世界が。

「けど、違う世界だって思うから怖いんだ」

翻る扇。

「そんなもの」

俺の中にだってある。

裏切りも憎しみも嫉妬も怒りも拒否も痛みも絶望も嘆きも。
「遮っちゃうから怖いんだ、別ものだって岩を置くからもっと怖いんだ、そこへは行けないと不安がるから。」
「俺だって、汚いさ」
「みっともなくして失敗だらけでいつまでたっても何も実らなくて。」
「……そこの覚悟がな」
「廻元はゆっくり残りのまんじゅうを口に押し込み、茶を一気に飲み干した。」
「怖い怖い」
「ぺろりと唇を舐めて立ち上がり、きょとんとする俺ににやりと笑った。」
「お前さんは、怖い男だ」
「は？」
「知らんか」
「まんじゅうを怖がっているとまんじゅうがたくさん来るのだ。」
「くそ真面目な顔で廻元が言ってますますわけがわからなくなる。」
「まんじゅうの話だったか？」
「それしか話しておらん」
「いや違うんじゃない」
「怖がっていると、天から降ってくる」
「廻元は目を細めてふいに笑った。」
「なのにお前さんには降りようがない、怖いものがないからな」
「は？」
「いやお前人の話を聞いてなかったか、俺は今いろいろ怖いって言ったんだぞ、世界が怖いってのがよくわかるって、そう言ったよな？」
「そうやって救ってやれ」
「あの子の心を。」
「周一郎？」
「怖いものしかない、あの心を」
「や、それはかなり無理……」
「ってか、周一郎が救いをも求めてるとは俺は絶対に思えないんだが。」
「京のぶぶ漬け、というのがあろう。」
「廻元は帰り際にそう言った。」
「あれはあれでちゃんと意味がある、相手にも自分にも侵し難い領域がある、それを守ってそれでも一緒に生きていこうという意味だ」
「取り繕いだとか表裏があるとか悪く言われることが多いがな。」
「しかし表裏など誰の心にもある。それを意識しておくかおかぬか、そういうことだと思うぞ」
「どれほど真正直にまっすぐに生きていても、生死の境に思わぬ選択をしてしまうことがある。こういう事件はそういうものを浮き彫りにする。」
「鮮やかだが惨い」
「現実とはそういうものだ。」
「人は、いとしいな」

「……愛って何だろう」

「は？」

「いや、廻元がさ」

「人はいとしいって言ったんだ。」

「だから愛って何だろうって思ってさ」

「……時々凄い質問をするわよね？」

「そうか？」

「そうよ」

「愛ね。」

「つぶやいたお由宇は少し空を見上げて小さく応えた。」

「側に居続けること」

17.ラストシーン

「滝様！」
「ただいま、高野さん」
「ようこそ……ようこそお帰り下さいました！」
おお。
俺はいそいそと出迎えてくれた高野にちょっと感動した。
「なんか凄く偉くなったかん…っ！」
ごんっ。
「滝……様」
嬉しくて何となく足取り軽く門を潜ろうとして目測を誤り、目一杯門柱にぶつかった。
「……お変わりないですねえ……」
「なんで嬉しそうなんだ？」
いててと頭を撫でながら睨みつけると、高野はなおも笑みを深めた。
「いえ……この半月、もうお屋敷が静かで静かで」
「おい」
「どこからも悲鳴も絶叫も破壊音も聞こえせんし」
「あのな」
「絨毯も美しいままですし、お部屋に至っては塵一つないまま清められた状態ですし」
「げ」
ひょっとして積み重なっていたメモとか下書きとか何か処分した？
血の気が引いて確認すると、ええそっくりすっきり捨てました、と笑顔で返されてくらくらする。
「どうかなさいましたか？」
「いやもうなんていうか、あそこには明日提出期限だったレポートの原稿が」
「……判読不可能なものばかりでしたが」
「わかるの、俺には！」
泣きそうになって叫ぶと、相手がくすくすと悪戯っぽく笑い出しはっとする。
「捨ててない？」
「はい」
私はそのようなことをいたしません。
「滝様は坊っちゃんにとって特別な方ですからね」
それに何より。
「私共が見失ってしまったあの方を、無事連れ戻してきて頂きました」
しみじみとした声音に反論しかけたのを止めた。
「どれほど感謝しても……足りません」
「あ……ああ」
へへへと笑いかけた矢先、
「私の感謝を受け取って頂こうと思ひまして、過去数ヶ月に破壊された数々の精算はなしにさせて頂きました」
「う」
そんなに溜まってた？
おそるおそる尋ねると、真面目な顔で、
「この先五十年ほど無給にさせて頂けるほどには」
「え、えー、だってあの妙な形の壺なんかそんなにしないんじゃ」
「あれはですね」
「……ひえええ」
高野が教えた時価は俺の予想にゼロが六つほどくっついてた。
「もう少し気をつけて頂けると」
「わかりましたごめんなさいもうしません」
「もう一つ気をつけて頂けるなら、今後数ヶ月の破壊分もなしにしてもよろしいのですが」
「決定事項かよ」
「可能性は無きにしもあらずですし」
「……わかった、で、何」
「……」
高野が静かに視線を送って気がついた。
湖の方へ繋がった道、その彼方に小さくたたずむ姿。
「周一郎？」
「お食事を召し上がられません」
「……あの馬鹿」
どついてきてやるよ、それでいいんだろ。
手にしていた鞆を押しつけて身を翻すと、高野は静かに頭を下げた。

湖の側、白い十字架は信仰から来るものではなく、ただ演出された墓標という意味だともう知っている。
ぼんやりと佇んでいた周一郎の足下には珍しくルトが居なくて、それでも近づいていった俺の足音に振り返った周一郎は一瞬真っ青になるほど顔色をなくした。
「滝……」
「なんだ？ 幽霊に見えるか？」
あまり激しい動揺に思わず少し手前で両手を広げて立ち止まる。
『直樹』ならここで飛びついてくるどころだが、そう思っていたけど、やっぱりこいつは飛びついてなどはなくて、ゆっくりとサングラスを押し上げた、その指先だけが微かに震えているのが見えた。
「それとも、俺の顔を『また』忘れたのか？」

「……っ」
泣きそうな、そう言うが一番近い表情が掠めてすぐに消え去る顔、微かに揺れた体が『忘れた』ならば飛びついていける、そう迷ったようにも見えた。
「わかってるはずでしょう」
掠れた声が嘲笑う。
「僕は朝倉周一郎ですよ？」
「そうだな」
「なのになぜ……」
「どうやら来てくれないらしいと諦めて側に近づいていく俺を凝視しながら、」
「戻って来たんです」
「は？」
「だって」
また同じことがあるかもしれない。
冷えた声が怒りを満たして響く。
「同じように命を狙われて」
「今度こそ死ぬかもしれない。」
「なのになぜ」
「前の大家のそこは無理なんだよ」
「今のところ敷金もないし。」
「お由宇のところも今ばたばたしてるしさ」
「お金を貸します」
即座に周一郎は言い放った。
「必要な分を、ああそうだ、今回のお礼に渡しますから、それでどこか適当な所を探してくればいい」
「嫌なのか？」
「え」
「俺がここに居るのは嫌なのか？」
「危ないって、言ってるんです…」
「嫌なのかって聞いてるんだ」
「僕は」
「俺が居るのが嫌なら出ていく」
周一郎がよろめくように支えを求めるように十字架に触れる。
「嫌…です」
「う」
「嫌……だ」
「そ、そうか」
それなら仕方ないよな、しまったちょっと自惚れたなこれは。
「なんだか急に恥ずかしくなって、慌てて弁解しようとした俺に、周一郎が思い切ったように続けた。」
「あなたが傷つく…のが」
「え？」
「僕はもう」
「あなたを絶対失いたくないんです。」
「『直樹』……じゃない、よな？」
「……『直樹』になったら……」
「そう言っていいですか？」
「のろのろ俯く相手にはとつする。」
「夢の中で翻る扇、どちらを選ぶかと廻元が問う、どちらか一人、けどその応えは。」
「…ばかやろう」
「った」
「ばこりと周一郎の頭をどついた。」
「何をするんですか」
「『直樹』になってもお前じゃないか」
「……」
「すううっと見る見る周一郎の顔が赤くなった。」
「それに今度こんなことがあったら真っ先に逃げる、安心しろ」
「…はい」
「二度と危ないことには手を出さない、飛び込まない突っ込まない」
「保証はしないが、とこれは口に出さなかったが、すぐ忘れるくせに、と甘い声で詰られた。」
「……でも……は」
「目元に光るものが揺れた、それをサングラスを押し上げて隠しながら、」
「疲れてるんですね、こんなことが……嬉しいなんて」
「小さな眩きをかき消すように顔を背けて、空を見上げる。」
「日射しが強くなってきた、部屋に戻りましょう」
「そうだ、高野がぼやいていたぞ、お前が飯を食わないって」
「食べてますよ、ちゃんと」
「何を」
「朝何を食べた？」
「だから…食べてますって」
「食べてないんだな？」
「しつこいなあなたは」
「食べてると言えば食べてます、余計な突っ込みしてるとまたこけますよ。」
「足を速めて俺を置き去ろうとする相手に慌てて走り寄る。」
「待てよ、待て、周一郎……どわああっ！」

「滝さんっ！」

引っ掛かったのは自分の足、駆け寄ってきた周一郎が堪えかねたように吹き出し笑い出す。

「もう、本当にあなたって人は」

「…すまん」

見上げた空には明らかなる太陽。

初めて聞く周一郎の笑い声が響く世界で、葉桜を透かす光に夏の気配が満ち始めていた。

おわり

京都舞扇

<http://p.booklog.jp/book/98958>

著者 : segakiyui

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/segakiyui/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/98958>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/98958>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ